嘔吐を止むるには冷たきラムネを飲むに限る。

食傷の結果にて下腹の痛むときには下劑を服むが宜し。

腹痛を治すには、按摩をするを最もよしとす。

總じて食傷は、一二回通利ありて、食物を吐き了れば、大抵は痛みの止まるものにて、痛止まりたれば身心を落ち付け、消化れ易き脂肪分の少なきスープ、糜汁(おかゆ)などを食すればよし。

（下痢）これを止むるには病狀を考へざるべからず。病によりては下痢を止めたる爲めに反つて苦痛を覺え、害となるもの故、其の注意肝要なり。さて下痢を止むるは腹部に温濕布を充て、其の上よりフランネルの樣なる布にて掩ふべし。而して其の熱冷むるときは、再び取かへ、元の如くにすべし。或は腹部に温濕布を施すも宜し。

食鹽を燒きて布片に包み、腹に充つるも効あり。

極輕きは、水餅を食するも効あり。生鷄卵もよし。ニンニク雜炊もよし。

（便秘）これは輕きは小豆一合ばかりを砂糖にて煮て、それを一回に食するなり。必ず通

ず。

小便の不通には、按腹するが最もよし。

（感冒）これは發汗するを第一の良法とす。而して發汗を促すは、珈琲にても、茶にても麥湯にても、葛湯にても、茶碗に二三杯飲み、夜具を被つて寢るなり。又、鷄卵酒を飲みて暖まり、夜具を被るもよし。

（感冒の豫防）前以て風を引かぬやう豫防するには、冷水摩擦が第一効能あり。されども健康者に限ることにて、病体の者は行ふべからず。

（インフルエンザ）これは發熱する者には、アンチピリンの如き解熱劑を用ゐてよし。咳の出るには水飴を舐めるべし。衰脱には極上等の葡萄酒を少しづゝ飲むべし。

頭痛のするには、氷嚢を用ゐる等よし。

一般の注意としては、外氣に觸れざるやう氣を付け、身心を安靜に保ち、食物は淡泊にして滋養分ある物を用ゐ、咽の渴きたるときには果物の汁を汲ふ等なり。但し、あまり甘きもの酸きものは宜しからず。

（眼脈衝）此の脈衝を起せしときは、少量の薔薇水に鷄卵の蛋白を加へたるを用ゆべし。是れ一等の良劑なり。之れを軟かき布片にて眼に着け、熱くなりて乾きたらば、直らに取換ふるなり。

（鼻　血）急性に出血する者には、拳を以て頸部を激しく打てば、不思議に止まるものなり。眼と鼻との間を水にて冷やすも効あり。仰向きて兩手を頭上に上ぐるもよし。酢を鍋の中に吹込むも効あり。足の蹠に芥子泥を貼るも宜し。明礬水を新しき綿に浸し、それを鼻の孔に入れてもよし。婦人ならば乳房、男子ならば陰囊を冷たき布片にて包むも効あり。

（吃逆）これは食指にて兩耳を閉ち、盃に一杯ほどの液体を他人より飲ませて貰へば止る。又、兩手にて肋骨を壓控するも止まること屢々あり。又、鹽水の極鹹きを一杯頓服するも奇妙に効あり。

（耳　垢）これを除くには、先づグリスリンを點じて置き、十分間經たる後、耳掻にて靜に除くなり。最も安全の法とす。

（耳　鳴）これを止むるは、上等の酒か、又はアルコール二三滴を點ずべし。立どころに奇効あるものなり。

（寢　汗）これは鹽水にて身体を拭くなり。熱病の患者は、曹達水にて度々拭くなり。但し拭きて居るうち寒き塲合には、手足なり他の小部なり拭き、終れば其の部分を被ふて他の部分を拭くべし。

（嘈　囃）これは盃に一杯の冷水に、食鹽を小匙に半杯加へて服すべし。若し之れにて治せざれば、

重炭酸曹達ナゲレン、　硫酸曹達小匙に二杯、　陳皮浸液大匙に三杯、

右を調合して、食後二時間位に服めば治ず。

（胃腸病因の頭痛）これは細末炭を小匙に二杯、大盃に半分の水にて服めば、實際胃腸より起りたる頭痛ならば、大抵半時間後に治す。

（齒　痛）激しき齒痛は、フランチルを熱くして面と頸とへ當つべし。又、ケレヲソー、或は龍腦を粉末にして暫く齒に詰め置くもよし。

又、正眞の丁番油を塗るも宜し。

（霜やけ）　牡蛎を漉油にて煉り、痛む所へすり着くべし。又薄荷腦五グラム、樟腦油九グラム、ザロール九グラム、ヨリノン十八グラム、調劑もよし。

（魚骨の咽喉にかゝりし場合）　これは生鷄卵を一個呑み下すべし。大抵は取るゝものなり。

（蟲に刺されたる時）　小さき秋蟲に刺され、非常に刺戟するときには、龍腦油にて局部を擦るべし。

蜂に螫されたるときは、煙草を濕して、螫されたる所に着くべし。痛は直ちに去る。

（毒蛇に咬まれたる時）　例へば足の指先を咬まれたらば、其の足首を細き紐にて緊く縛り、毒の入りたりと思ふ部を剃刀にて切劈き、血を出し了り、斯くして後に醫者に治療を乞ふべし。蛇の毒は急激なるもの故、手後れせぬ樣、早速に行ふべし。切開せざるまでも、足くびを緊く縛ることは、是非忘るべからず。

（火傷）　兒童が炬燵に足を落し、又は爐に轉び落ち、燒火著を掴み、或は鐵瓶の湯沸に吹かれ、沸湯を浴び、直ちに醫者の手當を受けられざる時には、洗濯曹達の溶かし水に局部を浸すべし、輕きは痛まずに治るものなり。重きも斯くして醫者の來るを待つべし。浸す時間は數十分間にてよし。水にて溶かして遲しと思はゝ、湯にて溶せかば速し、眞く冷ゆる故差支無し。液は濃きほど宜し。傷所は大切にして剝がざる樣にすべし。

又一法は、石油か、揮發油の中へ傷所を浸すなり。これも直ちに痛みは止まる。痛いとも輕くなるべし。輕ければ跡は痕にならず。石油よりは揮發油の方が効驗あれども、家毎に常に備へ無きものなれば、石油を用ゐることは記臆し置くべし。

（脚の痙攣）　これは堅き物の上、例へば床板の如きに脚を緊密り接觸すれば治す。

（アルコール中毒）　これは醉ひたる人の頭へ水嚢を上せ、足の蹠に芥子泥を塗るべし。氷手に入らざれば冷水を灌ぎても宜し。又上等の煎茶を飲むも宜し。直ぐに吐き出す。

（河豚の中毒）　これは南天の葉か、若くは枝を細かく切り、煎じて飲むべし。即効あり。

育　兒

育兒は全体懷姙中に始まるなれど、他の眼に觸るゝは產後に始まる。先づ產後生兒の臍の緒

の注意より記すべし。

（臍の緒の注意）　分娩後生兒は六日目か七日目に臍の緒の辷るものなるが、辷りたる後は直ちに消毒したる綿を宛て、擦れぬやうに爲し置かざるべからず。若し血が出で、膿出でたらば直ちに醫者に見せるべし。さなくば危險なり。初生兒の病氣にて最も怖るゝは臍より生ずる病にて、多くは之れに原因す。されば初めて遣はする時の湯も、微菌などの無きや否やに注意するは無論なり。

（マクリを飲ます害）　兒が生るれば直ちにマクリを飲ましむるは古來の慣例なれども是れ甚だ宜しからず。元來マクリは大黄にて製したるものにて下劑なり。初めて出る母の乳汁は新乳とても大黄以上の効能あるもの故、他のものを飲ますとも、母の乳汁さへ飲ましむれば可なり。造化の自然なるに、却つてマクリを飲ましむるが爲めに、胃加答兒などの病を起すことあり。依てマクリは斷然廢止し、若し兒生れて二十四時間内に母の乳汁出でざるときは砂糖を沸きたる湯にて溶かし、それを冷まして少し飲ますべし。

（乳汁を飲まし始むる心得）　母親が兒に乳汁を飲まするとき最も注意すべきは、例へば右の乳を飲ませかけて半分にて又左の乳に替へて飲ますは甚だ宜しからず。右ならば右を飲ませ盡させ、然る後に左に移すべし。何となれば、初めに出づる乳汁は薄くして、濃き乳汁は後に出づるもの故、一方を半分飲ませて又一方を半分とすれば、始終稀薄なる乳汁のみ飲ますやうになり、大に害あるが故なり。

（幼兒と水）　乳汁吳れる親は有れど、水吳れる親は無いとは昔より言ふことなるが、實に幼兒に水は必要なり。生れて滿六ヶ月後は煮沸したる湯を冷まし、小さき匙にて三杯づつ、一日に二三回與ふるを宜しとす。尙ほ夏は汗出る故、與ふる度數を增し、成長するに隨ひて分量を增すなり。

（初生兒を温暖）　初生兒には總じて温暖を必要とす。或は襁褓、腹帶等の直接に觸るゝものは、前以て暖め置くべし。而して室内の温度は、列氏十五度を常に保たしめ、湯婆と室内寒暖計とは、小兒の寢室に最も必要なり。尙ほ生後二週日を經たらば、温暖なる天氣の日に、折々小兒を屋外に出だすを宜しとす。

（幼兒と温浴）　兒生れて一ヶ月間は、毎日温浴せしむべし。大小便にて臀部不潔になる故清

潔に爲し與へざるべからず、且つ温浴は血の循環をよくして發育上頗る有益なればなり。

（幼兒と睡眠）　幼兒は眠るほど宜しく、初めのうちは乳汁を飲んでは眠り、空腹になれば眼を覺まして泣き、腹が充つれば又眠る。壯健なる兒ほど能く眠るものなり。此の時母又は乳母の添寢するは宜しからず。小兒には必ず一の臥床を與へ、之れには輕く温かなる毛布を被せ、枕は餘り高くなきをさすべし。低き方が宜しきなり。

（襁褓）　これは小兒には最も大切なるものにて、臍及び腰部に當るものなれば、從つて病氣も是れより感染すること多し。然るに衆人は着古しの浴衣などを用ゆ。古き物を用ゐるは經濟なれども、能々消毒せざれば危險なり。尙又小兒の便を拭くとて、袂より反古など出して用ゐる人あり。斯るものは病毒を傳へ易き故に、決して使ふべからず。

（口中の掃除）　小兒に乳汁を飲ませる間は、必ず口中の掃除を忘るべからず。徒の水にても又成べくは硼酸水か曹達水にて、毎日洗ひ與ふべし。

（牛乳の育て方）　幼生兒の最良の營養は、母の乳にあれば、成べくは母の乳にて育つべきなれども、万一不幸にて母の乳出ですと、又、乳母にも差支ゆるときは、已むを得ず牛乳にて育てざるべからず。それに就ては充分の注意を要す。元來牛乳は、脂肪多きを宜しとすれども、幼兒には濃きよりも淡き方適當にて、先つ脂肪百分の三プロセント以上四プロセント位を小兒用とすれども、實際それにては尙ほ濃きに過ぐる故、始めは水を混和して淡め發育するに隨ひて濃くすること肝要なり。

其の淡め方は、生れてより二週間位迄の兒には、牛乳一合に水三合、それより二週間以後二ヶ月間位迄は、牛乳一合に水二合、それより五ヶ月迄は牛乳と水と等分、七八ヶ月迄は牛乳二合に水一合の割合に漸々濃くし、それより後は牛乳のみにて差支なし。但し牛乳は糖分少き故、純良の砂糖を少々加ふるを宜しとす。砂糖は牛乳一合に二匁の割合にて、水は煮沸して、一旦湯にして冷ましたるを用ゐるべし。

（與ふる牛乳の分量と時間）　幼兒が泣きさへすれば無やみに乳汁を飲ませる親あれど是れ甚だ宜しからず。必ず一定の時間を隔て〻飲ませること肝要なり。これは母親の乳汁にて育つるにしても大切の事なるが、殊に牛乳にて育つるに就ては、最も其の分量と時間とに注意せざるべからず。即ち生後一週間は一回に三十グラムに其れを二時間隔て〻飲ましむる

を適當とす。八日目より一ケ月間は、一回に六十グラムを二時間以上隔てゝ飲ましめ、又二ケ月以上三ケ月迄は、一回百五十グラムを、二時半間乃至三時間隔てにし、三ケ月以後七ケ月迄は、一回に百八十グラムを三時間隔てにし、二百日目位よりは、一回に二百グラムを適當とす。

（牛乳の溫度）　幼兒に飲ますする牛乳の溫度は、躰溫以上即ち三十七八度より四十度位が適當にて、それより熱きも冷たきも宜しからず。

（牛乳の消毒法）　牛乳は必ず十五分間沸騰せしむること必要なり。又防腐器を使ふも宜し。防腐器は大抵の都會には販賣す。これは壜の口に護謨の蓋ありて、煮沸すればシックリ着きて一寸は放れず。壜の口を開くれば黴菌の入る恐れある故、飲ますする時の外は開くるべからず。

（乳離れ）　これは突然離すべからず。何にても他の適當なる食品を、乳汁の代りに毎日一二回づゝ與へ置き、漸々に離すべし。斯くして離せば母にも子にも害は少なし。即ち七月目頃よりは牛乳をそろ〳〵飲ませて味を覺ゝさせ、漸々量を增し、母の乳汁の方を少くなしつゝ、次第に離すやうにするがよし。

（副食物）　普通は生後九ケ月頃より始めてよし。壯健なる兒にて、七八ケ月目に牛乳一回二百グラムにて尙ほ不足を訴ふるときには、副食物を與へて差支無し。牛乳ばかり殘り、澤山に飲ませば、胃擴張を惹起して宜しく無し。九ケ月目頃より、先づ澱粉質の物を始むるなり。澱粉質物とはヲモ湯などにて、それを三十グラム（盃に一杯）づゝ一日に二回與へ、それより一週間後、粥に少し食鹽を加へ、盃に一杯位づゝ一日に二回與へてよし。それよりは鷄肉ソップを三十グラム、一日に一回與へ、次で二回、十ケ月目よりは、朝はソップの粥、晝は白粥に魚、晚は鰹節の雜炊が宜し。而して魚は、あゝ鯛か、鰈か、魴鮄か、比目魚などを宜しとす。

（齒の生時の注意）　小兒の齒の生るときには怒るものなり。其の際には蔷薇密を求め、それにて齒莖を擦るべし。これは小兒の氣を和ぐる爲めにて、且つ齒の爲めにも宜しきなり。

（小兒の病氣を知る法）　小兒は物を言はぬ故、何處が惡きや知れず、病氣に依りては醫者にても一寸判斷に苦しむ位なれば、素人に知れにくきは當然なり。併し病氣に依りて夫々徵

候ある故、能く注意さへ爲し居れば、何處が悪い位は素人にでも一通りは知れざるべと無し、其の一斑を言へば、

一　小兒が飲みたる乳汁を吐くか、頻りに欠伸をするか、或は下痢するか、大便泡立つか、それに粒の樣なるものあるか、又は無やみに泣きて怒るときは、何れも概して消化不良の爲めにて、胃腸の悪しきなり。此の原因は乳汁を飲まし過ぎたるなれば、分量と時間とは、堅く守らざるべからず。

二　股と腹とを引着けて泣くは、腹痛の證據なり。足を延ばせば筋肉張り、一層痛むを以て、足を屈めて腹部の筋肉を弛むるやうにして泣くなり。

三　水涕が出で、嚏を爲し、或は咳し、且つ熱のあるは、風引きたるなり。熱が有れば小便の色は赤黄色になるものなり。熱をば計るには、普通の檢温器を液の下に入れるが、小兒は動く故、股の間へ入れ、襁褓にて包み、而して知るを宜しとす。

四　感冒同樣に嚏し、或は水涕出で、發熱し、咳出で、且つ涙出で、又熱の意外に高まりて容易に去らず。兎角するうち細かなるブツ〳〵顏面に發するは麻疹なり。麻疹は一定の時期來らざれば全快せざれど、寒き風に當てざるやう、且つ浴湯せしむべからず

五　發熱し居る小兒の咽喉を見て、若し咽喉白ければ窒扶的利亞なり。それを知らば早速醫者の診察を受くべし。

六　熱無くして咳のみ出で、數日經過するも止まず。時々痙攣けたる樣の咳をするは百日咳なり。

七　感冒の末に、咳得られざる樣になり。呼吸困難に見え、或は夜中戦に息苦しく見えるは、口頭加答冒なり。斯るときには熱き湯を飲ませ、且つ手拭か布片を熱き湯に濕し頸を暖むるべし。

八　元氣よく遊び居る小兒の俄に怒り、或は突然物を投げ、又、人の肩を枕にする樣に寄り懸り、又は怒れ唸り、或は日に一回乃至二回も乳汁を吐き、それが二週間も續き益々增進するは、慢性の驚風なり。驚風は概して生齒期より起るものにて、最も注意せざるべからず。

九　素人は小兒に脚氣などあるものかと思へども、實際哺乳兒にも種々有るものなり。

尤も小兒の脚氣は醫者には些しも知れざるものにて、下痢を爲し、乳汁を吐き、氣分あしく怒などする故、消化不良症にも見ゆるなり。斯るときには其の母親に診察を受け、母に脚氣の氣味あらば、小兒も矢張り脚氣なれば、母親の乳汁を飲むを止めざれば危險なり。

以上の病氣は哺乳期より小兒期に多し。哺乳期とは生れてより滿一歳までの間を云ひ、小兒期とは滿一歳より五歳迄の間を云ふ。小兒は大人とは異なる故、小兒科の醫者に就て治療を請べし。

（小兒の咳逆）　これは帶を締め過るより發すること往々あり。注意すべし。

（小兒の下痢止）　これにはヲモ湯を用ゆべし。大に効あり。

（小兒の空腹）　これは大人の空腹よりも害ある故、晝は四時間毎に食物を給すべし。而して夜間は寢かす暫く前に、温かき牛乳一杯にビスケットか何か消化し易きものを與ふべし。

（小兒と野菜）　滋養にとて牛乳又は肉類のみを用ゐるは、未だ營養の方法を知らざる人のする事なり。肉類には野菜を雜へてこそ營養に叶ふなれ。依て蘿蔔、胡蘿蔔、菜、芋等の副食物を添ゆることは必要なり。

（神經質の小兒）　これは決して叱り、或は嘲るべからず。能く其の擧動に注意し、異りし兆候を認むれば、良醫の診察を受くべし。

（如上の他小兒取扱上の注意）　小兒には飲食せしむること勿れ。食物を欲せざるときは食慾を誘引すること勿れ。甘き物糖菓の類は扣目に與ふべし。十二三歳以下の小兒の頭髮を結ふこと勿れ。靴の大きさ、又は形ちに注意し、小兒の足を拘束すること勿れ。幼兒には常にフランネルを着せ置くべし。殊に夜中を然りとす。身体の清潔を忘るべからず。頭腦に非常の冷熱を感じしむべからず。

婚禮諸式

婚禮の式は、結納、嫁入、婚禮後、婚入、里開きの次第あり。其の結納の次第は、結納の送り方、鼻の方よりの返體、結納内披露の禮、結納持參使者の禮、受方にて使者受の禮、坐敷へ進物の飾り樣、使者と宰領人との饗禮、媒妁人への饗禮、

里出の次第にては、

式日の定儀、嫁の調度の定儀、婚禮式日の翌日部屋見舞音物の定儀、媒妁人より調度披露の式、調度送り方順次の定儀、調度受取渡しの禮、使者と宰領人とへの饗禮、里出の盃の禮、

嫁入の次第にては、

嫁迎への使者の禮式、嫁の里方にて嫁迎使者への饗禮、婿方待女房の定儀、神前床供物の式、婚禮式日の定儀、嫁入行列の定儀、嫁の調度飾の定儀、婚禮式日婿の禮儀、嫁を案内する禮、休息の室にて嫁支度の定儀、盃事の禮式、長熨斗鮑の進め樣、一同祝の禮法、嫁の土産物披露の式、引渡しの膳進め樣、雜煮膳の進め樣、吸物の定儀、引渡し膳より次々膳の進め樣、三方の持ち樣、進め樣、下捨土器の進め樣、本酌八幷に加へ役の禮法、三々九度の盃の爲し樣、結酌の爲し樣、引渡し、雜煮、吸物等の膳の揚げ樣、色直しの式、待女房本酌加への挨拶、婿の兩親と嫁と盃の禮、婿の兄弟姉妹と嫁と盃の禮、色直し盃事の式、膳の進め樣、島臺の進め樣、取肴の取り樣、總客盃事の禮式、本膳高盛の定儀、高盛飯の食ひ樣、當夜寢所の取り樣、

婚禮後にては、

翌朝婿嫁膳部の定儀、部屋飾りの式、里方より贈り物の定儀、婿方音物受の禮式、嫁方部屋見舞品受の禮式、婿方より部屋見舞客への饗禮、祝客への饗禮、婚禮披露强飯の定儀、

皆子餅の定儀、進物の定儀、

婚入の次第にては、

婚入の禮式、舅方坐敷飾の定儀、婿入盃事の式、婿の土産物の定儀、

里開の次第にては、

嫁里入土産物の定儀、里方にて里入附添人の饗禮、里入披露の式、里見舞の定儀、嫁の婿方へ歸るとき土物産の定儀、親類知音へ嫁の廻禮、

歐米諸國の婚姻式は、其の初めて我が邦の如く見知らぬ者が一度の見合にて定むるに非ず。問衾前に双方互ひに見知り合ひ、將來夫婦たらむことを互ひに許し、精神上のみの結婚を爲したる上にて、肉体上の結婚を執行ふことなり。されば肉体結婚前に、豫て見知らぬ者どう

しならば、嫁入る女子は、先づ五週間七週間とは、嫁は婿の家に寄寓し、婿の兩親に事へ、一婿の兄弟姉妹にも眞實の骨肉と如くに接し、婿に夫として事へ、未來夫婦と期する男女兩人は、性質、氣風、行狀等を互ひに識り合ひ、試驗し合ひ、互ひに結婚すべしと決心すれば、双方男女は兩親に告げ、親戚へも告げ、告げたる先の者皆々と得心の上、婿嫁共に公證役場へ行きて結婚の手順をするなり。若又双方意氣相投せざれば、此の期間に破談するなり。公證役場は、最寄の公證役場へ行くなり。これは婚禮當日より三日前に行ふことゝす。即ち結婚の公證を囑託し、公證人は双方の申出を聞きて條約書の起草に着手し、婿と嫁とに對して、明日何時を期し、當役場に於て貴所等の結婚條約書署名式を執行ふべきに付、父母親戚同伴にて出席せられよと申し渡し、翌日に至れば婿と嫁とは各々父母親戚等と打揃ひて赴き公證人は皆々を別室へ呼入れ、條約書を讀聞け、條約書に異議無くば、直ちに署名せしむるなり。其の禮式は、婿先づ起立して嫁に對し、頭を少しく低くし、會釋して署名し、其の筆を嫁に授け、嫁は筆を受取りて署名し、其の筆を婿の母に渡し、婿の母は署名して嫁の母に筆を渡し、嫁の母より婿の父へ、婿の父より嫁の父へと順次に署名せしめ、終りて双方の親戚を呼入れ、年齢の順次に年長者より年少者へと署名せしめ、公證畢り、寺院又は料理店に於て結婚式を擧ぐるなり。さて公證役場へ赴くときは、婿嫁ともに白色の衣服を着するなり。

寺院にても料理店にても、式場へ出づるときには、嫁は桃色編子の服を着、水晶の小玉の胸飾を爲し、頭には白色の花簪を挿みたる被衣（かつぎ）を被、手に扇子を持つなり。而して式場へ赴く行列は、大抵馬車六輛にて、第一馬車の車室の後部には、左に嫁の母、右は嫁、前部には嫁の父乘り。第二馬車の車室の後部は、右は婿、左は婿の母、前部は婿の父。第三馬車は車室の後部に介副婦、前部には介副男、第四馬車には公證人、第五第六馬車には双方の親戚等の者乘りて行き、著すれば寺院の僧は悉く式場へ招き、婚姻の祈念を爲さしめ、暫時經て本堂の內陣にて、音樂を奏するを合圖に、婿は介副の男に引かれ、嫁は介副の女に引かれ、扣席より本堂に出で、內陣の正面なる祭壇に上り、婿嫁共に十字架を拜禮し、拜禮終れば宣教師は新夫婦に對し、一生涯能く苦樂を共にし得べきや否やと問ひ、夫婦は必ず守ると答へ、宣教師はそれを聞き、其の趣きを侍者に命じて帳簿に記させ、更に夫婦に其の傍らへ署名させ

式終りて他席にて祝宴を開き、當日の來客一同を饗するなり。料理店にて式を擧ぐるは略式なり。縁談定まれば式以前に尤も結納を取かはす事にて。婿方よりは白色の生花一束に婿の名刺を添へて嫁方へ贈り、嫁方にては婿方の兩親と婿とを自宅へ招き、結納披露の内緣を開き、此の時婿は持參の指環を嫁の左手の第四指に嵌め、嫁よりは自己の所有の時計の鍵に附くる飾か、或は自己の毛髮を收れたる腕輪かの二種の内なる一種を婿に贈るなり。而して結婚後は、二三日經たる後、凡そ三十日間、新夫婦ずれにて新婚旅行を爲し、其の後は兩親と別居するなり。

美身術

（自然美と人巧美）　日本婦人の白粉をべタ〳〵塗るは、著しく眼に着く。これも濃艶と言はゞ濃艶なれど、斯くては婦人の氣品と云ふものを無くし了る。殊に口紅の如きは最も拙劣にて、決して粧飾に注意したるものとは言へず。

西洋婦人は、一寸見たるのみにては、粧飾を加へ居るか、然らざるか、知れざるほどなり其の眼、其の頰は自然の血色と少しも異らず。されど最も粧飾に力を籠め居り、深く苦心を凝らしむる結果斯の如きなり。要するに日本婦人は粧飾を粧飾として居れど、西洋婦人は粧飾を以て自然に同化することを力むるなり。

故に一言にして言はゞ、日本婦人の粧飾は、美を加へずして、却つて美を傷くるものと思はる。口紅の如きは、其の最も著しき例なり。

（婦人の一大謬見）　以上は西洋婦人と、日本婦人との粧飾の巧拙を擧げたるが、粧飾は美貌の最上的と思ふは大なる謬見なり。粧飾いかに巧妙なりとも、粧飾は矢張り粧飾にて、美貌の神髄を得るには至らざるなり。思ふに眞の美貌は粧飾より來らずして、健康なる身体より來るなり。されば虛弱なる身体の婦人に美貌なる者ある理なし。縱ひ輪廓は十分なりとも、身体虛弱なれば表情を缺き、憂鬱に沈むは勢ひの免れざる所なり。縱し青春の時には、或は美貌なりとも、年の老ゆると共に、其の容色は索然として衰ふる、所謂る美人の運命長からずして、悲慘に終る者多きは論より證據なり。然るに日本婦人と言はず、西洋婦人と言はず、美貌を望むは嘉みすべきなれども、美貌の第一義たる健康に注意せずして

只管粧飾の末に走るは甚だ不了簡なることにて、婦人の一大謬見とす。蓋し健康を其方除にして粧飾の末に走るは、恰も土地の肥瘠を顧ずして美禾を得んとするに似て、愚の骨頂なり。故に美貌を得んとする者は、先づ第一衛生に注意せざるべからず。

（美貌の第一義）　美貌の第一義は既に述べたる如く健康なり。然るに目今婦人の美術とする粧飾を見るに、衛生と兩立せざるもの多し。特に粧飾の第一位を占むる白粉の如き、瞥見せし所にては美は美なれども、皮膚を粗雜にして、年老ゆるに縱ひ醜容露る。美人薄命なることも、今日の粧飾法にては必然の結果にて、或る意味より言へば、此の白粉の如きも薄命ならしむる一部分とも思はる。這は極論なりとするも、今日用ゐらるゝ粧飾法の衛生と兩立せざる一事は、何人も異議なき所ならん。然も東京の婦人は美貌の第一義を忘れ、粧飾の末に走り居るは、慨嘆すべきことならずや。

（第一の注意）　爰に東西婦人の陋見を破し、衛生と兩立する新美貌法を說き、教育ある婦人の參省を得んと思へり。美貌を得んと欲する淑女よ。卿等は美貌ならんと欲せば、先づ男子と同樣の食物を食すべし。美貌法の第一條は是れなり。西洋婦人には其の弊少なけれど日本婦人に於ては、男子は男子、婦人は婦人、個々別々にて、婦人は常に粗食に安んず。斯くては如何に衣服の美に全力を費すも、食物にして粗惡ならば、到底美貌の人になること能はず。之れに加ふるに、婦人の性格は、生兒の体格に影響すること大なるが故に、今日の如き狀態にては、健全なる兒女を得ること能はざるなり。

男子と對等の食物とは、滋養分を含める食物を謂ふなり。（即ち蛋白質物を多く含む物）而して身体に害ある酒、煙草、消化あしきものは避くべし。用ふべきものは、米の飯、鷄卵、鷄肉、魚類、野菜、果實を適當に食すべし。牛肉、豚肉等は宜しからず。特に鷄卵は筋肉の發達に稗益多きを以て切に勸む。魚肉も燐分を含めるを以て、頭腦を明快ならしむるの効あり。精神を勞する婦人には、極めて有効ならんと思ふ。野菜は、胡蘿蔔、胡瓜の如きは不可なれども、其の他の野菜は大抵良し。特に大豆、小豆、鶉豆、虹豆などの如きは最も可なり。蘿蔔は大なる効なしと雖も、葱は益あり。果實も大抵健康に益あり。特に西洋茄子は鐵を含めるを以て血の不足を補ひ、林檎は、燐分を含み、苺は鐵を含み、蜜柑は皮膚を滑かにし、葡萄は便通に効あり。但し葡萄は下劑故、多量に食すべからず。尙又

總じて果物の核は過ちても食すべからず。食物の量は八分目に止むることなり。酒、麥酒、葡萄酒等は健康に害あり。珈琲・茶の如きも神經を刺擊して不眠疾に陷ることあり。食後は一旦沸騰したる白湯か、又は麥湯を一杯ぐらゐ飲むべし。消化を助くる益あり。

（第二の注意）食物の注意は既に述べたり。次には氣を靜にして熟睡すべし。されば夜は早く臥床に入り、朝は早く起き、少くも八時間寢ね、仰向に寢ず、横に寢ね、夫婦同衾、或は兒童と共に寢ず、寢臺を用ゐれば、出來得べきだけ空氣流通を良くし、交換に力め、斯くして氣を靜に熟眠するなり。

（第三の注意）少しも毎週二回は湯に入り、身体を清潔にすべし。熱き湯は皮膚を害する恐れある故、餘り熱からざる程度の湯に入るべし。冷水浴も皮膚を硬くするもの故よし。食後二時間は入湯すべからず。髮など洗ひたるときは手拭にて水氣を去るべし。是れより風邪に罹ることある故なり。

（第四の注意）新鮮なる空氣を呼吸すべし。これは滋養物を食すると同一の必要條件にて、西洋婦人は常に空氣に就て注意し居れども、我が國の婦人は美貌を欲するに拘らず空氣の注意疎かなり。而して空氣を呼吸するには、口よりせずして鼻よりすべし、斯の如くして肺に怠らざれば、隣席に呼吸傳染の病者ありとも感染せず。又、讀書をするときには、光線に注意することは肝要なり。

（第五の注意）精神を平和にすべし。此の注意は、心配、嫉妬・憤激、過度の喜悅を避くるなり。美貌を欲する者は、啻に健康を害するのみならず。大禁物なればなり。

（第六の注意）適度の運動を爲すべし。室内運動として、亞鈴などは適す。又、規則正しく散歩すべし。何分にも精神を快活にして物に滿足するやうに在るべし。左に以上の所說を概括して健康上の心得を擧げん。

一　良心に恥づべき行爲を慎む事。　二　激怒せざる事。　三　憂鬱の思念を去る事。
四　心配せざる事。　五　不平の念慮を去る事。　六　猜疑嫉妬を排付する事。
七　過度に喜ばざる事。　八　人を恨まざる事。　九　懶惰ならざる事。
十　貞節を守り情慾を制する事。　十一　健康に害ある飲食を爲さゝる事。
十二　過度暴飲せざる事。　十三　食物は急いで食せず咀嚼して食する事。

十四　新鮮なる空氣の充滿したる室内に眠食し、又は起臥する事。

十五　一日に八時間乃至九時間熟眠する事。　十六　身體を清潔にする事。

十七　不健康なる家屋に住せざる事。　十八　不健康なる職業に就かざる事。

右の十八ケ條を守れば、眼は清しく、頰は豐かになり、自然の美貌を保つこと必せり。

化粧法

士は己れを知る者の爲めに死し、女は己れを愛する者の爲めに粧ふ。

無論、美貌の第一義は健康なるに、其の第一義たる健康に注意せずして、只管粧飾の末に走るは誤りとは云へ、しかし玉磨かざれば又光りなし。

されば化粧は又實に婦人の大切なるつとめの一たりで、さて身じまひの意義たる、身のまばりを奇麗に繕ふにあれば、身体を清潔にするは勿論、從ふて多少白粉の入用もあり、燕脂の必要もあり、また衣服も粧はざる可らず、髪も飾らざる可らざるが。然し心得ゆべきは程を知る事にて、如何に化粧が大切なりとて、醜者や女郎の樣に朝から晩までおしやれ計りして居ては程が過ぎますし、と云つてまた突飛な女學生の樣にわざ〳〵髪をボウ〳〵と亂して脂ぎつた顏で人前へ出るのも、女としては甚だ愧づべきことゝ入す。

さて容色は如何に整ふべく、如何に磨くべきかと云ふに、まづ

△皮膚を清らかにする事　の必要なるは云ふまでもなく、而して皮膚を清らかにするは、一無論湯と水なり。併し湯と水とは如何に使用すべき、皮膚を清めると云ふ外に、尙一歩進んで麗はしくせんとするには、果して如何にせば宜しきかと云ふに、總て熱き湯に浴すること の衛生に不可なると共に、又自から美を害す、熱き湯に浴した直後は、心地もよく、皮膚も亦一時櫻色となりて美はしく見ゆるも、其反動は寧ろ身体を疲らし、自然色澤をも失ふものなれば、熱き湯よりは、微溫湯若しくは冷水に冷するを可とす。

但し熱き湯も時には必要なり、例へば夏の暑い時、これより着飾つて外出するとか、又客席に出で食事などせんとする場合には、先づ手もつけられぬほどの熱き湯にて十分顏を洗ひおけば、當に心持のよさのみならず、克く皮膚の毛穴を清めて、暑さのため顏をあかくすることか、汗が流れて困るなど云ふ如きことなし。又外出して歸へれる時も、直に熱き湯にて皮膚

を洗ひおけば、疲れを休め氣力を回復す。炎暑の候寄席劇場等に行ける人の、頻に手拭を冷水に搾りて顔又肌を拭ふを見るが、彼は却て熱を增し顔をあかくするものなり。

△顔を洗ふに就ての注意　さて顔を洗ふに就ては十分の注意を要す。往々手拭の類にて恰も器物を研くが如く力を極めてゴシ〳〵擦る者を見るが、此は大なる誤。言はゞ手拭てふ鑢もて美といふ貴重なものを削りつゝある也。自然は吾人に指てふ貴重なるものを與へ居れりこれもて顔を洗へば、海綿よりも手拭よりもフランネルよりも優るなり。先づ兩手を湯に浸して、其指を確手と而も穩かに顔にあて幾度も顔の全部を擦するなり、而して目、鼻、口の周圍は最も塵埃の溜り易きなれば特に注意して擦るべく。右の法にて朝夕二回位よく洗ひ、而しでその洗ひし后、手拭にて水氣を拭ひ去り、更に絹の手巾にてジッと顔を押へ、柔かに幾度となく擦るなり、此は實に顔の色澤を宜くする上に非常に効あるもの也。

△石鹸と米糠　近時石鹸でなければならぬ如くなり居るが、粗惡の石鹸を甚だしく皮膚を害するものなれば、妄りに石鹸を使用するものよりは、寧ろ米糠の方安全にして有効あり。併し當今は米を搗くに搗砂又は火山炭など用ゆ、かゝる糠は用ゆ可らず。

△頭髮の注意　古來髮容と云ひ、髮は容色の大部分を形成するものなり。隨て婦女子の頭髮に多くの苦心を重ぬるも當然、たとひ束髮にせよ島田、丸髷にせよ、髮の出工合又は膨らみ工合にて顔の釣合の好くも惡くもなるものなれば、十分の注意肝要なり。

△齒の注意　如何に容色美はしくとも、齒の注意を怠りて汚穢ならんには、折角の容色も滅茶〳〵なれば、深き注意を拂ふべく。歐米の注意深き婦人は、非常に齒に注意し、朝起きると磨く、食事の度毎に磨く、寢る時に磨く。然るに日本の婦人は概ね朝一度よりは磨かぬ、餘り度々磨くを手數ならんも、食事を了つた後には、せめて口だけにても嗽ぐべし。諸嬢よ、人が嫣然笑つた時、眞白く美しき齒の見ゆるは、洵に其人の身だしなみの思はれて、其容色に一段の光輝を加ふにあらずや。

服裝心得

△服裁の秘訣　は「完全なる質素は完全なる美麗なり」てふ一句にあり。蓋し如何な高價の品にても餘り花やかにハデ過ぐれば價値を失ふものなれば、成べく人目に注視せられざる程

處に服裝すべく、換言せば目立たぬ樣にすべし。即ち自己の年齡と顏色と体軀とを良く斟酌して適當の色合を見計ひ。好く似付くガラを擇ばざる可らず。第一男子は服裝の誇示といふを避けざる可らず、誇示とは人目に觸れやすき特殊の色柄や附屬品を是れ見よがしに着けることにて、啻に見苦しきのみならず、其人の品性の野卑を表現するものなり。尤も婦女子に在ては、多少の華美は必要なり、然し虛飾は男子を通じて不可なり。尙ほ注意すべきは、總じて丈(たけ)伸くして肥ゆたる者は、成べく直なる縱縞か、すらりとせる模樣柄合似つかしく、色白からぬ者は納戸色などを避くべし。

△禮服　男子の大禮服には、文武官により位階によりて夫々區別あり。而して大禮服につきて用ひらるゝは燕尾服及びフロックコートなり。されど羽織袴も略禮服として用ひらる、」今和服に就て男子禮服の一斑を記さんに。

冬季は、羽織は黑羽二重又は黑斜子五ッ五紋附に、繻珍或は綴子の胴裏を用ひ、紐は白絲の丸打なり。衣服は黑羽二重五つ紋の小袖に、下着は白羽二重の無垢、袴は仙臺平又は茶宇。衣服を縞物とするは略儀なれど、若し爾かする場合は、成べく細かき微塵樣のものを選ぶべし。

夏季は、羽織は絽、壁絽又は羽二重にて、黑の五つ紋附、着物は黑絽、越後縞又は羽二重、又は藍氣鼠の五つ紋、袴は絽又は仙臺平、五泉平の棒縞にして、帶は博多織、繻珍織又は綴(つゞれ)の草帶とす。

旅行案內

（旅行の用意）何處にても旅行せんと思はゞ、先づ第一着に其の地方の地圖を調べ、又有名の所には必ず其處の案內記あるものなれば、豫めそれを見置くべし。さすれば大略の方角及び順路、名所は何處々々、旅館は何某なることを知り得べし。

次には最近の旅行案內を求めて、汽車汽船の發着時間を調べ、又其の巡り見んと思ふ所々は何んの驛より至ると言ふ事を知り、道遠ければ一泊せざるべからず。又逗留の場合も有るべし。夫等の日數によりて費用を豫算すべし、但し此の費用は、人に依りて大に相違あり。例へば健脚にて山坂を苦にせぬ人は俥もいらず、歩行困難なれば俥代分外に高くても

是非なきが如し。兎に角我が身相應の處にて相場を立つべし。之れに往復の滊車賃かけて假令へば凡そ三十圓と見積もれば四五十圓、五十圓と積もれば七八十圓を要すと思はざるべからず。是れ不時臨時の出來事なきを保せざればなり。其の金の差支なきや否やを確めたる上ならでは、ウカと旅へば出られず、既に出て後、金の足らぬほど心細きことは無し

多く持ち行き、成るべく少く費ふを旅行の巧者とす。

（旅支度の事）　さて地理も明らめ、旅費の都合も出來たれば、いよ〳〵支度にかゝるべし。旅は成るべく荷物を多くすべからず。必用の外は一品にても少きを可とす。されど又行先に依りて、存外不自由なる事もあれば、一概には言へざるが、大抵都會及繁昌の地は、萬事整頓しあれば、何も持行くに及ばず。唯金さへ充分なれば、決して不自由を感ぜず、之れに反して僻地に至りては、縱ひ金を出して買はんとするも無き物多し。故にさる地方へ行くには、能く考へて不自由なきやうに、必要物を取揃へて持行くべき事なり。必要も人に依て異なれど、先づ普通は、

一　蝙蝠傘、　一　履物、　一　足袋三四足、但し内一足は新しきもの、他は草鞋足袋に

て、途中にて其まゝ捨てゝも惜からぬ物、總て遠足の際には裏返してはくべし。縫目に摺れて指傷むこと有ればなり。　一　跡掛紐、　これは何にても一尺四五寸あればよし、草鞋をはき慣れぬ人は、足を喰はるゝことあり。藁草履に跡がけすれば其の憂なし。

一　手拭　二三すじ、　一　化粧具、　成べく小なるを撰ぶ。年增は櫛ばかりにてもよし

鏡は大抵の家に有れば、必しも所持するに及ばず。　一　使ひ紙、　一　半紙、

一　名刺、　一　扇子、　一　磁石、　一　手帳、ゴム付木筆付　一　墨口、

先づ以上を身に添へて持つべし。時計は停車場及び旅館に必ず有れば、持たずとも差支無し

持てば却つてネリの恐れあり。指輪、簪の類、人目を惹く物は持たぬがよし。

一　糸針、　一　小刀、　一　錐、　一　留針、　一　はがき、　一　封筒、　一　卷紙

一　郵便切手、　一　薬、寶丹即効紙等、　一　耐風マッチ、　一　ゴム引裏の袋、

これは濡れたる物を入るゝ爲にて、夏季旅行には殊に重寶なり。但し旅宿に着きたらば裏返して干することを忘るべからず。　一　油紙、大小二枚、大は衣類の外を包み、小は袋中に入れ置くなり。　土産物を買ひたるとき、大に間に合ふことあり。一　袱包、物を包み

たる外、別に二ツばかり用意すべし。臨時に入用あるものなり。

一　紐類、二すなわち三すち、是れ亦不時の用意なり。

斯く書立つれば數多けれども、何れも嵩張らぬ物ばかりなれば、悉く信玄袋に入るを得べし但し入るゝに混交にすべからず。各々類を分ちて、紛れざるやうに色分すべし。例へば葉書封筒・郵便切手は白紙に一包にして半紙の間に挾み、小刀錐等は木綿の小裂に包み、藥は藥袋紙に、其の他何々は赤き紙に、何々は青に、又何は反古にと色分するなり。斯く爲し置けば、一袋中に有りても直に取出さるゝなり。

（旅行案内書の事）　此の書籍は持つとも、要する際に一々繰返し見るは甚だ煩はしければ豫て其の日〳〵の行く道筋瀛車發着等を半紙の横長に折りたるに書抜き、それを帶の間に挾み居れば便利なり。

（衣　服）　紐末にても新しきを可らす。美服にても古きは、思はず破損することあり。表は絹にても、裾廻しは木綿を可とす。身分に依りて一概に言はれねども、普通は秩父縞、節米の類、羽織も之れに準じ、寒がりは成だけ着込みて荷を輕くし、暑がりは成べく薄着して、身の動きよき方よし。

併し京阪地方への旅行者は、着替の上等服を用意すべし。京阪と云ひても、殊に大阪は美服を競ふ風俗なれば、旅宿にても茶店にても、客の衣服を見て待遇を上下すること甚だしく又旅宿より知己を訪ひ、芝居等を見物するにも、美服にあらざれは車夫にまで侮れて口惜しき事あり。

奥羽地方は人氣質朴にて浮華ならざれば服美を要せず、されど北へ進むほど時候寒冷なれば、其の用意すべし。尤も仙臺までは格別變らず。盛岡となれば餘程冷氣にて、青森は今二段進み、海を航りて函館に至れば、八月頃の盛夏にても、暑きは日中のみなり。朝夕は單衣にて冷つくこと多し。

中國より九州へ掛けては之れに反して、總て暖氣なれば、秋より冬かけて行くによし。總じて時候の定まらぬ頃には、眞綿の大袋なるを、小さく圓めて紙に包み、紐にて括りて袂にでも入れて持つべし。そして冷つく時は、それを袖口より入れ、脊に延ばし、肩より前へ越して胸を包むべし。斯くすれば、衣服を重ぬるよりも暖かなり。斯くして暑くなりた

らば、取り去りて元の如く片付け置くなり。至極輕便重寶なり。

（名所古跡の事）　旅に出たらば、名所舊跡は行かるゝ限り、少々無理しても見巡るべし。又重ねてなど言ひては、決して行かるゝものに非ず。其の地方の名所は、下りてよき樣、停車場に記したる札立てあり、里數も書きあれば、見落さぬやうにすべし。但し一の注意あり。それは譬へば、大阪より東京、又は馬關まで等、通し切符を買へば、道中に手數無くして宜き代りに、途中にて下りて名所を見るに不都合なり。往先の切符無効となりて損をすればなり。依て豫め見るべき名所地を能く調べ、何處々々を見んと思はゝ、下車すべき驛までの切符を買ひて下り、又、乘るときは其の次に下りる迄のを買ふこと言ふ迄もなし。

（流車に乘る心得）　人の込合ひたるときは爲ん方無けれど、成るべく線路に沿ひたる窓際に乘るを可とす。茶辨當を買ふにも、暑きに開け、寒きに閉め、不用物を投出し、唾を吐くに至るまで都合よし。又成べく指して行く方に向ひたる席を可とす。傘一本にて乘れば赤帽を雇ふに及ばず。但し信玄袋は預けんと言ひても預らぬ事あれば、傘と共に網棚へ上げ

て身の邊りに何一つ無きを可とす。不馴の田舍人等は、預くれば賃錢を取らるゝかと思ひ大なる包を抱へて、己れは苦勞し、他の迷惑になるを思はず、他より網棚へ上げよと敎へても、夫れすら不安心なるにや、後生大事と抱へ居るは笑止の至りなり。

（船暈に就て）　婦人は船に醉はぬは稀なり。男子にても胃弱の人は吐暈す。此の醉ふと言ふことは、一は海荒くして船の動搖甚しくなれば、恐ろしくて心配するにもあれど、好き日和の時にても、常に聞なれぬ蒸氣機械の轟々たる音響頭腦に徹へ、殊に下等室には一種言ふべからざる臭氣鼻に着き、夫等の爲めに心惡く嘔氣を發す。一度吐逆すれば、頻々と胸を突きて容易に治まらず、苦しむものなれど、船暈は限あるものにて、若し其の海路一晝夜位なれば、上陸せぬ限りは止まぬも、日を重ねて航海すれば、始め一晝夜は苦しめども二日目よりは三日目と次第に慣れて、後には何とも無くなるものなり。若し上陸せぬ限り治らぬものならば、爭でか一ケ月以上にも渡る航海に耐ふる者あらんや。但し、大船は上中等室に居れば、さのみ醉ふものにあらねど、小氣船に至つては、船室は箱の如くなるに大勢の乘合が鮨詰になり、僅に小窓を開けたるのみ。夫れすら波の爲めに閉づる時は、空

氣中に炭酸瓦斯増し、厭ふべき臭氣を發し、窒息して嘔氣を發するものなれば、船に弱き者は、成べく甲板へ出て居れはよし。

（汽車暈駕暈に就て）　汽車にても、夏季は隧道の外は窓を開け放つ故に酔ふ者少きも、冬は寒風を厭ふ爲めに皆窓を閉づる故、胃弱の人は酔ふことあり。駕も亦、山駕は吹貫なる故に酔はねど、雨の日桐油紙に包まるれば酔ふことあり。乘物に酔ひたるは、死ぬ氣遣ひは無けれども、甚だ苦しきものにて、藥を服ぶも効無し。駕ならば止めて下りるべし。汽車にても誠苦しくば下りもすべけれど、船は致し方無し。唯心得べきは嘔氣付きたらば、速に吐くべき器を乞ひ、汽車ならば窓側の人に頼みて居かばるべし。さも爲し難くば疾く茶の土瓶を空けて吐くべし。ゆめ〳〵咽を突くまで悩へて、思はず傍の人に吐かくる等の失禮すべからず。斯くして別に、茶にも水にても一瓶求めて、吐きたる後毎に飲むべし。然らざれば、後には吐くべき物竭きて、食物を消化するに大切なる苦き膽汁を吐くに至る。之れを多く吐くほど疲勞甚しく、身躰フラ〳〵して、下車するも歩行に苦しむに至れば、茶にても水にても飲みて、吐くべき物を造り置けば、嘔氣は同じくとも、幾分か樂に吐かれ

膽汁の出ずること少なかるべし。

（宿を取る心得）　汽車汽船の着く處には必ず宿あり。されど、成べく汽車ならば停車場、船ならば港に近き所に宿を取るを得策とす。近ければ車夫を雇ふに及ばず。手荷物も自ら提げても行かれ、又宿の番頭如才なく其の時刻には門に出でゝ看張居り、我が方へ足を向く客あれば、忽ち走り來つて荷物を取呉るれば、ホシの停車場を出る間持てば宜きなり。出立の際も亦、遠ければ俥を要するも、近ければ宿の男荷を持ちて送り來り、又汽車の出るも、今のは何處行と言ふ事は、宿が能く知り居れば、程よき時刻を見計らひて客に報ず縱ひ有名なる旅館にても、遠きは氣の採めるものあり。少し二ノ町にても近きに如かず。但し有名の旅館は、本宅若し遠ければ、大抵停車場附近に出店あり。兎に角始めて能く調べ置けば、楽はずして其の宿へ着かるゝなり。さる次得無くて、始めての土地へ、汽車汽船より下りたる人は、其處等に居る車夫、我れ勝ちに客を取らんとて、言葉巧みに言ひ立て、不案内の客と見れば、よき宿に案内せんとて、口車に乘せて挽出せば、客車上よりして、此の宿然るべしと思ひ、其處へ着けよと云ふも聽かず、何の彼のと言ひ、己れの思ふ

宿へ挽行くものなり。是れ其の土地にて、繁昌らぬ宿は、車夫を手なづけて、客一人に付幾許かの手數料を拂ふ約束をして、斯くするものなれば、其の宿は決して宜しからず。されど既に其の宿へ引込み、門口より大聲にて、お客樣と呼はれば、家内の者共飛んで出で一番に荷物を奪ひ、（小兒を伴ひたるときは先づ其小兒を人質に取る）客が何と言ふても耳に掛けず。サッサと奥へ持行く。客は爲方なく、シブ〳〵車より下りれば、口先ばかりチヤホヤ言ひ、さて座敷へ案内せられて見れば、席は汚く、夜具食物も之れに準じて、一夜を不愉快に過さゞるべからず。これは大に心得べきことなり。始めての土地にても、何の某方へ着けよと、確かに名を指して命せば、車夫も從はざるを得ざるなり。

（宿へ着きし時）さて宿へ着きては、成べく手廻しをよくする事にて、髮を結直すは翌朝と言はず、宵の内にして、入湯も伴あらば、申合せて手拭一すぢより濡さぬ事、翌朝の洗面にも、成べく手拭を濡さぬ事、宵の内に其の日の小遣を書記し、翌日の入用を小出し置く事、小出の外、金の在所を人に見するまじき事。

茶代は、はづむならば、着きて直ぐ、茶を持來りたる時か、又、少しにて濟まさんとならば、出發の際にすべし。

宵に主人又は番頭を呼んで、翌日行く方の案内を精細に聞き、俥又は山駕等を雇ふならば其の時慥に誂へ置くべき事、旅なれぬ都會の人は、俥等は何時にても有るものと思ひ、出發の際に言へば、宵に仰無ければと謝絶せられて困ることあり。

交際術

單に交際といふ、何でもなきが如くにして、實は一頗る六かしく、而して其六かしきだけ又最も必要なるものなり。由來本邦人は甚だ交際に拙なり、故に外交上毎度失敗多し。兎角本邦人は人前を憚るとか口を愼むとかいふことを楯とし、無言少語を善行とす。喃々饒舌素より亦際の要訣にあらざるも、徒らに寡言自ら高く標置するは、決して褒むべきことにあらず。女子に於て殊に然り、令閨も令孃も、苟も世を樂しく暮さんと欲する人は先づ其人に接するの際、如何にも嬉しきが如く微笑を含んで其人を待遇さるべし。微笑——英語にスマイルと云ひ、スマイルの女は常に人に愛せらる愉快の人として之を譽め、笑凹（えくぼ）——ディンプルと云

ひ亦美人の一條件たり。兎に角温顏以て人に接するは交際上第一の要件なりとす。

△訪問　は情誼を温むるに欠くべからざるものなれば、一周一回位は互に此訪問を交換すると、社交上甚だ必要なるが。さて訪問するには宜しく。

△時間　を計りて、先方の差支なき日時に訪問するやう注意すべし。而して訪問せしとき主人側の人が外出せんとする際なること を知らば、決して長座すべからず、唯普通の挨拶をすまし直ちに歸るべし。

△主人の心得　來客を長く待たしむるは最も無禮なるとなれども、成べく速に應接すべく而して第一に客をして安樂ならしむるに注意し、即ち夏ならば團扇を進め羽織を脱がせ、冬ならば火鉢を進め障子を閉る等氣を利かし、而して成べく來客に談語の機會を與へ、客の話の絶ゆる時は面白き世間話し或は文學美術の談等それ〳〵其人の嗜好に投ずる樣心掛くべし。若し自ら坐を立つ必要あらば、先づ客に御免くださいと斷りて立つべく、無言にて坐を立つは禮にあらず。すべて人に接するには常に

△丁寧　なるを要す。目上の人に對しては勿論のこと、眼下の人又は親友に對しても丁寧ならざる可らず。丁寧に人を遇するは第一自己の品格を尊ぶ所以にして、即ち人に丁寧なるは、自己も亦丁寧に取扱はるるものなり。尚ほ前にも述ぶる如く温顏人に接するは、交際上第一の要件なり。然るに本邦人は兎角

△温情　に乏しく、人を冷遇するの癖あり、殊に眼下の者に對して冷酷なる者多し。之に反して西洋人は頗る温情に富み、眼下の者に對しては殊に親切にして、了稚小僧にも猶且つ相當の挨拶を與へて之れを冷遇せざる也。實に温情は人を懷け自己を德者たらしむ、古人の所謂「德孤ならず必ず隣あり」とは此邊の消息を云ひしなるべし。

談話法

○談話の秘訣　エマーソン氏曰く「人と談話するには順良に過ぎて人に弱点を示す可らず辨解的なるべからず、又饒舌なるべからず、而して克く汝の言葉を統治すべし」と。蓋し自己の思想を明瞭に又美麗に言ひ現はすことは、交際家第一の要件たり。吾人社會に生存する限りは如何なる人とも話さざる可らず。殊に紳士として社會に重要視せられんと欲す

る者は最も談話の必要あり、何か有益なる事を思想に有し其れを最良の言語を以て言ひ顯はす事は成功と名譽を得るに欠くべからざる要素なり。而して此要素を得るには多くの書物を讀み多くの人と交際し多くの新聞雜誌を見るの必要あり。實に會話の交際場裡に必要なるとは他の幾多の交際術に勝る。さればとて諂ひは害ありて益なし。英國の諺に若し他人の恩惠を感ぜば行爲を以て尊敬と感謝を表すべしと云へり。然れど談話に巧なる人は確かに社交上の成功を得ること速なり、但し巧言も自己を統治せず濫りに之を弄するは尊ゐ失敗なり。口は善にも緊要なると同時に禍の門たるとを忘るべからず。

○惡評　は決して口にす可らず、人を誹るは天に向つて唾するに同じ。

○長議論　は他人を煩はし聽者を厭忌せしむ。

○衒學は非なり　會話中殊に婦人の面前にて博識を衒ふ勿れ、又男子のみに興味ある話のみを爲すべからず。

○話を遮る勿れ　他人の談話を遮るは頗る無禮なり、而も本邦人此惡癖多し慎まざる可らず。

○能く聞け　人の談話を能く聞く事は自ら能く談話すると殆んど同樣の効あるもの也。

○視つむる勿れ　談話の時は常に相手の眼を視て話すべし、傍目にて話する人は不正直の証據なり、然し視つめて相手をしてまばゆからしむ勿れ。

○低聲　成べく底音にて靜かに話すべし、殊に高聲にて打ち笑ふは下品なり。

○嗜好　人は誰しも自分の身上に關する事に興味を有す、故に母たる人を對手とする時は其人の子供に就き談話せしめ、若婦人には流行の風俗に關し、著述家畫工には其作品に就て話題を出し、自分聞き手となるべし。

○性質の反響　會話は品性の反響なることを忘る可からず、卑賤の人は自から其話題卑賤のこと多く、度量寛大の人は常に溫和にして喜怒色に表はさず。

演　說　法

演說は文字の如く我が思想を演べ說さて、意見を衆人に貫徹する行爲なり。されば講義などの如く、單に條理を正して明白に說くものに非ず、又講談師や落語家の如く身ぶり面白味を

以て人を悅ばしむるものにも非ず、要は即ち條理を正し、意義を明白ならしむると共に人心を鼓舞し、自ら奮起せしむるにあるなり。

さて、演說者の具備せざるべからざる資格は、左の諸件とす。

（一）識見、（二）才智、（三）豪膽、（四）經驗、（五）溫和、（六）眞摯、（七）風采。

（識見）これは智識ありて事の是非を正當に判斷する力あることなり。

（才智）これは聽者の感受すべきやうに才智を用ゐることなり。これには聽衆の種類、位地階級に依りて、演說の爲し方を異にし、所謂る人見て法を說くの才智を働かし、就中反對主義を有する異主義者に對しては、才智を利かして、巧みと誠實とを以て說得し、成程と感服せしむるの才智を具ふるなり。

（豪膽）これは誠に必要なり。何となれば聽衆中より、嘲罵、誹謗、喧囂冷評せらるゝことあればなり。要は此の間に處て、泰然自若として自己の意を曲げず、飽く迄當初の思想を透徹するは膽斗の如き此の豪膽あるを要するなり。

（經驗）これは場所慣れ、演說し慣れ。演壇に上りて、何に遇はうとも平氣にて人に畏れざるなり。豪膽にても、經驗なくば、時として不覺を取ることを無きに非ず。實際上に往々實例を見ることあり。故に場所になれざるべからず。

（溫和）これは聽衆を心服せしむる爲めに必要なり。狀貌溫和ならざれば、人は反感を生じて服するものに非ず。

（眞摯）これは眞實の誠意を露すなり。形容のみに泣き、怒るに非ずして眞實にするなり。

（風采）これは進退擧動溫雅にして、何となく品格高くあることなり。美服を纏ふのみを稱するに非ず、美丈夫にてもあらず。よし、矮軀短身醜面なりとも、如上の風采あるべきなり。若し天然美丈夫ならば、其の人に存する一益なりとす。

右の他に尙ほ心得居るべき事項あり。即ち左の件々なり。

（一）音調の注意、（二）態度、（三）用語の注意、（四）講演の注意。

（音調の注意）これの條目を擧ぐれば左の諸件とす。

（一）音調の明瞭、（二）全抑揚、（三）全緩急、（四）濁音と低聲、

（五）情　聲。

（態度の注意）これは左の諸件とす。

（一）思想と動作との一致、（二）言語動作との一致、（三）視線の注射。

（用語の注意）これは、新奇の語、外國語を濫りに用ゐざる事、卑賤の語・同一の語を避くべきことなり。

（講演の注意）これは立論上の順序なり。細立なり。諸件を擧ぐれば左の如し。

（一）論理の貫徹、（二）演繹法、（三）歸納法、（四）論理の整然、（五）論理の明晰、（六）全動搖、（七）全運用、（八）繁簡の順序、（九）統計の應用。

國民百科全書（第三編）

習字速成術

尙文館編輯局編纂

（速成要訣）古人は、學問の道他無し。其の放心を求むるのみと曰へり。放心を求むるとは其の要を得るに在り。凡そ事に臨んで漠然として其の要を得るを勉めざれば、成就すること遲きのみならず。成就すること能はざる可し。習字に於ても亦然り。其の要を得ずして漫然紙上に筆を運らすも巧なること能はず、縱ひ之れを能くするに至るも、甚だ遲きものなり。故に唯其の要を得るに勉む可し。

一　書は文字を多く習ふは惡きに非ざれども、必ず多く書くを可なりと謂ふ可からず。文字を習ふこと少なきも、運筆即ち執筆法、運轉、法則等の順序に從ひ習ふときは、

速に巧なることを得む。

一　机に對ひたるときは、先づ心を正しくし、靜にして餘念無く、體の構へを端正にし少しにても首を縮め、斜に傾きなどすべからず。如何に心を正しくすとも、體の構へ頽るゝときは、書く文字も隨つて傾き、正格なる形ちを得ること能はず。

一　書は日々に怠らず習ふを可とす。文字を書き覺ゆることは、少しづゝにても日々覺ゆるを可とす。「習字は坂に車を推す如く、油斷をすれば後へ戻るぞ」と云ふ古詠は能くも實地を穿てり。急に思ひ立ちて、一時に多くの文字を習ふとも、後に懈るときは何の詮も無し。故に少しく習ふが爲めに進歩遲しとは謂ふ可からず。多く習ふて進歩速しとも謂ふ可からず。少しく習ふとも一字一畫も徒らに書かず。能く手本に注意して習ふときは、多數の文字を徒らに走筆せしより却つて優ること數等なり。加之ならず。赤筆は筆に惡き癖を生じ、後の害を遺す可し。

一　習字を爲すときは、能く手本を熟視して、手本の字形と自分に書きたるとを對照し自書の惡き所を見出し、それを直さんと思ひ、幾回も自分が是れにて滿足せしと許すまで書き習ふ可し。

一　天より稟け得たる筆才無く、所謂惡筆なりとも、怠らずに習ふときは、自ら能書と爲る可し。縱ひ天稟の筆才あるも、怠りて習はざる者は、却つて不器用ながら能く習ひたる者に劣る可し。古より能書の聞ある人は、大抵は不器用なりし人と云ふ。

一　習字を爲すには、師に就くを善しとすれども、若し師に就くこと能はざる人は、手本を擇みて獨習すべし。而して其の一旦擇みし手本は、後まで其れに因りて習ふべし彼れを習ひ此れを習ひて、氣惑ひすべからず。氣惑ひするときは、孰れも熟することは能はざるのみならず。混交したる文字を書き、識者に見られて笑はる可し。然るにも拘はらず初學の者は、古人の墨帳即ち石摺などを尚ひて遷るものなり。これは甚だ宜しからず。石摺などは成るべく手本とせざるを可とす。然れども、運筆を得たる後に參考として學ぶは、大に益あり。

一　文字は一點一畫にても能く注意すべし。殊に落筆、又は止筆とて、初めの一筆と末の一筆とは、心を留めて書く可し。位置と字形とに、大に關係すればなり。

一　能書は筆を擇まずと云ふを誤解して、如何に粗末なる筆にても書き得しと思ひ居るものあれども、決して然にあらず、开に筆の毛の剛柔に拘はらうず、孰れの筆にても如何やうなる字態をも造り得るとの義なり。故に筆は成べく擇みて用ゐる可し。之れを擇むには、筆の毛先能く揃ひ、腰に力ありて、筆先の柔かなるを擇む可し。而して文字の割合には太やかなる方を用ゐる可し。太き筆にて小字を書くは可なれども、小なる筆を持ちて大字を書きたるは出來の悪きものなり。古語に、大字は小字の如くならんと欲し、小字は大字の如くならんと欲すと曰ひ、又、書を作るときは、戯れに寫すものと雖も、必ず金石に刻する心して筆を執る可しとも曰へり、此の二語を能く玩味す可し。

一　墨を磨るにも注意す可し。墨の濃淡は文字の上に大に關係あり。何となれば、墨淡きときは神彩を傷ひ、あまり濃きに過ぐるときは筆鋒を滯らすものなり。さて又墨は唐墨は膠強き故、小字には和墨を良しとす。尙墨は古きを良しと言へども、あまり古きに過ぐるも宜しからず。

（双鉤と臨摹との二法）双鉤とは俗に云ふ撫字なり。古人の筆蹟などありて、其の字形を寫し取り置かんと思ふとき、文字を敷寫しにするなり。臨摹とは、臨の意義は他の筆跡を左傍に置き、臨書することにて、摹は一筆に引き寫す意なり。臨書は古人の位置を失ひ易けれども、其の筆意を得ること多く、摹は古人の位置を得易けれども、其の筆意を失ふこと多し。臨書は忘れ難く、摹書は忘れ易し。要するに、意を經ると意を經ざるとに在りと曰へり。

又、双鉤と單鉤との二種あり。双鉤は嚴重にて男子の如く、單鉤は優柔にて女子の如し。此の双單兩鉤中、懸腕、提腕、枕腕の三種あり。小字に枕腕を用ゐ、中字に提腕を用ゐ、大字に懸腕を用ゐるを普通とせり。書を作るに腕を用ゐる故に、文字は筆先の力のみを用ゐるを忌むものなれば、腕にて書くことを工夫するなり。

（品位高きを要する事）書は品位高きを要す。品位は其の人の神彩に依るものなり。神彩の高きは、學問見識ある人に非れば能はず。總て文字に疎きものは、下品たるを免れず。されども、文字無き人にても心正しければ筆正しと云ふ。筆正しければ品位も自ら高し。故

に書を學ぶ者は、先づ第一に心を正しくするを肝要とす。能書家王右軍の筆意の贊に、書の妙道は神彩を上となし、形質に之れに次ぐと曰へり。是等の言は初心の者の上に就て曰ひしことに非されども、能く味ふ可きことなり。

（運筆に遲速宜しきを得可き事）　これは初めより遲きに過ぐべからず。速きにも過ぐべからず。其中すみを取るべし。遲きに過ぐれば筆勢を失ひ、速きに過ぐれば筆力の足らざる處あり。されども、緩やかに運ぶべき所と、速に運ぶべき所と、中間の速度を用ゐる所とあり。是等は宜しく斟酌すべきことなり。

飛道の勢ひは、筆を走らせてのみ得べきものに非ず。健腕の熟するに隨ひ、自ら飛動するものなれば、熟するを待ちて渴筆を走らせ、飛動の勢ひを作るべきなり。

（行成卿の書道九事の傳）

一　筆ふるるは、のぞ切れて心にかなはず。

二　紙は新しきを用ふべし。ふるきはあしし。

三　硯に水をたくはへて用ふべからず。

四　水は早朝汲みて用ふべし。久しく水瓶に貯へたるはあしし。

五　墨は古きに從ひ、光りをいだしてすみやかなり。新らしきはねばる。

六　腕をつかひて後筆をとるべからず。

七　心身定まり心ゆるくして書くべし。

八　ねいきよくさまし、早朝に書くべし。文字分明なるべし。

九　天氣晴るゝときは心爽かなり。空曇る時は心鬱す。雨天には文字も其の心より出る故死すべし。

一　習字には速成の法種々あれども、十字の内五字は、よくよく手本を見て習ひ、五字は其筆意を忘れぬやう、おのれが手に任せて書くは、大に速成の妙術なり。又、おのれの手癖よりも、其形の似つかぬ文字あるときは、手本の字を細く摹して、其上に習ふべし。

一　習識と云ふ事あり。己が利發を以て文字の形を省すれば、手跡の巧にする事遲し。心を手本にうつして、筆の扱をさすればよく似て、巧になることも早きなり。

一　神靈といふ事あり。字の形のみを書けるやうになるは、手習を爲さゞるには勝れども、

速に習字の妙を得んと思はゞ、靜に手本に心を留めて習ふべし。文字に靈といふものあり古語に曰く、心茲に在らざれば見て視わずと。己が心を打込みたれば、其書きたる字にも靈魂のありて自ら人の稱へる所の文字を書き得るなり。

一　四修と云ふ事あり。文字をまるくしゝつありて、正しく美しく、此四つを主として習ふべきなり。

一　習情と言ふ事あり。自ら心を手習に留めて習ふ事なり。氣の懲りず、倦まず、好む意のあるやうにするが肝要なり。少し面白しと思ふやうになりたらば、其まゝ休みて又後に習ふべし。幾度も斯の如くする時は、自然に熱心になりて、終には倦まぬやうになるものなり。

一　文字に懷といふ事あり。文字の内を廣く書くべし。心あざやかに見ゆるなり。懷の無きは見榮なきものなり。

一　筆勢と云ふ事あり。少し字の形あしきも筆勢あらば、見所あるものなり。

一　何等の體たるを問はず、之れを修業するには、精神を入るゝこと肝要なり。筆の道も亦

然り。精神を入れたるは墨色までもよく、一見字の態度あるを知るなり。古へ羲之の手の石に入り、弘法の字の木に入りしも、精神を入れて書きたる故なり。

一　手習を爲す時は、右の手に重きものを持たぬやうにすべし。雨天の時に傘などを持たざる位に注意すべし。

一　筆通の秘事。總て一文字の心より他になきもなり。筆情も筆法も是より起るなり。

一　初學の者は、先机其他文房の具、置き處を定め、散亂せぬやうになすべし。是卽ち心を正うするの基なり。硯の墨は程能く磨り、餘り濃は鋒毫とゝこほり、薄きときは心彩を破るといへり。

一　執事の法は、義之以後、指を實にし拳を虛にすとあり。又手の中は卵掌とて、ふくらかに指を揃へて持べし。堅きにあらずして指を實にすること肝要なり。又心正しく氣を定め臨書すべし。又肱と拳も共に強からず、弱からず、中和にすべし。

右の事項は、習字を爲すべき初學の者の第一に心得べき事なれば、先づ此等をよく記臆して後、古人の說などを讀み、其の中に、自己の心に適するものを採りて習ふべし。是れ淺きよ

り深きに入る法なり。

(假名習字の心得) 假名書きは、多く女子にある事ゆゑ、女子の習字執筆法として述ぶべし

其の執筆法を言はゞ、提腕にて肘を輕からしめ、伸縮自在なるを可とす。女子は姿勢のよきを專らとすれば、其姿勢の醜くゝならざんことを勉むべし。左に姿勢の美なる點を擧げ示すべし。

一 筆鋒常に右眼の眞向にある事。

一 左手の置きどころ。

一 體を直くし、手本と双紙との位置を定むる事。

右の如き姿勢ならば、書する文字も自ら優美高尚ならむ。

(假名習字の順序) 假名を習ふにも順序あり。其の順序は先づ極めて簡易なる、いろはより始め、之れを熟して後、諸變体點畫の要を習ふべし。

以上は單に假名の源体を習ふものにて、字々皆分離したるものなり。故に先づ此の源体の書方を習ひ得たるときは、二字三字の連續ものを習ふべし。此の法を學び得たらば、時々漢字を加へて文字に大小を生じ、且つ其連續中にも處々輕重遲速あるを要す。以上の諸法を熟したるときは、字体の變化と筆意の變化とを知るべし。字体の變化とは、假名變体のあらん限りを知得するをいふ。筆意の變化とは、同字体にて種々の變化を筆意に得るを謂ふなり。

文章速成術

題して文章速成術と言ふ。而も敢て別に之が秘術妙方あるに非ず、速成畢竟は克く作文の要訣を悟了し迂遠ならぬにあり。呂本中曰く、須く悟入する所あらしめば則ち自然に諸子に度越すべし、悟入の理は正に工夫勤惰の間に在るのみ、張長吏公孫大娘が劍を舞はすを見て、頓に筆法を悟るが如しと。嗟呼悟入、是れ作文の要訣、若し夫れ克く此要訣を悟らば、彼所謂一氣呵成、必ずしも至難ならず。古來文章の速成を忌むもの、此は初學者の輕々筆を下すを戒むのみ。學ぶべき事多岐複雜の今日、文章固より推敲を缺く可らざるも、而も一編三都の賦に十年を費す左氏の如き、是れ豈に今日の青年の倣ふべき事ならんや。左に初學者の必す

心得べき要件二三を記して速成に資す。

(一)文章と思想　文章は思想の表出なり。されば思想と文章とは決して離る可きにあらず隨て今人の文章は今人の思想ならざる可からず、我書く文章は我思想ならざる可らず。然るに世人やゝもすれば、古人に泥みて、今は無き事實も、古にあれば之を用ひ、現在つかはれつゝある言葉も古文に例なければ之を避くるが如きは、甚だ宜しからず。初學者は成べく假裝的の弊を矯め、實地的の方針を取る可し。

(二)作文題　夫れ此の如く、我書く文章は我思想ならざる可らずとせず、初學者の文題は成べく我身に疎遠なる若くば我身に材料なき作題を避くべし。今爰に「吉野に花を見る記」なる題ありとせんに、實際吉野を知るの人に在ては、容易に書かるべきも、知らざる人は、作例を見て模擬するか、又は全く想像的の文字を並べ立るより外なかるべし。果して爾く摸擬を主として我思想を客とせば、文は遂に虛飾の僞文字となり終るべし。

(三)文法と用語　世の文法を授くる者、率ね唐宋八家の文を以て學とし、我邦の文書に至ては、概して鄙俚章を成さゝる者となせり。是れ其見る所文字章句の間に止まりて未だ終搏

の上に於て更にこれより大なるものあるを知らざるの過ちなり。「世を捨てば吉野の奥に(與)それよりは(奪)かたてのなるか深き隱家」、此の歌は以つて文章與奪の法を知るに足らん。「我家に人の來ることそうるさけれ(擒)とはいふものゝ(縱)貴樣ではなし、これ以て擒縱の法を悟るべし。三十一文字なる一首の中に於て尙且つ然り、況してや詞稍や長きものに於てをや。曾て白隱禪師が達摩三絃を弄するの圖せし讃に曰く「任麽是祖西來意問極莊重」そんなことといふてりやるとオイラハ氣が詰マラアー(答極鄙俚)彈き見れば心の底に駒はなし絲が鳴るやら撥がなるやら(語似鄙近而意則莊重)傍有座頭四分一者曰チンツンテン、主意唯一句妙在不說破と評すべし。看よ他の極めて鄙俚の語を以て宗門の第一義たる莊重の一問を推開し來る、其筆力果して第一、是れ恰かも彼の李白山中答客詩の笑而不答心自閑なりと即答せると一般、既に答へずと云つて却て桃花流水の悠然たるを說きたるは、又恰かも氣がつまると云ひ却つて其自然に出るを說くに似たり、何等の巧思ぞ。要するに乍ち莊重、乍ち鄙俚變化自在、而して結尾に至り瑩然として響を止むるものと謂ふべく、其妙言ふべからず。然むども禪師は固より博學を以て著る、其文の妙此に至る復怪むに足らず。左に一層鄙俚卑言

にして却て妙味ある一例を掲げんに世に馬喰（ばくろう）と稱ふる者の人に與へて債を責むるの手簡なりといふものあり、馬喰の名を「龜」と呼ぶ、其書に曰く「金三兩馬代（單刀直入）右馬代（重疊說下自鬼語氣矯健）くすかへさぬか（遠與不遣二項雙雄）こりやどうとや（一問使人先思其處置）くすといふならそれでよし（即是小頓挫）くさぬにつけてはおれがゆく（漸說人主意）ゆくにつけては只おかぬ（一句主義）龜が腕には骨がある（何等の警語）と。看よ他の重疊說下し來りて一緩句なきを、其間遠（おくる）と不遣（おくらぬ）の二項を持ちて雙關とし、乍ち遣の一項を推開して重を不遣の一項に歸し、末段骨あるの一句を以て他を悚動し來る其氣魄光焰幾んど項羽宋義を責むるの語と馳騁せんとするの勢なり。然れば文法固より特り文字章句の間に在らずと云ふも不可なからんか。往時賴山陽學生に詩を授くるに「大阪本町糸屋の娘（起）姉は十六妹は十四（承）諸國大名は弓矢で殺す（轉）糸屋娘は目で殺す（合）と云へる俚歌を以てせりと、亦以て文法の間々卑語の中に存するを知るべし。

繪畫

繪畫は古昔より行はれたるものにて、我が邦繪畫の始めは佛畫に起れり。欽明天皇の朝以後佛工渡來して、佛像彫刻の下繪を畫きしより人物畫起りしが如し。其の後奈良の都の頃より支那の唐代の畫風傳はり、巨勢の金岡出でゝ巨勢派を始む、金岡は、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へ、官大納言に至り、紫宸殿の障子に聖賢の像を畫けり。支那より傳はりたるは北畫にて、其の後南畫即ち俗に文人畫と云ふもの傳はりて今にては北畫、南畫、國畫と爲れり。國畫は全く日本畫になりたるものにて、狩野派などは支那の北畫より來れり。次で土佐派に出で、住吉派もあり、國畫には四條風あり、圓山派あり、狩野流、土佐派も之れに屬し、近ごろ寫生派あり、浮世繪あり、別に又、洋畫家續々起れり。

（古昔の大家）即ち左の諸人なり。

巨勢金岡、狩野元信、土佐光起、狩野正信、仝光信、仝尚信、仝水德、土佐光長、仝光信、仝光則、仝光芳、狩野探幽、僧雪舟、仝雪村、仝周文春日正信、啓書記、本阿彌光悅、仝光甫、鳥羽僧正、小栗宗丹、曾我蕭白光殿司、曾我蛇足、雲谷等顏、

（近世南北畫の大家）即ち左の諸人なり。

與謝蕪村、池野大雅、平野五岳、田能村直入、日根對山、貫名海屋、田野村竹田、椿椿山、十時梅涯、岡田半江、瀧和亭、浦上春琴、原麻谷、山本梅逸、彭城百川、野呂介石、中林竹洞、岡田米山人、浦上玉堂、圓山大迂、芳屋、帆足杏雨、福原五岳、渡邊小華、小松雲涯、秦金石、河村雨谷、森琴石、田能村小篁、姫島竹川笛村、富岡鐵齋、田能村小齋、猪瀬東寧、村田香谷、山本半村、佐竹永湖、十市王洋、大橋翠石、外、佐竹永陵等。

（近世國畫の大家）即ち左の諸人なり。

圓山應擧、松村景文、渡邊華山、谷文晁、松村吳春、森狙仙、長澤蘆雪、森一鳳、月岡雪鼎、岸駒、伊藤若冲、酒井抱一、柴田義董、山口素絢、尾形光琳、英一蝶、菊池容齋、岡本豊彦、柳澤淇園、西山芳園、圓山應震、石田友汀、駒井源琦、圓山應瑞、橋本雅邦、松村月溪、田中訥言、司馬江漢、與文鳴、幸野梅嶺、望月玉蟾、墨江武禪、上田公長、河村文鳳、柴田是眞、浮田一蕙、尾形乾山、岸岱、鈴木百年、原存中、雛屋玄圃、河邊曉齋、川崎千虎、岸連山、菅其翠、守住貫魚、久保田米僊、長澤芦洲、望月金鳳、荒木寛畝、川端玉章、鈴木松年、野村文擧、今尾景年、竹內栖鳳、菊地芳文、土佐光武、川邊御楯、山名貫義、巨勢小石、望月玉泉、谷口香嶠、狩野探美、山元春擧、松野霞城、荒木十畝、平井直水、高谷篁圃、久保田金仙、河合玉堂、鈴木華邱、寺崎廣業、中川盧月、御船綱手、村瀨玉田、湯川松堂、山本永暉、小堀鞆音等。

（女子國家名家）即ち左の人々なり。

與原晴湖、橋本青江、野口小蘋、上村松園、河邊青蘭、馬杉青琴、前田錦相、佐久間棲谷、跡見花蹊、田能村小菊、橋本青蘋、跡見玉枝、守住周魚等。

（洋畫名家）即ち左の諸人なり。

黒田清輝、　岡田三郎助、　鹿子木孟郎、　中村不折、　淺井忠、　織田東禹、　山内愚仙、　松原三五郎等。

（古今浮世繪名家）　即ち左の諸人なり。

岩佐又兵衛、　浮世又平、　葛飾北齋、　菱川師宣、　仝師房、　仝師永、　仝正信、
宮川長春、　倉橋豊國、　安藤廣重、　角田國貞、　井草國芳、　北川歌麻呂、　楊洲
國延、　荒川國周、　鳥居清信、　西川祐信、　鮮齋永濯、　大蘇芳年、　河邊曉雲、
田口年信、　水野年方、　富岡永洗、　稲野年恒、　尾形月耕、　梶田半古、　渡邊省
亭、　松本楓湖、　竹内桂舟、　小林清親、　永峰秀湖、　長谷川貞信、　鈴木錦泉等

以上の東洋畫は、形象よりも氣韻を尚ぶ傾向あり、故に西洋畫に比しては、物の表はし方甚だ拙し。これに反して西洋畫は自然を摸倣することを重んじ、科學の進歩に伴ひ、寫實に必要なる諸形式、即ち遠近畫法、油繪具及び寫眞の發明に依りて益々進歩せり。

（圖畫を國民教育の一科とせし事）　歐洲にて圖畫を普通教育の一科とせしは英國に始まる。依て西洋式に圖畫を學ぶ順序は左の如し。即ち其の定義にしては、

（一）垂線、（二）直角、鋭角、鈍角、（三）平面形、（四）三角形。（五）四邊形、（六）多角形、（七）正多角形、（八）圓、

作圖に於ては左の如し。

（一）有限直線を二等分する法、（二）直線外の一点より其の線に垂直線を引く法、（三）直線の一端より垂直線を立つる法、（四）角を二等分する法、（五）直角を三等分する法（六）定直線を任意に等分する法、（七）一邊を與へて正三角形を作る法、（八）底邊及び相等しき一邊を與へて二等邊三角形を作る法等。

以上の如く順序を立てゝ學ばしむ。されど我が國畫は始めて見合せて寫し、点を學び進んで師の畫風を眞似るなり。獨習ならば、好き畫を見て寫すを始めとす。

速算術

速算法には種々あり。悉く記さば多くのページに亘るを以て、今其の一例を示すべし。今ここゝに例へば、何程の數にても除らるゝ數ありて、それを二倍以上の乘位法數にて除げば面倒

にて速くはゆかず、除るよりは乘くる方が速く易し。故に乘けて速算する上に法數を單位一數にして乘くるなり。されば何の數にても二十五にて除るとき、例へば百七十五圓を二十五に除るとき、速算せんには、〇、〇四を乘くるなり。されば二十五にて、ひま入れて除りたるも同じ商數を知る。此の理は左の如し、左の算式を見て、成る程同じ數理なりと合点ゆくべし。此の理さへ知らば、除ると同じ理の、乘法數を知りて、速算自在になるなり。

$$175 \div 25 = 175 \times \frac{1}{25} = 175 \times \frac{1 \times 4}{25 \times 4} = \frac{4}{100} = 175 \times 004$$

以上の通りに0、04になるにあらずや。されば百二十五にて除る代りに、千分の八、即ち0、008を乘くるも同じと云ふことを知らむ。斯くして乘法數を何程にても作り得るなり。此の理より生る、除る代りの乘法數は左の種々あり。

一　二にて除るときには、〇、五を乘くれば速し。

二　五にて除るときには、〇、二を乘くれば速し。

三　百二十五にて除るとき、〇、〇〇八を乘ければ甚しく速し。

凡そ速算の工夫は、之れに越ることなからん。此の法は、一旦百分の幾個と云百分々數に化し、それを小數に化して乘法數を生ずるなれど、分母を百分に化すとも其分子の除切れずして、不盡數、同歸數等になるものは、到底此の速算法を用ゐること能はず。例へば三十六に除るが如きは然るなり。

$$324 \div 36 = 324 \times \frac{1}{36} = 324 \times \frac{1 \times 100 \div 36}{36 \times 100 \div 36} = \frac{27777+}{1000000}$$

$$= 0.00277777+$$ となる。

されば、〇、〇二七七七七餘不盡數を法數として乘くることは不可能なり。故に三十六にて除るものには此の速算乘は爲し能はず。是れは一例にて、此の性質除法數は早乘に用ゐること能はざるなり。依て、同じく除るにしても、三十六は、四に九の乘りたるもの、又、九に四乘りたる數、尚又、六に六の乘りたる數故、衆位除法の面倒を避け、除の易き單位除法、即ち珠算なれば、見一割に爲すに、八算割の爲し易きを二回行ふとして、先づ左の式の如く

$$\frac{324 \div 9}{9} = 9. \quad \frac{324 \div 4}{4} = 9. \quad \frac{324 \div 6}{6} = 9.$$

二回なれども早く除り得る法を用ゐるべし。是亦、除ると雖も、速算法なり。然るに之れも、相乘數ならざれば、此の速算を爲すこと能はず。十九、三十七、二十三、四十七、五十七などの數は二回以上に分ち難し、されど百六十二は、三、六、九の三數が乘り合ひたる數故

810÷3÷6÷9＝5.　　810÷9÷9÷3＝5.

810÷6÷3÷9＝5.　　810÷9÷3÷6＝5.

百六十二の五倍の八百十個は、三、六、九の何れを先にし、何れを後にするにも、順序に關せず、早割し得て、答數五個を得るなり。されば九々の聲ある數は、皆二回分ちの法數として、二回に速算し得ることゝ知るべし。

即ち二二が四は、二にて二回に割り得る理故、十二割は二と六、十四割は二と七、十六割は二と八にても、又は四と四にても、二回單位法割の速算を行ひ得るなり。二九十八以往は、これを推して知るべし。

英語早學

英語を知るには、先づアルハベットとて彼の國の二十六字假名を知り、次には字體、母音、父音、子音、拗音、濁音、半濁音、それを知りたらば羅馬字綴りを試み、此の綴りを知りて發音し、之れの發音より進みて英語を發音するなり。其の英語には、單語と會話とあり。單語を知りて會話に進むことは、無論順序なり。

〔アルハベット〕これは二十六字あり。我が邦の五十音字の如く、字々綴り合せて凡ての言語を書きあらはすなり。其の字形及び讀み方は左の如し。

A（エー）　B（ビー）　C（シー）　D（デー）　E（イー）　F（エフ）　G（ジー）　H（エッチ）　I（アイ）　J（ゼー）　K（ケー）　L（エル）　M（エム）

N（エン）　O（オー）　P（ピー）　Q（キュー）　R（アール）　S（エス）　T（ティー）　U（ユー）　V（ウィー）　W（ダブリウ）　X（エックス）　Y（ワイ）　Z（ズイ）

右を又、羅馬文字と云ひ、別に尙ほ、イタリヤ文字體と草体文字とあり。其の上に俗に花文字と云ふ一体あり。通常は、字体は三種なれども、花文字共に四体あるなり。

〔イタリヤ文字体〕即ち左の如し。

A B C D E F G H I J K L M
N O P Q R S T U V W X Y Z

〔草體文字〕即ち左の如し。

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z

〔母音、父音、子音〕母音はa i u e o五音にて、我が邦のアイウエオなり。此の他の二十一音は父音にて、父音と母音を合せて發出する音を子音と云ふ。一例を擧ぐれば母音のaと父音のsとを合すれば、saと云ふ子音の生ずるが如し

〔羅馬字綴五十音〕五十音は、ア行は母音にて下の圖の如く、父音母音を合せて生ずるは子音なり

A	I	U	E	O
Ka	Ki	Ku	Ke	Ko
Sa	Shi	Su	Se	So
Ta	Chi	Tsu	Te	To
Na	Ni	Nu	Ne	No
Ma	Mi	Mu	Me	Mo
Ya	Yi	Yu	Ye	Yo
Ra	Ri	Ru	Re	Ro
Wa	Wi	Wu	We	Wo

〔濁音、半濁音〕これも、父音と母音と合ひて、子音を生じたるなり。

〔濁音〕

Ga	Gi	Gu	Ge	Go
Za	Zi	Zu	Ze	Zo
Da	Di	Du	De	Do
Ba	Bi	Bu	Be	Bo

〔半濁音〕

Pa	Pi	Pu	Pe	Po

〔拗音〕これは、チヤ、キヤなど語る音なり

sha	shi	shu	she	sho
ja	ji	ju	je	jo
cha	chi	chu	che	cho
hya	hi	hyu	he	hyo
kya	ki	kyu	ke	kyo
mya	mi	myu	me	myo
nya	ni	nyu	ne	nyo
rya	ri	ryu	re	ryo

〔羅馬字綴り〕此の字を綴れば我が邦の言語も綴り得。之れを羅馬字綴りと云ふ。

		(十干)			
Kinoe	甲	Kinoto,	乙	Tsuchinoto.	
Hinoe	丙	Hinoto.	丁	Tsuchinoto.	
Tsuchinoe.	戊	Tsuchinoto.	己	Kanoto.	
Kanoe.	庚	Kanoto.	辛	Midzunoto	
Midzunoe.	壬	Midzunto	癸		
		(十二支)			
Ne.	子	Mnma.	午	Hitsuji.	
Ushi.	丑	Hitsuji.	未	Saru.	
Tora.	寅	Saru.	申	Tori.	
U.	卯	Tori.	酉	Inu.	
Tatsu.	辰	Inu.	戌	I.	
Mi.	巳	I.	亥		
		(日本名盡)			
I.	伊、猪、亥	Iso.	磯、雄	Yū.	
Ichi.	市、一	Yū.	勇、今	Ima.	
Ine.	稲	Ima.	石	Ishi.	
Iku.	幾、郁	Ishi.	祿	RoKu.	
Iwa.	岩	RoKu.	六、		

Haru.	春	Hachi.	八
Hana.	花	Hatsu.	初
Haya.	早、隼	Han.	伴、半、
Jin.	仁	Hama.	濱
Ben.	弁、辨、	Hei	平
Tyo.	豊	To.	都
Tō	東、藤、	Tora.	虎、寅、
Toki.	時	Toku,	篤、徳、
Tomi.	富	Tome.	留
Tnmo.	友	Toshi.	歳、年、
Chiyo.	千代	Chika.	近
Chō.	長	Chiū.	忠
Jū.	重	Chū.	鑄
Riyo.	龍、良、	Ri.	利、理、
Riu.	柳	Rin.	麟、林、
Nui.	縫	Riki.	力
O.	應	Rui.	類
		苗名盡	
Inouye.	井上	Iba	庭、伊
Inoshita.	井下	Ida.	田、井

Isawa.	伊澤 イザワ	Ihida.	飯田 イヒダ
Ihino.	飯野 イヒノ	Irokawa.	色川 イロカワ
Iwata	岩田 イワタ	Ii.	井伊 イイ
Ina.	伊奈 イヒナ	Ibe.	伊部 イベ
Ino.	猪野 イノ	Iguchi,	猪口 イグチ
Ihio.	飯尾 イイヲ	Ise.	伊勢 イセ
Iwai	岩井 イワイ	Iwane.	岩根 イワネ
Iwaya.	巖谷 イワヤ	Iwama.	岩間 イワマ
Iwate.	岩手 イワエ	Iwami.	岩見 イワミ
Iwase.	岩瀬 イワセ	Ihoji.	庵地 イホヂ
Ihono	庵野 イホノ	Iyenaga.	家長 イエナガ
Itoda.	糸田 イトダ	Ichimura.	市村 イチムラ
Ichii.	一井 イチイ	Ichiba.	市場 イチバ

單　語

CARDINAL NUMBERS.

數

One ワン	一
Two トゥー	二
Three. スリー	三
Four. フォーア	四
Five. ファイブ	五
Six. シックス	六
Seven. セブン	七
Eight. エート	八
Nine ナイン	九
Ten. テン	十
Eleven. イレブン	十一
Twelve. トウエルブン	十二
Thirteen サアーチーン	十三
Fourteen. フォーチーン	十四
Fifteen. フィフチーン	十五
Sixteen. シックスチーン	十六
Seventeen. セブンチーン	十七
Eighteen. エーチーン	十八
Nineteen. ナイチーン	十九
Twenty トウエンティ	二十
Twenty-one. トクエンティ ワン	二十一
Twenty-two. トウエンティ ツー	二十二
Tweuty-three	二十三

THE SEASONS.

四季

Spring (スプリング)	春
Summer (サムマー)	夏
Autumn (ヲータマ) fall (フヲーン)	秋
Winter (ウインター)	冬

THE MONTHS.

月

Janvary (ヂャニユアリヤ)	第一月
February (フエブラリー)	第二月
Maych (マーチ)	第三月
April (エープリン)	第四月
May (メエイ)	第五月
June (ジエン)	第六月
July (ジユライ)	第七月
August (アフガスト)	第八月
September (セプテンバー)	第九月
October (ヲクトバー)	第十月
November (ノーウエンバー)	第十一月

Twenty-four, etc (トウエンティ フヲーア エトス)	廿四等
Thirty (サーティ)	三十
Forty (フヲーティ)	四十
Fifty (フヲイフティ)	五十
Sixty (シツクスティ)	六十
Seventy (セブンティ)	七十
Seventy-one, etc (セブンティ ワン エスト)	七十一等
Eighty (エーティ)	八十
Ninety (ナイテン)	九十
A hundred (エ ハンドレツト)	一百
Two hundred (ツー ハンドレツト)	二百
Two hundred and sen (ツー ハンドレツド エンド テン)	二百及十
Three huudred, etc (スリー ハンドレツト エスト)	三百等
Three hundred and two (スリー ハンドレツト エンド ツー)	三百及二
A thousand (エ サウセンド)	一千
Two thousand etc (ツー サウセント エキス)	二千等
Ten thoursand (サン サウセンド)	一万
A million (エ ミリヨン)	一百万
Two millious etc (ツー ミリヨンス エスト)	二百万等

The day (ジー デー) … … … … … … … 晝

The morning (ジー モーニング) … … … … 朝(午前)

The afternoon (ジー アフタースーン) … … … … … 晝後

The evening (ジー イブニング) … … … … … … … 夕

An hour (エン アワア) … … … … … … 一時間

Half an hour (ハーフ アン アワア) … … … … … 半時

A quarter of an hour (エ クチアタア ヲフ エン アワア) … … 十五分時

A minute (エ ミニエト) … … … … … … 一分時

To-day (ツー デー) … … … … … … … 今日

Yesterday (エスターデー) … … … … … … 昨日

The day before Yesterday (ジー デー ビフヲーア ユスターデー) … … 一昨日

To-morrow (ツー モロー) … … … … … … 明日

The day after to-morrow (ジー デー アフター ツーモロウ) … … 明後日

A week (エ ウヰーク) … … … … … … … 一週間

A month (エ マンス) … … … … … … 一ケ月

A year (エ イヤア) … … … … … … … 一ケ年

A leap year (エ リーフ イヤア) … … … … … … 閏年

A century (エ センチウリマ) … … … … 一百年(一世紀)

The holidays (ヂー ホリデース) … … … … … 祭日

New-year's day (ヌウ イヤース デー) … … … … … 元旦

December (デセムバー) … … … … … … 第十二月

THE DATE. 目次

The first of January (ジー ファーストヲヴ ジャニユアリー) … … … … 元旦

The twentieth of April (ジー ツウエンチース ヲフ エーブリル) … 四月二十日(祭日)

The eleventh of June (ジー イヲン) … 六月十一日(式日)

THE DAYS OF THE WEEK.

七曜日

Sunday (サンデー) … … … … … … … 日曜日

Monday (マンデー) … … … … … … … 月曜日

Tuesday (チウスデー) … … … … … … 火曜日

Wednesday (ウエンスデー) … … … … … … 水曜日

Thursady (サースデー) … … … … … … 木曜日

Eriday (フライデー) … … … … … … … 金曜日

Saturday (サターデー) … … … … … … 土曜日

DIVISIONS OF TIME

時刻

A day (エ デー) … … … … … … … … 一日

Wafers. ……封糊
ウエイファス　フウジノリ

Sealing-wax ……封臘
シーリング　ウワイクス　ロウ

Peach coolu. ……桃色
ピーチ　カラー　モヤイロ

Rose colour. ……薔薇色
ローズ　カラー　イバラ

Flesh colour. ……肉色
フレッシュ　カラー　ニクイロ

Olive. ……橄欖色
オライブ　カンラン

Dark. ……暗黑
ダアーク　アンコク

Purple, violet. ……紫色
パープル　ウアヲレト　ムラサキ

Indigo. ……藍色
インディゴ　アイイロ

WILD BEASTS AND BIRDS

禽　獸

The lion. ……牡獅子
ヂー　ライヲン　ナシ

The lioness. ……牝獅子
ヂー　ライヲネス　メジ

The tiger. ……牡虎
ヂー　タイガー　ヲトラ

The tigress. ……牝虎
ヂー　タイガース　メトラ

The wolf. ……狼
ヂー　ウルフ　オーカミ

The she-wolf. ……牝狼
ヂー　シ　ウルフ　メス

The elePhant. ……象
ヂー　エレフアント　ザウ

The leopard. ……豹
ヂー　レハアド　ヘウ

Easter. ……耶蘇更生祭
イスター

Whitsuntide ……更生後第七日曜
ホイトサンタイド

Midsummer-day ……夏至
ミツドサンマー　デー

Michaelmas. ……祭日(九月廿五日)
ミクルマス

Christmas. ……耶蘇ノ誕生日(十二月廿五日)
クリストマス

COLOURS. 色

The drawing. ……畫翰
ジードロウイング

The colour. ……色
ジー　カラア

Bluek ……藍色
ブリユウ

Black. ……黑色
ブラック　クロイロ

White. ……白色
ホワイト　シロ

Bed. ……赤色
ベツト　アカ

Brown. ……茶褐色
ブロウン　チヤカツ

Yellow. ……黃色
エルロ　キ

Green. ……綠色
グリン　ミトリ

Gray. ……鼠色
グレイ

The Pieture. ……繪圖
ジー　ピクチユアー　エヅ

The portrait. ……像圖
ジー　ポートレート

The letter. ……書繪
ジー　レツタル　テガミ

DOMESTIC ANIMALS.

家畜

The dog (ジー ドッグ) ..... 犬
The spaniel. (ジー スパニール) ..... 獵犬 (カリイヌ)
The greyhound. (ジー クレーハウンド) ..... (仝上)
The cat. (ジー キャット) ..... 猫 (ネコ)
The goat (ジー ゴート) ..... 山羊 (ヤギ)
The sheeP. (ジー シイプ) ..... 綿羊 (ヒツジ)
The lamb. (ジー ラム) ..... 子羊 (コヒツジ)
The cow. (ジー カウ) ..... 牝牛 (メウシ)
The ox (ジー オックス) ..... 牡牛 (オウシ)
The horse. (ジー ホース) ..... 馬 (ウマ)
The courser. (ジー コーアサー) ..... 駿馬 (ハヤウマ)
The colt (ジー コールト) ..... 若馬 (コウマ)
The ass. (ジー アッス) ..... 驢 (ウサギウマ)
The mule (ジー ミユール) ..... 騾 (ラバ)
The goose. (ジー グーウス) ..... 鵞鳥
The pigeon (ジー ピッジョン) ..... 鳩 (ハト)
The duck (ジー ダック) ..... 雌鴨 (メアヒル)
The turkey (ジー タアキイ) ..... 吐綬鶏 (シチメンチヤウ)

The bear. (ジー ベアー) ..... 熊 (クマ)
The fox (ジー フォックス) ..... 狐 (キツネ)
The hare. (ジー ヘア) ..... 兎 (ウサギ)
The rabbit. (ジー ラビット) ..... 家兎 (ナンキンウサギ)
The wood-pecker (ジー ウッド ペッカ) ..... 啄木鳥 (キツツキ)
The wren. (ジー レン) ..... 巧婦鳥 (ミソサザイ)
The stag (ジー スタグ) ..... 牡鹿 (オシカ)
The chamois. (ジー シャモイ) ..... 羚羊 (レイヤウ)
The squirrel (ジー スクアレル) ..... 栗鼠 (リス)
The eagle. (ジー イーグール) ..... 鷲 (ワシ)
The owl (ジー オウル) ..... 梟 (フクロ)
The ostrich (ジー オストリチユ) ..... 駝鳥 (ダチウ)
The falcon. (ジー フォクン) ..... 鷹 (タカ)
The partridge (ジー パアトリヂ) ..... 鳴鶉 (ウヤラ)
The wood-cock. (ジー ウッド コック) ..... 鶴 (カササギ)
The snipe. (ジー スナイプ) ..... 鷸 (シギ)
The canary-bird. (ジー カナリ ハト) ..... 福嶋鳥 (カナリヤ)
The nightiugale (ジー ナイチンゲール) ..... 鶯類 (ウグイス)
The Parrot. (ジー パーロット) ..... 鸚鵡 (アウム)
The turkey (ジー タアキー) ..... 七面鳥

A cock ……雄鶏
エ コック ニワトリ

A hen ……雌鶏
エ ヘン メニワトリ

A chicken ……雛鶏
エ チツケン ヒヨコ

The Peacock ……孔雀
ジー ピーコツク クジヤク

會話

途上ニ於テ

グツト モーニング サー
Good morning Sir
(2)今日ハ (1)先生
先生今日ハ

グツト モーニング ハウ
Good morning. How
今日ハ (1)如何ニ
今日ハ氣嫌ハ宜イカ

アール ユー
are you ?
(3)アル(2)汝ハ(4)カ

サンク ユー エンド
Thank you and
(2)謝ス (1)汝ニ(3)ソシテ
有難ウソシテ先生ハ

ユー
you ?
(4)汝ハ

アイ アム クワイト
I am quite
(1)私ハ (4)アル (2)全ク
ウエル ホエアー ドウー
well Whehe do
(3)ヨク (2)ドコニ(5)ナス
私ハ全ク健康デス

ユー リブ ナウ
you live now ?
(3)汝ハ(4)住ミ(1)今(6)カ
今ハ何處ニ居ルカ

ユー シー ゼアー
You see there
(1)御覽ノ通リ (2)彼處ニ
御覽ノ通リ彼處ニ

アール エ ストーン
are a Stoue
(4)アル (3)石ノ
石造ノ建築物ガアリマス

ビルディング
bu.ilding
(4)建物ガ

アワー ホーム スタンズ
Our home stands
(1)我々ノ(2)家ハ (9)立ツ
私等ノ家ハソノ建物ノ右側ニ立ツテ居マス

ザ ライト ハンド
on the right hand
(8)ニ (5)右ノ (6)手ノ

サイド オブ ザ ビルディング
side of the building
(7)側ノ(3)ソノ(4)建物

ウエル グツト バイ
Well Goog bye
(1)宜シイ(2)サヨナラ
ソウデスカサヨナラ

グツト バイ サー
Good bye sir
(2)サヨナラ (1)先生
先生ソレデハ

買物

クラク グツト モーニング
Clerk: Good mornig
番頭
サー
sir
今日ハ

カスタマー アイ ウチント
Customer: I want
客 (1)私ハ(3)入用ダ
アン アンブレラ
an umbrella.
(2)蝙蝠傘ガ
蝙蝠傘ガ入用ダ

ショー ミー エ
Show me a
(4)見セヨ(3)私ニ
スタウト ワン
stout one
(1)丈夫ナ(2)ヤツヲ
丈夫ナヤツヲ見セテ呉レ

ザス ウイル
Clerk: This will
(1)コレハ(4)デセウト
スーツ ユー
suit you
(8)適スル(2)アナタニ
コレナラ御氣ニ入ルダラウト存ジマス

Familar phrases. 簡易會話

(1) Vist. (1) 訪問ノ部

There is a knock 取次ガアリマスヨ

Go and see who it 誰樣カ見テヲイデ

is. Come in ヲハイリナサイ

It is Mr B. C. ビー、シー、樣デ御座イマス

Good morning. 御早ウ御座イマス

I am very glad to ビー、シー、樣ヨーコソ

see you, Mr. B. C. 御出下サイマシタ

How are you? 御機嫌ハ如何デスカ

I am very well thank 有リ難ク至極壯健デス

ou.

Sit down, Please. 何卒御着座下サイ

I have not seen 昨年カラ一度モ御目ニ

youaince last year. 掛リマセンデシタ

You are quite a stran 貴君ハ御珍イ御客樣デ

ges ス

Have you brekfasted? 朝飯ヲ召上リマシタカ

No, not yet. 否未ダ食シマセズ

I think. ソレハ甚ダ強イデス

(5)私ハ (6)思フ

It is very

(1)ソレハ(4)アル(2)甚ダ

stout

(3)強ク

Customer: Yes ソウカコレデヨイ

(1)ソウコ

this will do イクラダ

(2)コレデヨイ

What is the

(2)何デ (3)アル

Price ?

(1)價ハ (4)カ

Clerk. Two yen and 貳圓六拾錢デス

貳 圓 ト

Sixty sen

六 拾 錢

Customer; It is

(1)ソレハ(4)アル ソレハ余リ高イ

too dear.

(2)アマリ(3)高ク

Curk We sell 我々ハソレヲ

(1)我々ハ(5)ウル

it for 貳圓六拾錢デ賣ッテ

(2)ソレヲ (4)デ

260 yen; but 居マス然シ現金拂デ

(3)貳圓六拾錢(1)シカシ

I will take スカラ一割引マセウ

(1)私ハ (10)マセシ(8)取

off ten percent

(9)去リ(6)十 (7)歩

for cash Payment.

(5)爲ニ(3)現金 (4)拂ノ

清韓語

〔清語の部〕

總じて語學は、何國の語を學ぶにも、發音に重きを置くなり。支那語には必要なる四種の發音あり。それを熟して四聲の區別を待、而して發音を變化するに巧みなるべし。

（有氣音）　これは四種中の發音にて　起（チ）、前（チエヌ）、刻（コオ）の如き音なり。他の三音は次の如し。

（無氣音）　これは尋常平易に發する音なり。

（寛音）　これは、年（ニエヌ）、春（チエヌ）、點（テヌ）、片（ピエヌ）等の如き音なり。

（窄音）　これは、明（ミン）、樣（ヤン）、城（チヨン）等の如き音なり。

（四聲）　これは平聲、上聲、去聲、入聲なり。されど入聲は南方の聲にて、此方には無しと云へり。依て北方にては、上平聲、下平聲、上聲、去聲とせり。

上平聲は平聲にて高低無き聲。下平聲は平聲なれども聲の尾り昂り、それを輕く抑ゆる如き調子の聲。上聲は發音烈しく音尾を長く引く調子の聲。去聲は聲が下に向ひて去り、消

ゆく如き調子なり。而して入聲とは、音尾入るが如き調子の聲なり。

（變化）　例へば長（チヤン）を長官などの長（おさ）の意に用ゐるときには上聲を用ゐ、長短の長にて長しと云ふ意には、下平聲を用ゐるの類なり。

（數目）　一（イー）　二（アル）　三（サヌ）　四（スー）　五（ウー）　六（リウ）　七（チー）　八（パー）　九（チウ）　十（シー）　百（パイ）　千（チエヌ）　萬（ワヌ）　億（イ）　兆（チヤオ）

（四季）　春（チエヌ、テヌ）　夏（シヤー、テヌ）　秋（チウ、テヌ）　冬（トン、テヌ）

（四方）　東（トン）　西（シー）　南（ナヌ）　北（ペー）。

（時辰）　夜明を、天亮（テヌリヤン）又は黎明（レイミン）　早朝を、早晨（ツアヌチエヌ）　午前を、早半天（ツアヌパヌテヌ）　又、前半天（チエヌパヌテヌ）　又、上半天（シヤンパヌテヌ）　正午を（チヨン、ポー）　午後を、後半天（ホウパヌテヌ）　又は晩半天（ワヌパヌテヌ）　又は下半天（シヤーパヌテヌ）　晝間を白晝（パイチウ）　暮方を黄昏（ホワヌホヌ）　夕を晩上（ワヌシヤン）　夜を夜裡（イエーリー）　又は黑下

（ペーシャー）夜半を、半夜裡（バヌオエーリ）今日を、今天（チヌテヌ）又は遠八（チョテヌ）又は今兒（チヌル）明日を、明日（ミンリー）、又は明天（ミンテヌ）、又は明兒（ミヤヌヌ）。明後日を、後日（ホウリー）又は後天（ホウテヌ）又は昨兒（ッヌール）。一昨日を、前天（チエヌテヌ）、又は前兒（チエル）毎日を、毎天（メイテヌ）又は見天（チエヌテヌ）、

（天文）太陽を日頭（リートー）太陰を、月亮（ユエリヤン）星を、星星（シンシン）空氣を、大氣（ターチー）雲を雲彩（ユイヌツアイ）雨を（ユーイ）風を（フヲン）雪を（シュエ）虹を（カン）雷を（レイ）電光を閃（シャン）。

（地理）地球を（ブーチウ）海を（ハイ）大洋を（ターヤン）島を（ハイタヲ）陸地を旱地（ハヌルー）湖水を（フウー）港を馬頭（マートー）山を（シャヌ）河を（ホー）谷を、山澗子（シャヌシエヌッ）野を曠野（コオンイエー）

（人類）人を（レヌ）男子を（ナヌッ）女子を（ニユイツ）男子兒を小子（シャヲッ）又は小孩子（シャヲハイッ）女の兒を姑娘（クーニヤン）又は女孩兒（ニユイハイル）子供を小孩兒（シャヲハイル）父を父親（フーチヌ）母を母親（ムーチヌ）兄を哥哥（コーコー）弟を兄弟（シュンテー）姉を姐姐（チエーチエー）妹を妹妹（メイメイ）夫を丈夫（チャンフ）又は男人（ナヌレイ）妻を、媳婦兒（シーフル）長男を長房（チャンフアン）次男を排二（ハイアル）。

（會話）訪問の挨拶語にては、

令堂老太々好啊（リンタンラヲタイタイハヲア）

右は御母様御機嫌宜しく御座いますか」と言ふなり。

是好（シーハヲ）これは、ハイお蔭で達者で居りこす」との答なり。

〔韓語ノ部〕

韓國人の音字は九十九個ありて。子音・母音・餘音・輕音、激音、重音、重激音あり。

（數目）一個（ハーナ）二個（ッウル）三個（セー）四個（デー）五個（タソッ）

六個（ヨツツ）七個（イルコブ）八個（ヤタル）九個（アホブ）十個（イヨル）
一百（イルペーク）一千（イルチョン）一万（イルマン）一億（イルオク）
（日時）今日（オーヌル）明日（チーイル）明後日（モーレー）前日（チョーニル）
昨日（オーチョイ）一昨日（クーチョツコイ）毎日（マイイル）朝（アッチム）
晝（ナーツ）夕（チョーニョク）夜（バム）未明（セイビョク）時刻（シーカイク）今年（クムニョン）明年（ミョケニョン）去年（コーニョン）前年（チョンニョン）翌年（イーヅムハイ）毎年（マイニョン）半年（バンニョン）一昨年（チャイチヤクニョン）
（四季）春（ポム）夏（イヨールム）秋（カーウル）冬（キョウウル）
（人類）親（ヲボーイー）父（アポーチ）母（ヲモーニ）長男（マツアツル）長女（マツタル）娘（ツルチヤアシク）小兒（アヘー）弟（アーウー）姉（ヌーイム）妹（ヌーウー）妾（チョブ）。
（天文）日（ハイ）月（タル）星（ピョル）風（プグ）雲（クールム）雪（ヌーン）雨（ピー）露（イースル）霜（リーソー）天（ハーヌル）
（地理）山（サン）川（ナイ）海（バーター）島（ソム）港（ポークー）湖水（ホーシユー）嶺（チャイ）坂（コーカイ）瀑布（ポクポー）
（會話）（コーットウナー、カーケッツソーヨ）最早お立になりますか。（マールン、ヲークーイッソーヨ）馬は何處に居ますか。
（ヲーテーインヌンチー、チヤル、モールチツソー、マーヌン、ムンバーグウー、マーバダチーベー、イッター、ハーヲプテータ）何處かは能く知りませんが、門外の馬屋に居ると言ひます。
（イー、クーリー、ハーヲーリータ）唯承知しました。

簿記法

ヤは會計帳簿の組立及び其記入に關する術を云ふ。會計とは財産の收支、即ち增減變化の顚末を計算處理することにて、此財産の增減變化は或は交換と云ひ取引と云ひ又特に貸借とい

ひ實に簿記計算の要素たり。簿記上の貸借の普通に所謂取引又は交換と異なる要点は其必ずしも人の行爲に由るを要せず、水難火難若しくは物價變動等苟も自己所有の財産に變化を來たしたる時、悉くこれを貸借として取扱ふに在り、要之簿記は所謂貸借關係を明瞭に計算處理するを以て目的とする記帳の法なり。而して簿記には單式と複式あり、單式は頗る簡單なるが複式は名の如く方式複雜なり。然し普通に簿記といへば概して此複式を云ふ。又簿記は其事業の異なるに隨ひ商業簿記、銀行簿記、會社簿記、工業簿記、官廳簿記若しくは家計簿記等に區別さる、されど其原理は一なり。

（勘定科目）貸借の目的物には有體物あり無體物あり、まだ有形の原因あり無形の原因あり すべて之れを取引の種類によつて分ち、各々其取引に科目の名稱を附す、これを勘定科目と云ふ。勘定科目の設定は各自の便宜に從ふものなれど、大別して資産負債に屬するものと損益に屬するものとに區別するを要す

（仕譯）各取引につき、交換の目的物を貸と借との双方に振付くるをいふ、當方に受けたるを借方とし、渡したるを貸方とす

（帳簿）取引の顚末を記錄して財産の增減變化を明知する用に供ふるもの也。其組織及体裁は一樣ならざれど、性質上別つて二とす、主要簿及ひ補助簿是れなり。主要簿は會計帳簿の樞軸となるものにして、日記帳、仕譯帳及び元帳是れなり。日記帳は日々の取引を第一着に記入し諸帳簿の基礎となるもの。仕譯帳は日記帳の取引を貸借に仕譯し日記帳と元帳とを連絡するもの、元帳は營業全般の結果を表はす帳簿にて、仕譯帳に照して勘定科目を定め、これに隨て口座を設け、仕譯帳より貸借双方の金額を轉記して各勘定毎に其收支は明かにし決算の方法に因りて財産の增減變化の顚末を計算處理するものなり。補助簿は主要簿中の或る特殊の勘定科目又は事項に關して精細の記錄をなすものにて、即ち金錢出納帳、商品仕入帳商品賣上帳及び手形帳、受取手形記入帳、支拂手形記入帳等是れなり、以上簿記法の概要とす

速記

速記術は其の始は、西洋の紀元前八十年代に、羅馬國にて有名なりし、シセローが、其の門下生なるチロー。エンイアス二人に筆記を掌らしめ、シセロー始めて簡單なる略記法を授け

速記法なりし故に、これを歐米速記術の嚆矢と云へり。其の後紀元後に至り、改良家續起し今の如く進みたるを我が邦にては岩手縣の人田鎖綱紀氏に傳はり、氏は更に日本速記術なるものを發明し、今盛んに行はるゝなり。

（速記術の定義）　これは簡單明瞭なる特殊の文字にて他の云ふ音聲を、其の發すると同時に同經過間に後れず速記し得るなり。普通の文字を書きては、人の語る發聲經過間に後るゝ故に人の發聲間と同時に書き得る文字、即ち特殊の文字を製して應用するなり。然らば速記し得るは理の當然なり。

（速記を學ぶ第一着）　これは先づ五十音の、父音、母音を知りて、子音の生ずることを識るなり、これは他科の英語早學のところを述べたり。アイウエオは母音にて、其の他の父音其の父音と母音と合して生ずるものを子音とせり。

（速記用の文字）　これは人の發音に合ふ假名文字に代ふる象形文字なり。此の文字は一種の法を以て割出し、横線、縱線、斜線、曲線形の一音なる文字なり。例せばカは横線子、ウは縱線字、タは右斜線字、パは左斜線字、マは上より覆ふ曲線字即ち横線字の下へ曲りたるもの、又同字の上へ曲りたるあり。縱線字の左へ曲るもの、右へ曲るもあり。斜線字の左へ曲りたるも右へ曲りたるもあり。總て斜線字斜曲線字は角度の傾斜を以て同異を識別するを得しむ斯る製字法にて、何の音聲と具はらざること無からしむ。依て之れを速記文字と號するなり。

音聲の長短、高低、抑揚、頓挫、拗音、疊呼、連綴、伸縮、發音前後の聲況、數字等をも要すゝ故に是等は符號を附して別つものとす。

（連綴語速記）　これは、平聲、長聲、短聲、急聲の四種に分つ。

（疊呼速記）　此の綴り方は、輕單、重單、輕複、重複の四種に分つ。

（縮語速記）　これは母音の各個に依り、中間に母音挾まるとき、拗韻の縮音に依り語の長、短、緩、急に依りて種々に分る。

（前字）　これは語意を變ずるとき、前に簡單に附記する速記なり。即ち其の際を形容するなり。これにも鄭重、複數等の種類分る。

（複字）　これは語の後へに附加し、語意を成すものなり。これにも名詞、形容詞、副詞、助

助詞等の種別あり。

（習字）速記文字を知りたれば、それを書き習ひ、達者に書き得て、綴り方も、符號標をも覺ゑ、又、先輩が速記文字のみにて、書きあるものを讀むことを練習するなり。

（讀方練習）これは、速記文字のみの書面を、普通文字の書面に複文し、又、速記文字に書綴り、或は速記文字のみの書狀を同學生同志が贈答し、達者に讀み得る樣に練習しあぐるなり。

（復文）速記文字を達者に書き得、速記文字の書を達者に讀み得る伎倆を得たれば、實際他の語を速記し、それを復文して、普通文字の語文とするなり。

（句讀及び校正の符號標）速記文字の他に、種々符號標あり。凡そ左の如し。

文首標、　本名標、　地名標、　連字標、　句讀標、　段落標、　廢文標、　引用標、
喝采標、　承前標、　未完標、　否不標、　完了標、　添註標、　疑問標、　再用標、
分字標、　合字標、　除段標、　轉語標等。

漢詩

我邦の和歌に對して支那に歌あり。古詩として詩の起りは、彼の五經の中の詩經にある詩なり五言絶句の詩は、前漢の時代に始まり、次れより七言、律など起りたり。これも歌なる故に唐歌と言へり。支那歷朝の中にて、唐朝は詩の最も盛んなりし時にてもあり、我邦より留學生の行通ひたるときなれば、實に詩の黃金時代なりき。漢詩の何たるを知るには、左に掲ぐるを見て知るべし。

（種類）古詩、律詩、絶句の別あり。此の外樂府も亦詩の一體として擧ぐるを得べし。されど普通に世に行はるゝは、律と絶句にして、古詩は多く行はれず。故に茲に律と絶句とのみに就て述ぶべし。

（音韻）漢字は其の音韻に依りて之れを平、上、去、入の四聲に分ち、總ての字は各四聲中の何れにか屬す。但し通韻として二聲に通ずる字も有り。又、同一字にても意義に依りて音韻を異にし所屬を二三にするも有り。平聲は上平聲と下平聲とに分ち、一より十五までの

十五韻とす。

（下平聲）東、冬、江、支、微、魚、虞、齊、佳、灰、眞、文、元、寒、刪。

（下平聲）先、蕭、肴、豪、歌、麻、陽、庚、靑、蒸、尤、侵、覃、鹽、咸。

（上　聲）董、腫、講、紙、尾、語、虞、薺、蟹、賄、軫、吻、阮、旱、潸、銑、篠、巧、皓、哿、馬、養、梗、迥、有、寢、感、琰、豏。

（去　聲）送、宋、絳、寘、冀、未、御、遇、霽、泰、卦、除、震、問、願、翰、諫、霰、嘯、效、號、箇、禡、漾、敬、徑、宥、沁、勘、豔、陷。

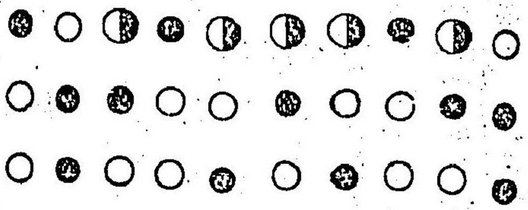
（入　聲）屋、沃、覺、質、物、月、曷、黠、屑、薬、陌、錫、緝、合、葉、洽。

即ち四聲の總計一百六韻あり。漢字は總て此の中の何れかの韻に屬す。斯て平聲に屬する字を平字、他の三聲に屬るす字を仄字と定む。

（平仄法）文字の排置は、必ず平仄法に由らざるべからず。平仄法には平起法と仄起法とあり。左表に示す。（表中の○は平字、●は仄字、◑は平仄何れにも通用す。）

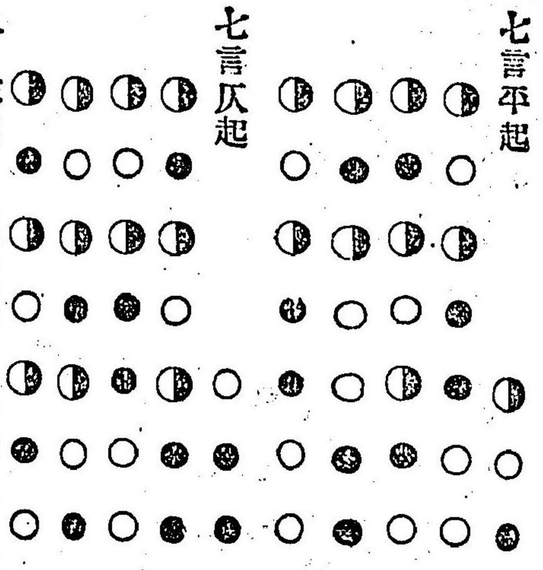
上列を五言絶句とし、下列を七言絶句とす。

五言平起



五言仄起

七言平起



七言仄起

平仄法の要は、二四不同、二六對とて、第二と第四とは平仄異にし、第五と第六とは相同じとす。又、右の表中に傍記したるは蹈落しと稱する變則法にて、五言絶句は此の法に據ること多し。律詩の平仄は絶句の平起、又は仄起を二つ連ね、第五句を蹈落しにするなり

（起承轉結）第一を起句と謂ふ。即ち詩意を提起し、第二の承句は之れを受け、第三の轉句は詩意を一轉し。第四の結句にて前三句の意を綜合するなり。

（作例）左に律・七言五言絶句の詩を掲ぐ。

和歌

和歌の道に敷島の道と云ひ純粹なる我が國風として上下ともに詠じ、互ひの思想感情を吐露するの具と爲す。和歌の中には長歌、旋頭歌、今様など種々あれど、最も普通なるは短歌にして、國音の文字三十一よりなるなり。又三十一文字とも云ふ。

歌をよむ者は、先づ國語の假名づかいと、てにをはとを知り、國語のみにてよみて、詞の掛りを受とをも覺ね、山鳥をよむときには、あし曳のと云ふ枕詞ある如く、山をよむ都會にてあし曳を前によみかくるなり。光には久方、吾妻には鳥が啼くなど付くることをも知るべし掛りと受とは、例へば、花はと掛かれば散りけりと受け、花ろと掛かれば散りけると受け、花こそと掛かれば、散りけれと受くる定まりを知るなり。

は、けり。ろ、ける。こそ、けれ。是れなり。

右などを、てにをはと云ふ。此の詞づかひを心得る爲に、言葉のやちまたの始めを少し記し修業の緒と爲さむ。

本居の大人曰へらく。言葉のはたらきは、いかにとも言ひしらず。いとも〳〵くさしく、たへなるものにて、ひとつ言葉も、そのつかひざまによりて事かはり、はたらきに隨ひつゝ意も異に聞ねなどして、千々のことを言ひわかち、よろづのことを語りわかつに、いさゝか紛るゝことなく、また見るもの聞く物、人の心におしこめたる思ひのくま〳〵、すべて世の中に有りしとあること幾千万のことなりとも言ひ盡し、まねびやらむに足らぬことなく、あかぬこと無きも、この活によるわざになむありける。さるは神代より、おのづからさだまりありて、今の世にいたるまで、うつりかはることなく、いさゝかも、たがひあやまるときはそのことわからず。その意きこゆがたきものにしあれば、一文字といへども、みだりにはぶき、みだりにくはへなど、すべておぼろかに思ひなすべきわざにはあらずなむ。かくて古の人は、おのづから辨へて、用ひたがふることは無かりつるを、後の世となりては、やう〳〵

にみだれゆきつゝ、誤ることのみ多くなりぬるを、世に見とがむる人もなく、とかくあげつらふ書も見ねぬまゝに、いよ〳〵亂れあやまることのみぞおほくなりにける。かゝればものまなばむ人は、いにしへの正しくうるはしきを、能く考へ深くならひとこそ物すべきわざなるを、いかにおもひたどらず。たゞなほざりにのみ思ひすぐして、猶あやまること多きはいかにぞや。されば歌よくよみ、文章よく作れる人は、おのれ能く心得とはなけれど、おのづからのものにしあれば、おのづからかなひて、たがふることは、おさ〳〵無かめるを、うひまなびのともがらは、いとたど〳〵しく、まぎらはしげにて、あやまること、いとおほければ今その人々に、さとし知らしめんとて、いにしへの、そのさだまりを、これかれあげて、くはしくわかちしるしつ。こを詞の八衢（やちまた）こも名づけたるよしは、おなじ言の葉を、その活（はたらき）さまによつていづかたへも、おもむきゆくものにしあれば、道になぞらへて、かくは物しつるになむ。見む人よくたどりて、ふみまがふることなかれ。

四種のはたらきと云ふは、四段の活、一段の活、中二段の活、下二段の活、此四つなり。活のさまは次にいふべし。さて、これらの名、もとよりあるにあらざれども、事をわかちいはむは、名目なくては、たよりあしければ、今かりに付けたるなり。

四段の活とは、かきくけさしすせとやうに、第一の音より四の音まで次々四段にあかむ、あき、あく、あけ、おさむ、おし、おす、おせなど、はたらきをいふなり。

四種の活の圖（並に受るてにをは）

四段の活							
飽	押	打	逢	住	釣		
（か）	（さ）	（た）	（は）	（ま）	（ら）		
ず	で	じ	ぬ	む	まし		
（き）	（し）	（ち）	（ひ）	（み）	（り）		
て	けり	けむ	つる	し			
つゝ	き	なば	ぬる	しか			
（く）	（す）	（つ）	（ふ）	（む）	（る）		
めり	らん	べき	らし	と	ども		
かな	まで	に	を	より			
（け）	（せ）	（て）	（へ）	（め）	（れ）		
ば		ど		ども			

此處四段の活と一段の活とは切ると續くとを兼ねて一つなるを中二段の活下二段の活にては二つに分れたり

一段の活						
射	着	似	干	見	居	
(い)	(き)	(に)	(ひ)	(み)	(ゐ)	
す	で	じ	ぬ	む	ま	し

中二段の活						
起	落	繼	試	老	舊	率
(き)	(ち)	(ひ)	(み)	(い)	(り)	(ゐ)
す	で	し	ぬ	む	ま	し

て	け	り	む	る	ぬ	し
つゝ	き	な	ば			しか

(い)る	(き)る	(に)る	(ひ)る	(み)る	(ゐ)る	
め	ら	べ	し	と	ど	も
か	な	ま	で	に	を	より

(く)め	(つ)ら	(ふ)べ	(む)し	(ゆ)と	(る)ど	も

(く)る	(つ)る	(ふ)る	(む)る	(ゆ)る	(る)ゝ	(う)
か	な	ま	に	を	より	

(い)れ	(き)れ	(に)れ	(ひ)れ	(み)れ	(ゐ)れ	
ば	ど	も				

(く)れ	(つ)れ	(ふ)れ	(む)れ	(ゆ)れ	(る)れ	(う)れ
ば	ど	も				

下二段の活						
得	受	痩	捨	兼	辨	譽
(え)	(け)	(せ)	(て)	(ね)	(へ)	(め)
す	で	じ	ぬ	む	ま	し

て	け	り	け	む	る	ぬ
つゝ	き		な	ば		しか

(う)	(く)め	(す)ら	(つ)ん	(ぬ)べ	(ふ)し	(む)と
ど	も					

(う)	(く)る	(す)る	(つ)る	(ぬ)る	(ふ)る	(む)る
か	な	ま	で	に	を	ゆる
(る)ゝ	より					

(う)れ	(く)れ	(す)れ	(つ)れ	(ぬ)れ	(ふ)れ	(む)れ
ば	ど					
(ゆ)れ	(る)れ	(う)れ				
ど	も					

飢	枯	消	譽	辨	兼	捨
(ゑ)	(れ)	(え)	(め)	(へ)	(ね)	(て)
	し	む	ま	ぬ	じ	で

け	り	け	む	る	ぬ	し
	き		な	ば		しか

(け)る	(り)ん	(け)べ	(む)し	(る)と	(ぬ)ど	も

(け)る	(り)る	(け)る	(む)る	(る)る	(ぬ)る	(し)る
か	な	ま	に	を	より	

(け)れ	(り)れ	(け)れ	(む)れ	(る)れ	(ぬ)れ	(し)れ
ば	ど					
(け)れ	(り)れ	(け)れ	(む)れ	(る)れ	(ぬ)れ	(し)れ
ど	も					

○第三編和歌

受るてにをは

此處一段の活、中二段の活、下二段の活は一つなるを四段の活にては二つに分れたり。二段の活とは、い、いる、いれ、き、きる、きれなど、第二の音一段のみにて活くをいふ。いる、いれ、きる、きれのるれは、言を添へて活をなせるにて、其行の音には拘はらざるなり。さて、此はたらきを、總て一音にていきと云ふより外なければ、この活ことばいとすくなし。

中二段の活とは、き、く、くる、くれ、ち、つ、つる、つれと、第二の音、三の音二段にておき、おく、おくる、おくれ、とち、とづ、とづる、とづれなど、はたらくを云ふなり。くる、くれ、つる、つれのるれは、一段の活の所に云へるが如し。この活き詞も多からず

下二段の活とは、く、くる、くれ、け、す、する、すれ、せと、第二の音と第四の音との二段にて、うく、うくる、うくれ、うけ、見す、見する、見すれ、見せなど、活くを云へりくる、くれ、する、すれのるれは、これも上にいへるに同じ。この活の詞にまたいとゝほし。

又、この四種のはたらきのおなじたぐひにて、いさゝか活きの異なるあり。（下略）

（歴代和歌新古の例）これを左に示さん。

（太古）八雲たつ出雲八重垣つまこめに、八重垣つくるその八重垣を　素盞雄尊

（上古）田子浦ゆうちいでゝ見ればましろにぞ、ふじの高ねに雪はふりける　山部赤人

（中古）世の中にたえてさくらのなかりせは、春の心はのどけからまし　左原業平

（近古）駒とめて袖うち拂ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕ぐれ　藤原定家

（近世）初瀬野や里のうなゐに宿とへば、霞める梅のおち枝をぞさす　僧契仲

俳句

俳句は俳諧發句なり。發句は俳諧に屬す。俳諧とは原と滑稽の意にて、之れに邦訓を施せば洒落（しゃれ）とか又は諧謔（どけ）とか讀むべきものとす。故に支那の詩に俳諧体のものあり。彼の明代（かん）の某が贈婦吹火と題して、「吹レ火朱唇動。添薪玉腕斜。遙看煙裡面。一大似霧中花。」とあり。又我邦の和歌にも俳諧体なるものあり。既に古今集に、「秋風に綻びぬらん藤袴つゞれさせてふきりぐす啼く」と。斯く詩歌に俳諧体あるより、連歌にも亦同じく俳諧体なるもの起りて、

莠玖波集に、「奥山に船こぐ音や閑ゆなり」とある前句に、紀貫之が「なれる木の實やうみわたるらん」と附けられしは是れなり。其の後俳諧体の連歌なるもの、後土御門天皇の御宇、文明年中山崎宗鑑等頻りに之れを唱へて世に鳴る。されど僅に發句・脇に止まりて、其の式等も無かりき。爾來俳諧の連歌漸次流行し、「荒木田守武、杉田望一等出でゝ稍や定まり、發句等も其の体備はるに及べり。

日本記や天地一枚明の春　守武
春立つやにほん愛たき門の松　守武
夫と聞く空耳もがな郭公　望一

是れ等の吟ありて百韻等をも聯けし趣き、茲に松永貞徳なる人ありて、大に斯の道を主張し宗匠の地位を占めて、始めて俳諧の連歌の式を作る。此人の門に季吟、貞室、重頼、立圃等出で、益々俳諧の連歌に遊ぶ人多し。中に浪華の宗因、伊丹の鬼貫などは一機軸を出せり。松永貞徳始めて俳諧の連歌なるものゝ式を立つる以前に、望一こそ少しく此の傾きありたれど多くは、

摩迦般若はらみ女の奇特かな　宗鑑
一二も濟でさんの紐解く　宗長

多くは斯る秀句にて、所謂地口又は口合と云ふ題にて、俳諧の字義に適したりき。爾るに貞徳は之れ等に據らず、

雪月花一時に見する卯木かな　貞徳

此の体の句を吟せしより、門人又其の他も

是は〳〵と許り花の吉野山　貞室
庭にさへ嘸な落葉の東山　立圃
木枯しの果はありけり海の音　言水
白炭や燒かぬ昔は雪の枝　忠知

斯る高尚なる吟詠となり其の實を言へば、俳諧の連歌なるものに稍や遠くなれり。茲に至りて浪華の宗因は、大きに貞徳の門派を謗り、彼輩は俳諧の連歌を爲すに非ずとし、

浪華津にさくやの雨や梅の花　宗因

などの發句を吐き、俳諧の俳諧たる所を稱ふるも用ゐられず。遂に東武に去りて檀林風を起す。關東は悉く之れに靡き、俳諧とし言へば檀林の一風のみと思ふ者あるに至れり。此の時に當りて、北村季吟の門人に、伊賀の上野の藤堂藩士、松尾宗房なる人あり。事故ありて弓箭を棄て、風流人となりて東武に行き、夫の俳諧の連歌を觀るに、檀林の一派其の隆盛に伴れて邪路に入り、卑俗極度に達して聞くに忍びざるに及び、慨嘆し、斯の邪風に對し、俳諧体連歌の正風を起し、芭蕉菴桃青と稱す。其の吟や、

古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉

道端の木槿は馬に喰はれけり　仝く

孰れも此の体にて、哲學の思想に由り、文外に餘情の垂んたるものなり。關東の人にて斯道に遊ぶ士は、爭ひて師と仰ぎ、寶井其角、服部嵐雪等を弟子とし、山口素堂等を朋友とす。暫時にて檀林は滅亡して正風に歸し、尋で海内に普及し、俳諧の連歌として言へば、蕉翁の流れを汲まざるべからざるが如くなれり。今茲に俳諧の連歌の沿革を說き、之れに因りて熟ら考ふるに、我が正風の始祖蕉翁が唱へられし俳諧の連歌は、其の實高尚なる哲理に出でたる特種の連歌なりとす。

（蕉翁以來の俳諧の神髓）　荒木田守武、山崎宗鑑、西山宗因等の俳諧の連歌は、俳諧の字義に適するも、一時の滑稽洒落に止まりて、言靈の幸はふ我が敷島の道としては大きに相應しからず。抑々敷島の道と稱する和歌は、伊邪那岐命、伊邪那美命の二神が、御戸の邂逅の唱和を初め、倭建命の碓井嶺の追慕等、僅々四句又一句の簡短なるも、千万無量の眞情を洩らして、所謂訴へ誘ふる本意に反せず、然るに我が祖翁即ち桃青氏が唱へられし俳諧の連歌は、宇宙間に有りとあらゆる語は、支那印度の言を讀み入るも妨げ無く、俗語平談及び地方の訛辭をも加へて憚らず、而して意を言外に存し、夫の十七言の發句にて滿腔の情緒を吐き、連句の如きに至りては、變化自在にして、他に類すべきもの無しと言ふも、強ち誣言にあらざる可し。仍て其の字義に拘泥せず、今日の俳諧の神髓を得むことを要す其の神髓とは、和歌にも言ひ得ざることを言ひ、漢詞にも述べ得ざることを述ぶるに意を注ぎ、且つ僅々たる五七五の三句十七言は、和歌の長歌、漢詩の長篇にも讓らざるを謂ふ（連句を爲さざれば、俳諧を爲すと言ひ得ざる理由）　俳諧なるものは、前にも說きし如く、

俳諧体の連歌を指す。故に必ず連句を爲す可きなり。連句を爲さずして發句のみを研究しては、俳諧の眞味を知らず。故に連句を爲すべし。

（俳諧は先づ發句より爲すべき理由）　前項に掲げし如く、俳諧を爲すは連句即ち附合を爲すべきは勿論なれども、初心の者は附合を後にして、先づ發句の練習を爲すべし。何となれば、發句は俳諧の基礎にて、之れよりせずんば到底連句の目的とする第一着の本句無きに由る故なり。

（發句を作る心得）　發句には必ず切字無かるべからず。四季の中の題を結ばざるべからず。是れ古來の規則なり。但し世に知られたる名所を詠み入れたるは、四季の題無くとも可なり。又、切字は一つに限る。二つあるは二段切れ、三つあるは三段切れと云ひて、故人の作には無きにはあらざれど、これは深き意味あることにて、先づ斯ることは初心の輩は、遠慮して爲さゞるものとすべし。

（發句切字の辨）　切字は前項に述べしが如く、發句には必ず無かるべからず。されども、心「の切れ、玄妙の切れ、挨拶の切れ、「無名の切れなど言ふものありて、切字を用ゐずして切る」句あり。さはあれ斯ることは、夫の二段切れ、三段切れと同じく、初心の輩は爲さゞるが宜しゝ。但し二段切れ、三段切れは、共に後に記すべし。

さて、夫の切字と假に稱するものは左の如し。

○や　○し（過去のしは切れず。此の事は別項に記すべし。）○じ　○かな　○もがな　○かも　○けり　○あり　○けれ　○けめ　○らめ　○たり　○めり　○こそ（こそと言ひてはけれ、なれ、あれ、見め、言はめと、必ず結ばざるべからざる切字なり）　○なり（但し成りに非ず。也の意なり）　○候　○何　○き　○か　○つ　○無　○ん　○らん　○なし　○らし　○て　○まし　○ぬ（但し畢んぬの意味なり。不の意味のぬは切れず。）　○けうし　○誰れ　○たが　○たそ　○いざ　○如何に　○爭で　○いづく　○いづこ　○いづち　○何時　○いづれ　○など　○なぜ　○ね　○を　○へ　○に　○め　○れ　○け　○な　○せ　○ず　○べ　○よ等なり。今茲に作例を掲ぐ。

心の切　いざさらば雪見に轉ぶところまで　芭蕉

玄妙の切　あか〳〵と日はつれなくも秋の風　仝

中の切　やす〳〵と出ていざよふ月の雲　仝く

挨拶の切　人に家を買せて我れは年忘れ　仝く

無名の切　一家皆杖に白髪の墓まゐり　仝く

をまはし　米くるゝ友を今宵の月の客　仝く

にまはし　桐の木に鶉啼くなる塀の内　仝く

二段の切　面白し雪にやならん冬の雨　仝く

三段の切　子供等よ晝顔咲きぬ瓜剝んん　仝く

字切れ　奈良七重七堂伽藍八重櫻　仝く

大まはし　唐崎の松は花より朧にて　仝く

是れ等は、字に據らずして切れたるものにて、先哲が所謂いろは四十七字は孰れの字にても其の便ひ力に由り、切字とならざるは無し。とある類にて、初心の輩に喋々と説くも解するに難し。斯道を修して進み行かば、自ら之れを知るの域に達せん。故に略して言はず今茲に字に據りて切れるもの〻作例は、

初句のや　古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉

古人は此のやを切れのやと言ひたる由なれども然らず。尤も此のやは和歌に無き格にて、特に俳句のみに有りて、なる哉の意味なりとも云へり。いかにも然もあるべし。古池なる哉蛙……として吟ずれば其の意義能く通ず。

二句のや　蛇の助の怨みの鐘や花の暮　常則

中のや　旅をしてよしや浮世の煤拂ひ　芭蕉

此のやは此處にやと言ひて三句目にかなと留むることもあるなり。

三句のや　露とくゝ試みに浮世澤ばや　仝く

此のやは捨るやとも言ふなり。

疑ひのや　亡き人の小袖も今や土用干　仝く

此のやは小袖も今は嘸と云ふ意に通ふなり。

はのや　白魚や黑き目を明く法の海　仝く

此のやは、白魚はと云ふ意に通ふなり。はにては切れざれば、はまやらわの横韻

に據り、はをやに轉用せしなり。

すみのや　むざんやな兜の下の蟋蟀　仝　く

此のやは、むざんなりと言ふ意味なれば、むざんやと而已言ひて宜しきに似たれど、然しては初五文字に足らず。且つ語勢の弱きに依り、斯くなの字を添へしなり、古來すみのやと稱しつゝ來れり。如何なる意歟。

口合のや　是れや此の煤に染まらぬ古格子　芭蕉

此のやを口合のやと稱し來れども、之れも亦其の意味を解するを得ず。

名所のや　難波津や田螺の蓋も冬籠り　仝　く

此のやは和歌の初五文字のやと似て非なるものにて、夫の初句のやと別に異なること無し。然るに何が故にや此の名稱を附したり。其の意を解せず。

尙ほ此の他に○越しのや　○景色のや　○疑ひの捨てや　○呼出しのや等數多けれど、初心の輩は強て知るを要せず。

現在のし　馬に寢て殘夢月遠し茶の煙　芭蕉

此のしは純然たる切字なり。

未來のし　尙ほ見たし花に明行く神の顏　仝　く

此のしも確かなる切字なれど、過去のしは切字にならず。過去のしとは、捨るしとも言ひて、「言ひし」「聞きし」「見たりし」等を指すなり。

散る花の外にはあらじ春惜む　柾　分

雪月花一時に見する卯木かな　貞德

黃菊白菊其外の名は無もがな　嵐雪

此のもがなは、庶幾の意味にて、普通のかなとは大に異なり。

花守は魘るゝかも夜の嵐　柾　言

湖の水まさりけり五月雨　水　分

白雲の中に聲あり春の人　柾　分

少しなら懸るも可けれ月の雲　仝　く

仙丹を之れは煉けめ岩清水　仝　く

○第三編　俳句

此のけめは、けんと稍同じく想像の意味にて、多分斯うしたるならんと通語に言へるに當る。尤も過去に限るが如し。

らめ　斯るとき武士は死ぬらめ年の暮　仝く

此のらめも亦らんと稍同じく、斯うするならんと凡語に言へるに當る。但し現在より未來に亘る。

たり　姑の十八見たり土用干　柾分

めり　つれ立て雁と去めり越後獅子　仝く

此のめりは、けめ又はらめと同じく、なる可しの意味にて、現在に限るなり。

こそ　一年も此の花の春ありてこそ　仝く

此のこそは、ありてこそなれの意味にて、自らなれの省略せられたるなり。こそを此の結末の他に用ゐる際は、必ずなれとか、けれとか、あれとか、或は見めとか、聞めとか、言はめとかの結ぶ語無くては繋辭に合はず。既に重五が句に、「炭賣の自己が妻こそ黒からめ」又某が句に「果てにこそ接し蹈あれ二年桃」等の作あり。

なり　先繰に春は行なり嵯峨御堂　柾分

そも　風透も能く建て候夏座敷　仝く

なに　九年何苦界十年花衣　祇空

此のなには、初句の終か二句目の終かに置かずては切れず。其の實は豈の字の意味なり。

き　落椿風の罪では有ざりき　柾分

此のきは、けりと同意なり。けりの二音を約めれば、きとなるに由れり。

か　朽くれと聞しは夢か萩の聲　仝く

さろ　我が戀は松島も嘸春がすみ　貞室

つ　けふも亦金谷に寢つ五月雨　柾分

此のつは、つゝの意味にて、乍らと云ふ通語に當る。

ん　鮎汲くん井も玉川の枝流れ　仝く

此のんは、汲ばや、又は見ばやのばやと同意味なり。

らん　松除けて秋は立らん須磨の浦　柾分

此のらんは、らめと稍同じ。

なし　折途て見れば花無し藪椿　仝

らし　木曾路尚ほ櫻咲くらし郭公　仝

此のらしも亦、らめと稍同じけれども、現在に限るなり。

て　荒海ゝ音無く暮れて春の月　柾分

此のては、而しての意味にて、初句に置きては切れず。必ず二句目に限ると知べし。

ましし　翼あらば我れも飛ましし春の空　仝

此のましは、飛ぶものを、又、行くものをと云ふ意味にて、行ま欲しの約されるなり。本來は、ましものをと言ふべきを省けるなる可し。

ぬ　御奉行の名さへ知ずに年暮ぬ　來山

此のぬは、畢ぬのぬにて、不のぬ所謂　聞ねぬ、見ねぬ等にては切れざるなり。

けらし　かち〳〵と春來にけらし燧石　柾分

此のけらしは、けるよしの約まれるにて、春が來るらしいと俗語に言ふに同じ。

たれ　主は誰れ清水がもとの忘れ杖　仝

此のたれも、たがも、たそも稍同じ意味なり。但し、たがは誰が、又、たそは誰ぞにて、孰れも尋問の語なり。これは尤も初句二句目三句目の結末に置かざれば切れず。

いざ　人はいざ我れは年より秋の夕　柾分

此のいざは、他人はいざ知らずと云ふ意味にて、しらずの三字省けるなり。いざやと言ふに同じからず。故に初二の句の結末に置かざれば切れず。

いかに　啼にさへ笑はゞ如何郭公　□□

此のいかには、之れも詰問の意味なり。尤も之れも初二の句末に置くに限る。

いかで　人いかで晴れも宇宙は蝶の吻　柾分

此のいかでは、爭でか敢てせんの意味なり。之れも初二の句末に置かざれば切れず。

いづこ　不二が嶺はいづこ五月の駿河町　全　く

此のいづこは何所の字にて、いづち、いづれ等と同じ。就れも下に繫辭を附けざれば切字になるなり。

いつ　三越路の梅咲くは何時雪五丈　全　く

此のいつも初二の句末に置かざれば切れざるなり。

など　櫻など之れもやからぬ百日紅　柾　分

此のなどは、抔の字の意にあらず、胡爲の意なり、なぜ即ち何故も共に詰問の語にて、二三句の結末に置くに限る。

ね　雪折れて跳返し得ね竹は竹　全　く

此のねは、通語のねどもに當る。又、言ひねかし、止みねかしのねも切れる也。

ね　通夜もして聞きね蓮の開く音　全　く

此のねは、ねがしの略語にて、同じく二三の句末へ置くに限るなり。

を　撞ずとも散るべき花を暮の鐘　□　□

此のをは、なるべきものなるをの意味にて、二句目の結末ならでは切字にならず。

へ　大根の武者にも倣へ門案山子　柾　分

此のへは斯くせよと云ふ指令の語なり。初二の句末に置けば切字となる。

に　鶯は金で買へるに郭公　□　□

此のには、前に掲げしをに稍似たれど、少しく異なり。通語ののに、當りて二句目の結末に置かざれば切れず。

め　色ならば美しからめ春の風　眞野

此のめは、かるらめ等のめにて、んの字と稍同じ。

れ　此の儘に掃さずもあれ雪の門　柾　分

此のれは、あれよ、又はなれよのよの音を略せしなり。

け　願はくば拂はずに焚け雪の柴　□　□

此のけも前のれと仝じく、けよのよの字の略したるものにて、矢張り指令の語なり。

せ　短冊の雲より降せ祈る雨　柾分

此のせも亦指令の語にて、せよのよの字の省けしものなり。

　啼立てゝ蛙等も呼べ夏の雨　□　□

べ　此のべも亦、け、せ、れ等と同じく指令の語にて、何れもよの語の下に附く可きを略せしなり。此の類の指令の語は尚ほ有れども贅せず。准じて知る可し。

な　廻文　下駄はくな鶯低う竹に飛ぶ　龜淵

此のなは、勿れの意味なり。其の意にて使へば、何れに在りても切るゝなり。

　意地わろく糞舟去らず梅の岸　柾分

す　此のすは、不の字の意味にて、初二の句末、又は二の句目の二三四字目にありて切字となるなり。

よ　傘を止めて笠きよ初時雨　□　□

此のよは、前に述べたる指令の語なり、何れに在りても切字となる。

新體詩

新體詩は、即ち歐米の詩歌なり。今は之れに倣ひて新作する者あり。されども、彼の國人が作りたる傑作とも云ふ詩を左に掲げ、詩體の一斑を示すべし。

〔英人テニソン輕騎隊進擊の歌〕　これを和譯したるものを左に掲ぐべし。

其一

一里半なり一里半、　並びて進む一里半、　死地に乘入る六百騎。
將は掛れの命下す、　士卒たる身の身を以て、　譯を糺すは分ならず、
答を爲すも分ならず、　これ命これに從ひて、　死ぬるの外は有さらん、
死地に乘入る六百騎。

其二

右を望めば大砲ぐ、　前も左も亦砲ぐ、　共に射出す砲聲は

天に轟くいかづちの、　響の如く凄しや、　彈丸雨飛の間にも、
猛り立て ず進むなる、　死地にこそ入れ鰐の口、　勇んで乘入る六百騎。

其三

拔けば玉散る刀をば、　皆諸共に振上げて、　きら〳〵と輝けり、
敵陣近く乘かけて、　大砲方を撫で斬す、　最と目覺しき働さぞ、
煙の中に飛込みて、　烈しく陣を破るなり。

其四

太刀の早業見事なり、　敵の軍勢たぢ〳〵と、　遂に際ふる事ならず、
むら〳〵ばつとむら崩れ、　馬の頭を立て直す、　以前に進めし六白騎、
殘るは最も僅なり。

其五

あな勇ましき武士の、　世に香しき其譽れ、　手柄は長く傳へなん、
今の雅子生立ちて、　とる年あまた重なりて、　腰は梓の弓となり、

頭に霜を戴きて、　孫彦玄孫多き時、　六百人の豪傑が、
敵の陣へと乘入れる　其故事を語りなば、　末代迄も名は朽ちじ。

〔英將オルフ進擊の歌〕　これも和譯を左に掲ぐべし。

人の望みは何なるか、　人の爵位に誇るのも、　又その威力に榮ふるも、
是が望みの果なるか、　家屋の飾りの美しく、　富裕の天下に轟くも、
これが望みの果なるか、　人の望みは是れならず、　衆に勝りて勇ましき、
名譽を得るに外ならず、　是れが望みの果なるか、　この名の爲には一身を、
殺すも憾む所なし、　殺すも憾む所無し。

〔カムブベル氏英國海軍の歌〕　これも和譯を左に掲ぐ。

其一

英吉利の海岸を、　固く守れる水兵よ、　一千年の其あひだ、
汝が建つる大旗は、　戰爭のみか嵐をも、　支へ得たれば此後も、
敵を受く共弛みなく、　勇氣の限り漲へせ、　軍烈しくあらばあれ、

嵐も強く吹かば吹け。

其二

立來る海の波間より、　汝が祖先現れて、
蓋し祖先の軍艦の、　其甲板は手柄の場。
大チルソンやプレーキの、　死にし處は人偲ぶ、
嵐も強く吹かば吹け。　汝を扶け給ふべし
大海原は其墓場
軍烈しくあらばあれ。

其三

四方海なるブリタニヤ、　砦も城も用は無し、
千尋の底も淵とても、　慣れて我家に異ならず、
船より發ち轟かし、　波を分けつゝ進み、
嵐も強く吹かば吹け。　山と立來る波とても、
雷なせる大砲を
行軍烈しくあらばあれ、

其四

國の光りと建てし旗、　益々光り輝きて、
危難も都て解去りて、
泰平の日に戻るらん、
歌ひ唱へて悅びて、
強き嵐の止みし時。

〔玉の緒の歌〕これも和譯を揭ぐ。

眠る心は死ぬるなり、　其時汝つはものゝ、
あはれ果敢なき夢かかし、　安榮限り無かつらん、
墓は終焉の場所ならず、
人の願ひは喜びか、　いさをし譽て諸人が、
唯怠らず働きて、　烈しき軍すみし時、
強き胸だも亦耐へず、
死出の旅をば速むなる、
なりて益々進むべし、
いかに未來樂きも、

見ゆる形は嘘なり、　あすをも知らぬ我命、
なゝ哀れに言ふは惡し、　我命こそ誠なれ、
人は塵にて又散ると、　いふは身躰の上の事、
人の願ひは悲みか、　人の願ひは是ならず、
今日より勝る明日を待て、　業は久しく時は走す、
皷の如く打つゝけ、　一日〳〵と近くなる、
爭ひ多き世の中に、　此身を寄せて魁けに、
言なき啞と爲る勿れ、　牽るゝ牛となる勿れ、
いかに空しき過去なるも、　共に之をば捨置きて、

我を忘れず神を知り、
我とても人相同じ、
長く殘さん此名をば、
獨り漂ふ我友は、
さすれば人は氣を張りて、
高きに至れ馳行けよ、

〔西詩和譯〕此の通り和譯なり。左に掲ぐ。

息の出入と身体の血、
時計の巡り速く立ち、
無きは則ち無能無智、
長しと言はん此命。

〔外交の歌〕これは我が邦人の作に係る。即ち左の新體詩なり。

西に英吉利北に露西亞、
油斷な爲せむ國の人、
外表に結ぶ條約も、
働くべきは今日ばかり、
勉め勵めば斯くならん、
海より荒き世の中に、
我名を聞て勇むなん、
事業ばかりに心して、
樂あるべく働けよ。
加之ならず好き心地、
遽に變る針の位置、
多く考へ氣をたもち、
清き魂ひくれ命、
歳は過ぐとも業と幸、
よき働きを爲せる後、
すぐれたる人世に多し、
ゆめ怠らず務めなば、
舟失ひて波の間に、
我名を聞きて進むなん、
いかなる運も事とせず、

心の底は測られず、
強弱肉を爭ふは、
御國に生れし甲斐あらば、

〔悲白頭翁歌〕これも邦人の作なり、左の如し。

都の錦桃さくら、
散り行く花を打眺め、
暮れ行く春に花散りて、
又來む春を思ひやる、
常盤の松や柳人が、
桑の畑も年經りて、
過にし春の曙に、
行衛も知らぬ花の風、
春毎に咲く桃さくら、
萬國公法ありとても、
覺悟の前の事なるべ、
盡せや勵め諸共に、
花の色香の日に添ひて、
露の命のはかなさを、
衣々の梢は綠しぬ、
花は今年に異らねど、
斧に觸るれば忽ちに、
青海原になれるてふ、
花見し人ぞ今は亡き、
風を怨みて中々に、
色も同じく香も同じ、
いざ事あらば腕力の、
嗚呼同胞の兄弟よ、
誠心込めて盡すべし。
移ろいて行く乙女子が、
かこつもいとゞ哀れなり、
眺の見あかぬ我が心、
身の行末ぞ偲ばるゝ、
賤が伏家の薪なり、
事さへ人の言ふかし、
今もてはやす諸人は、
身の經り行くを思はざり、
今年と去年に異らねど、

變るは人の姿なり、
いかにわれらは言告ん、
今は頭に霜おきて、
幼なかりし其日には、
風に散行く花の色、
樂しき暮らす月と日の、
瀬に變り行く我姿、
花の顏せ月のまゆ、
越の國なる白山の、
過にし事を今更に、
入相告ぐる鐘の聲、
〔世渡りの海〕これも邦人の作なり。左の如し。
棹一本に浮かゝと、

今年は去年より古びたり、
我も昔は汝が如き、
哀れ翁になりけり、
木下蔭に打群れて、
光り輝く高樓に、
流れゞ早き飛鳥川、
病の床にふし柴の、
移ろいて行く世の習ひ、
顏をば白く青柳の、
思ひ出れば中々に、
塒に歸るむら雀、
此處の泊りや彼の港、

（九〇）
又來ん春は如何ならん、
花の顏せ月の眉、
哀れ汝も亦心せよ、
戯れ遊ぶ舞の袖、
天津乙女の歌ひして、
昨日の淵を今日見れば、
戸ぼそを叩く人なき、
綠の髮を今日見れば、
腰は梓の弓なれや、
千々に物こそ悲しけれ、
實常無きは世の習ひ。
遊びがてらに渡らるゝ、

舟子も暴風の危險あり、
日頃の伎倆顯はすは、
よし求むるとも其蔓も、
誘ふ人なき身の不運、
流るゝ水を友として、

危險を怯ちず畏れずに、
いと易けれど夫とても、
共の根の無き浮草の、
はり裂く胸を押鎭め、
世の常なきを嘶つより、

名譽の海に乘り出し、
よるべき蔓を求めねば、
憂き艱難を餘所に見て、
月に嘯き花に醉ひ、
嗚呼難かしき世渡や。

尙文館發行書籍

全國農事會長前田正名君題字
農學士富益良一君序文
帝國農事會編輯局編纂

實利種藝新書

正價五拾錢　郵稅四錢

（目錄大要）第一編緒論◎第二編段有益なる各種果樹栽培法◎第三編養蠶法◎第四編養鷄事實◎第五編養豚事業◎第六編桐樹栽培法◎第七編最有益藥用植物◎第八編蘭草栽培法◎第九編麥稈眞田◎第十編養鯉事業◎第十一編養蜂事業◎第十二編各種蔬菜栽培法◎附錄‖農家の生活▲肥料に就て▲家庭園藝の趣味及利益▲菓園管理法▲果物貯藏法▲吐綬鷄飼養法▲鹽豚製法▲各種農產物調理法▲其他數件悉く實利實益的殖產致富の良事業也

農學博士　王利喜造君題
家會協會幹事　池久吉君序
農學士　中川策郎君校
養鷄專門大家　西田一君著述

養鷄教科書

正價貳拾五錢　郵稅貳錢

本書は養鷄場主が夙に內外各國の飼法を參酌して實驗研究十數年確に其實益を認めたる完全無缺の良法にして此法に依らば手數頗る簡にして蕃殖速かに費用甚だ尠なく產卵最も多し本書は即ち其新法を詳細丁寧に敎示せるものにて鷄の種類、繁殖、孵卵法、飼料、治病法、管理等は勿論苟くも斯業に必要なる事項は悉く記載せる養鷄業專門の良書也

國民百科全書（第四編）

尙文館編輯局編纂

擊劍

擊劍は劍術とも謂ふ。人を斬る術なり。稽古するには昔時は木刀を用ゐ、今は竹刀（しない）を用ゆ。試合ふに体の搆へ、双方の距離、禮を爲し合ふ等は柔術に異ならず。先づ刀の搆へ方を知るべきなり。

（刀の搆へ方）これには五通りあり。即ち大上段、上段、中段（水月、青眼は此の中の一搆へなり）下段、八相、是れなり。

一　大上段の搆へ方は、足を外八文字に蹈み、右の手にて鍔際を持ち、左の手に柄頭（つか）を

持ち、切先を稍上りめに高く頭の上へ上げて擊下ろすなり。

二　上段の構へ方は、左の足を前へ出し、右の足を後へ退き、體を少しく反らし、切先上りに、左右何れにても頭邊へ上げて擊下ろすなり。されば右邊へ上ぐるを右上段と曰ひ、左邊へ上ぐるを左上段と曰ふ。

三　中段の構へ方は、足を少し外八文字に蹈み、少し反り身に爲り、刀を向ふ上りに持ちて構ふるなり。されど是れは擊方に非ず。受方の構へにて擊つ意を含めるなり。依て、水月又は青眼は、敵手の眉間の間へ狙ひを着けて惱ますなり。

四　下段の構へ方は、中段の構へと同じ足つきにて、切先を一段下ろすなり。是れ亦受方にて擊つ意を含む構へ方なり。

五　八相の構へ方は、切先上りに左右何れにても横に出し、敵手を横薙に斬拂ふ構へ方なり。右八相の構へは、左の足を前へ出し、右の足を後ろにし、左八相はこれに反るなり。

（試合）これは千變万化にて、形を述べ難けれども、拔口刀おさめの形を一例として示すべし。先づ双方六尺間きて對合ひ、六寸まで近よりて禮し、禮終れば双方蹲り、左の手にて刀の鍔下を持ち、右の手を右の膝頭に置き、双方立ちて各々左の手にて鍔下を持ち、足を外八文字に蹈み、右の足を出だすと同時に拔擊に、敵手の小手を斬り付け、素早く左の足を右の足に寄せ、（寄せるを繼ぐと云ふ）足を繼ぎつゝ刀を振り上げ、右の足を出し、次で左の足も出し、其の足を右の足に繼ぐと同時に斬下げ、是れより刀を納むることにて、左の足を一足退き、右の足を一足退きて繼ぎ、持ちたる刀の柄元へ右の手の指を伸べ、伏せて充て持ち、左へ匕ひ上げ、左の手の食指拇指に刀背を擦りて右へ退き、左の手にて鞘口を持ち、後ろおとしに納むるなり。

（掛聲）此の意は、柔術の部に述べしに異ならず。

（勝負）敗けたる者は、必ず參つたと聲かくるなり。但し、擊ち、突きにて勝負付かざれば、双方刀を投げ捨て、大手を擴げて組み、假面を脱されたる者を敗とするなり。

柔術

柔術は、六藝の母と云ひて、武技たる弓、馬、劍、槍、銃、砲の六科を生ずる基本なり。何となれば、六藝何れにても、柔術の素養なければ熟達せざればなり。

（柔術の意義）　柔術と名づけしは、讀んで字の如く柔かに取るべき術なるが故なり。此の術の妙處は、自ら身体を柔かにして自力を主とせず。敵手の入れたる力にて敵手を負かすなり。柔以て剛を制するなれば、恰も婦女の道の如し。然るに相撲を取る如く、自力を用ゐて勝たんとするは、柔術に非ず柔術の神髄を失ふに歸す。されば總て何事にても、柔以て剛を制することは、此の意を用ゐて事に當れば、大に得益ありとす。

（柔術を用ゐる心得）　此の術は醉狂して用ゐるべからざるは勿論、さなくとも輕々しく常に用ゐるべきものに非ず。我が技倆を見せんとて、戯れにも用ゐるは宜しからず。危急存亡に關する時、正當防衛の爲めならでは用ゐぬことを、寸時も忘るべからず。是れ第一の心がけなり。

（柔術を修むれば種々得益ある事）　これを知れば、勝負に使はずとも、左の三益あり。

萬事腹据りて決斷すること速し。　無形の護身器と爲る。

稽古練修すれば良き運動となりて衛生に資す。

（柔術の諸科）　科名は左の如し。

坐取、　立合、　中段、　要門、　坐要門、　離れ形、　柄捌、　無刀取、

居合も柔術に屬す。

坐取と坐要門とは坐して取り、中段は立ちても坐しても都合に任せて取るなり。柄捌・無刀取も然り。立合と要門とは立ちて取るなり。居合は別に擊劍に屬するもあるなり。

（柔術の通語）　これは種々あり。左の如し。

片手にて敵手の胸襟を掴み持つを片胸取と曰ひ、兩手にてするを兩胸取と曰ふ。

一試合の事を一本と曰ふ。取り合ふ一人を使手と曰ひ、其の敵手を受手・又は單に受とも曰ふ。敵手を引倒すを投と曰ふ。

以上は名詞にて、動詞にては、打つ、受る、取る、外す、切る、拂ふ、押す、引く、上る、下す、掛る、」投る、」伏る、倒す、突く、折る、絞る、中る、引殲す、蹴込む。

（取る所の要所）　これは胸、　衣紋、　腕首、　二の腕。（胸は胸の襟、衣紋は後ろ襟）

（打つ所の要所）　これは眉間（眉と目と眉と目との間なり）

（掛くる所の要所）　これは取伏せて引倒す前に、坐するは膝、立つは足を掛く。

（突く所の要所）　これは咽喉、睾丸。（中る所の要所）これは肋三枚、睾丸。

（絞むる所の要所）　これも右同樣。（蹴る所の要所）これは睾丸。

（稽古服）、これは、　稽古襦袢、　長き猿股引（袴をはくは宜しからず）

（使手受手双方の距離）　取り初めは、間を六尺開けて向合ひ、近よりて六寸開け、禮して取りかゝるなり。尤も立取は立ちて向ひ立ちて禮し、坐取は立ちて向ひ、近よりては胡坐かき、胡坐のまゝにて禮するなり。

（胡坐）　これは通常の胡坐に非ず。居合腰に爲りて居る胡坐なり。

（立取足の蹈み方）　これは、足を外八文字に蹈むなり。

（拳の心得）　禮畢りて取り始むるときには、手先を握拳にし、拇指を必ず内に握込み居るは定まりなり。何となれば、拇指を外に出し居れば、敵手より折らるゝ恐ある故なり。

（體の危險部豫防すべき事）　危險部は前に記せし要所にて、睾丸、眉間、咽喉、肋三枚、膝、足なり。何れも用心す。睾丸は蹴込まれ、眉間は打たれ、咽喉は締められ、肋は當てらるる何れも急處なればなり。膝と足とは、坐取には膝を掛けられ、立取には足を掛けられ、引倒さるゝ故なり。膝、又は足を掛けられざれば、引倒さるゝものに非ず。

（掛聲の事）　これは取かゝるにも、引倒すにも、總て氣合を入るゝときは、掛聲を掛くるなり。これはヤアと掛け、ウンと止めるなり。ヤアウンは開闔にて、開きて闔る意あるなり故に開と言ひてより闔と言ふまでは、氣合斷れざるを要す。

（氣合を遺すべき事）　氣合を持續するは油斷せざるなり。安心せざるなり。試合に勝ちたりとも、モウ安心なりと思ひて氣合を弛むべからず。敵手の働きを止めざるときは、敵手より虛を見られ付込まれ、不覺を取ること有ればなり。

（柔術の流派）　古來有名にて多く行はるゝは關口流にて、高尙なるは起倒流なり。尙ほ此の他に流派多し。近來嘉納流起る。これを改良派とす。

（柔術取方の名稱）　坐取、立合等の分科名は前に記したれども、然なくして取方の摸樣に依

りて名づけたるものは左の種々なり。

一　坐取にては、　片胸取。　兩襟取。　右肱返し。　左肱返し。　羽返し。　右取返し。　左取返し。　屏風返し。　表肱打横引。　裏肱打横引。

二　立合にては、　左右行違ひ。　向ふ車。　肘車。　衣被ぎ。　非人取。　諸手返し。

三　中段にては、　表裏の雲劍。　花筏。　睡月。　千鳥。

四　離れ形にては、　表裏の屏風返し。　霞取。　絞倒し。　喉がらみ。

五　要門、　坐要門にも、それ〳〵名あり。

六　柄捌にては、　柄落し。　柄倒し。　鐺返し。　鐺止。　打込。

七　無刀取にては、　かけ橋。　花の影。　雲隠れ。　出合搦み。　友千鳥。

右の他なる簡易の取り方にては、又、左の種々あり。

ステッキ投。　腕がらみ。　かなめ責。　鬼こぶし。　引おとし。　友車。　下り藤。

後ろ取。　小手返し。　氣取。　背負投。　擂木。　刈捨。　大殺し。　天狗勝。

兩手取。　壁添ひ。　腰霞。　捨身。

馬術

馬術は馬に乘り得る術なり。是れ亦武藝六科の一にて、流儀は種々あれども、大坪流大いに行はる。此の本流の乘方は。五十三ケ條ありて、其の餘に十六ケ條あり、尚ほ其の上に、別に十二ケ條あり、手綱捌にも種々法あり。されど今は、陸軍にては西洋の術を用ゐらる。修業の進路を概擧すれば、左の如し。

馬學の部にては、　馬の骨骼、　馬の性質、　馬の外貌　其の名稱、　乘馬鑑定法、　蹄鐵、　馬の毛色、　馬の年齢鑑定、　使用年限、　衛生、　飼養法、　歩法。

馬具裝置法及び乘馬法の部に於ては、　轡の銜ませ方、　鞍の置き方、　鐙の適度、

馬の牽引法、　飛下り飛上り、　乘馬姿勢、　馬上進退柔軟法、　扶助騎坐、

拳の動作、　拳と韁とのとの關係、　脚の用法、　拍車、　脚と拍車との關係、

脚と拳との關係、　諸扶助の一致、　行進、　駐立、　回轉、　右左向、　退脚、　速歩、

短縮速歩、　伸張速歩、　駐立中より速歩、　速歩より駐立及び常歩、　前足旋回、

後足旋回、　横歩、　駈歩、　常歩より駈歩、　速足より駈歩、　駐立より駈歩、
駈歩より速歩、　駈歩より常歩、　駈歩より駐立、　短縮駈歩、　伸張駈歩及び歩度、
駈歩中手前變換、　障碍飛越、　難路通過、　水馬術、　乘馬素人手當法、
病馬の容體、等なり。

（乘馬の方法）　稽古の初歩は、乘るべき馬を識り、其の馬を愛し、馬には自己馴れしむるなり。此の事は誠に肝要なり。これを馴感と云ふ。次は、先づ水勒を掛くるなり。
其の次には毛布を鞍下に置きて鞍を置き、腹帶を締むるなり。それより鐙の用法を識り、
右の準備畢りたらば、軟かき地の成べく砂地の處へ馬を牽出し、稽古始ゆゑに、少しく乘り慣るまでは、馬の頭を他の者に持たしめ、馬の左側に行き、鞍の上に懸けたる轡を、鬣と共に握り、馬の肩の處にて背面向になり、左の足を鐙の中へ入れ、右の手にて鞍の後ろを持ち、右の足に機みを起し、眞直に體を上げ、左鐙の上に立ち、體を少しく前に傾け、鞍の飜るを防ぎ、右の手を鞍の前へ移し、右の脚を高く輕く靜にし、馬の脊を越して鞍に跨り、轡を揃へ、右の足を右鐙の中へ入れ、それより乘方にて、始めは騎坐を學ぶなり。

（騎坐）　重心を取りて安乘するなり。而して其の重心点は、兩坐骨と臀部との間なる會陰の所に据ゑ置くなり。騎坐定まれば、次は乘馬の姿勢を取るなり。

（姿勢を取る心得）　これは、左の諸件なり。

一　つとめて腰を前方に張り、上體を軟かく保つなり。硬固なるは可ならず。又、腰を後方に張るは、逆にて宜しからず。

二　股を充分開き、膝蓋を前面に向はしむる樣にし、內方に廻し、膝は兩坐骨及び臀部の縫際を害せざるまで下げ、股と共に等しく鞍に着け、之れにて騎坐を助くるなり。

三　脚は動かずに垂れ、足は殆んど馬体と平行して踵を下げ、脚の動作に便利ならしむるなり。

四　頭は眞直にして、眼は前面を見、肩は後方に退き、兩腕は自然に垂れ、肘は輕く体に接し、上体は正直自由にし、主要なる平行を保つなり。

五　拳は凝ること無く、諸指の第二關節を對向せしむる如くにして內方に向け、小指を体に近づけ、肘よりも稍低くするなり。

以上の姿勢を取りて、平衡を保つとも、人と馬との重心を一致して輻をあやどり、さて歩み出すなり。

（拍車）　歩み出るには、時として拍車を用ゆ。

（歩法）　歩む直行進には　常歩、速歩、駈歩の三あり。此の三様の歩度は、馬によりて多少差違あれども、一分間の歩度は凡そ左の如し。

常歩は、九十米突。これは我が四十九間二尺三寸六分四厘餘。

速歩は、二百十米突。これは我が一町五十五間一尺五寸一分七厘餘。

駈歩は、三百米突。これは我が二町四十四間三尺八寸八分二厘餘。

弓術

弓術は、武藝六科の首に位せしものにして、古來武士を弓矢取る身と云ひ、其の家を弓馬の邦家と云ひたり。此の術は、我が神代の太古より傳はれり。矢に天のはゝ矢などあるを以て知る。弓にては滋藤の弓等は有名なるものなり。

（弓術の定儀）　弓ひきて矢を中つるは弓術の主意なれども、徒だ器用にて數多く中つる而已を貴しとせず。依て法に從ひ、何れの流儀にても、形の如く修業すべきことなり。

（流儀）　流儀は種々あれども、多く行はるゝは日置流、伴道雪派等なり。

（弓術の器具類）　弓、　弦、　矢、　的、　卷藁、　卷藁桶、　矢取籠、　弓懸、　射込桶、　弓小手等なり。

（場所）　矢を射る所を弓場と云ひ、的かける所を的場と云ふ。

（的の種類）　この種類は左の如し。

通常的（直徑出尺一尺二寸）、大的（直徑出尺六尺）、小的、　金小的、　銀小的、

（射習の順序）　始めは卷藁桶を的にして射、稍熟達したらば本的に移り、標的として射習ふなり。

（矢取籠）　これは細長き籠にて、矢を取上ぐるに用ゐるなり。

（弓懸）　これは張弓のまゝ擡する具なり。これに三挺懸、四挺懸あり。

（射所より的場迄の距離）　此の距離は、何間何尺と言はず。張りたる弓を十五回、回轉したる

る總長さを距離とするは定法なり。されど追々技進むに從ひて、其の熟練するに從ひて、三十間にも五十間にもするなり。

（的の用法）　射始めには通常的を用ゐ、稍熟練したれば大的を用ひ、小的は狙ひ射に用ゐ、銀小的は射難き處に懸け用ゐ、金小的は一層射難き處に懸け用いるなり。

（矢の早乙）　始めて射る矢を早矢と謂ひ、次に射る矢を乙矢と謂ふ。

（矢の一手二手）　矢は一條にて數へず。二條を一手とし、四條を二手とす。此の他三手は六條なれば、幾手にても推して知るべし。故に二手を四條矢と謂ふ。

（弓張る注意）　弓の跳返りに撃たるれば死に致さるゝことあり。故に、弓を張るときは、必ず其の下に人を置くべからず。又居るべからざることなり。

（弦かけの寸法）　弦を弓へ引かくるは其の寸法を曲尺にて五寸にするは定法なり。

（射前）　これは的に向つて矢を射るを謂ふ。坐して居るを、つくばひと謂ふ

（肩ぬぎ）　弓射るときは、必ず左の肩を脱ぐべき事。

（立射の足ぶみ）　立ちて射るときは姿勢を整へ、必ず足を八文字に蹈むべき事。

（四條矢の射方）　これを射るときは、一手の矢は右の手にて持ち、一手の矢は鏃の方を上にし、袴の紐下へ少し斜ひに擡せ、立てかけ置くなり。四矢ならずとも斯くするなり。

（的の見定め方）　これは弓と弦との間より見定むるを法とす。

（肩下ろし）　矢を射るときには、弓を持ちたる左の肩を下ろすなり。

（弓の握り方）　これは小指に最も力を入れ、其の手の中に鶏卵一個を握りたる心得あるべきなり。

（矢は打上ぐる事）　矢は行くうちに前下りになる故、射るときには曲尺にて六寸高く見て打上ぐるなり。

（弦の引入れ方）　弦を引入るゝは、右の肩まで引入るゝを法とす。

（卷藁射前の事）　稽古はじめの卷藁射前だけを一通り述ぶべし。即ち左のごとし。

これを射る始めは、左の手にて弓を向ふ下りにし、弦を上にし、斜ひに持ち、右の手にて一手の矢を、矢筈を後ろ上りにして、鏃を上より覆ひて逆手に持ち、體を堅めて靜々と立ち出で、射込桶に對ひ、兩足を一所へ集め、足を外八文字に蹈み、弓を左脇より右脇へ廻

はし、右の手は矢を持ちたるまゝ同じ手つきにて跪き、弓を左の手にて前下りに左へ廻して比ひ持ち、右の手は前の如くに矢を持ち、立ちて弓を左の手にて前下りに左へ廻して比ひ持ち、右の手には前の如く矢を持ち、左の足を向ふへ出し、右の足を少し引き、兩足を擴げて立ち、坐して弓を立て、矢一手を右の手の拇指と食指とにて支へ持ち、左の手に持ちたる弓を、クルリと翻して右へ廻し、弓を地に立て、右の手に一手の矢を持ちながら、中指と無名指と小指とにて鏃を持ち、矢筈を後ろ斜めになるやうに、食指と拇指とにて弓を持ち、左の手を懷ろへ入れ、其の片手にて左の片肌を脱ぎ、左の手にて弓を持ち右の手にて一手の矢を持ち、弓を前方へ傾けて持ち、矢筈上りに矢を持ち、左膝を力を入れ、右の手に持ちたる一手の矢の内の一本を、早矢として左の手に移し、弓を持ちながら其の早矢を、食指と拇指とにて、矢筈の下際を少し鏃下りにして弦に帙め、それを斜めに持ち、乙矢を前のやうに右の手に持ち、足を左右に披き、左膝の所に弓弭の下を當て、的を見、乙矢を持ちたる右の手にて弓に番へたる早矢の矢筈を持ち、左の肩を下ろし、弓を持ち、其の手の小指に力を入れて右の肩まで引き入れ、伸び入り、押手と共に整へ、射放し、乙矢を射放し、是れにて一手射終るなり。斯くして續々射、全く射終りたらば、徐かに坐し一禮して退く。是れを的前一通りとす。本的に移るとも、射前は同樣なり。

銃獵

銃獵に二種あり、娯樂的なるを遊獵といひ、然らざるを職獵といふ。何れも雉子山鳥待屋討飛討、揚鳥討、鳧雁鴻白鳥討、海濱討、水鳥船討、田鶴討、兎討、狐狩、猪鹿狩等の區別あり。銃には前裝銃、火繩銃、後裝銃、二連銃、三連銃、六連銃、單才銃、村田銃、杖銃等あり、一發射に用ふる散彈の分量によりて番號を定む、即ち一斤(百二十匁)を十二分して用ふるを十二番銃といひ、二十分して用ふるを二十番と云ふ。獵犬は通例、雉兎を討つに最良と評せらるゝ普通の種類はポインター及びセッターの二種にて、捜索且つ死鳥等をくわへ來らしむるはスパニール犬を最良とす、又猪鹿狩にはクレーハウントを可とす。服裝は十分緩やかに裁ちたる羅紗服を良しとす、色は枯葉色又は土色を可とす、外套はカッパ式便利なるべく、帽は茶羅紗にて、時に頭より耳まで包み得るやう仕立てたるが宜しく、履物は洋式の

獵靴を普通とするが、併し我邦の如く池沼多き處にては草鞋を用ふるも亦極めて便利なり、獵囊、銃袋、脚袢はズック若しくは木綿織を用ふべし。遊獵、職獵を問はず、銃獵には狩獵法其他諸規則あり、心得べきは云ふまでもなし。

水泳術

水泳術を修業するは、獨習にては危險ゆゑ、必ず師に就き、其の監視保護を有して稽古すべきことなり。師より教示すべけれども、豫め左に記すべし。

（入水の忌時）　先づ水中に入りては惡しき時を知るべし。即ち左の諸時なり。

空腹なる時、食時、疲勞したる時、早朝、惡寒のある時、頭痛する時、一汗のまゝなる時。

（水の模樣）　水の模樣を見ずに泳ぐは危險なり。河などは水の輕重によりて壓力の强弱を知り、又、流れの有無を見はかり、海ならば水捌きを爲し、流れの變化、水勢の如何、廻り溯、是れなり。これを見て、安んじて泳ぐべし。

（水中に入る心得）　此のときには必ず六尺の褌を緊とかきて入るべし。是れ睾丸の害を豫防する爲めなり。シャツをも着るも可なり。而して必ず口中を嗽ぎ、身体を清め、充分に空氣を吸ひ込み、心を下腹に沈し着くべし。斯く敬して、決して易き事とし侮るべからず。

（游泳の稽古法）　稽古する始めは、稽古する者の腰までか、或は乳までか、水の及ぶ深さの處にて、稽古するなり。其の順席は左の如し。

一　俯向きて身体を水面に臨ましむ。

二　息を詰めて水が鼻口耳に入るを恐れず、面部を水中に沒る。

三　足趾を水底より離し、前方へ轉倒るやうにす。

四　兩手を前へ伸ばす。

五　右と同時に兩足を後ろへ伸べ出し、魚体の如くになる。

六　兩手にて、かはる〳〵自身の傍の水を掻き寄す。

七　足は交る〳〵片足づゝ水の上に上げ、足を下ろすときに水面を打く樣にす。斯くす

れば其のうちに忽ち浮く。

八　浮くやうになりたれば、面部を徐かに水面上に出す。

（往復泳ぎの稽古）　岸より沖へ泳ぎ往き、又復るには、數尺より數十間に進むまで我が游泳力相應の瀬見杭を打ちおき、それを目あてにして泳ぎ往復し、近距離より漸々遠距離にするなり。但し、河は流るゝ水勢に押さるゝゆゑ、上中下三ヶ所に目あての杭を立て置くなり。尤も始めは上を目あてとし、流下すれば中、又流下すれば下を目あてにするなり。

（腹泳）　初めは水中にて兩手を胸の前に置き、兩手の各々指と指とを離れぬやうに密着し、掌を凹め、手首を下へ曲げ、肘を下へ曲ぐる氣味にし、膝にて足を揃へて密着し、踵を外へ向け、膝下なる脚と脚との間を成べく開け、手は充分前へ出し、其の手を大腰まで返し、水を排ひては前へ出し、右が終れば左の手を其の樣にし、互ひちがひに斯くする度に、足にて水を蹴り、手と足と互ひに働かすなり。

（背泳）　此の泳ぎは、游泳中に疲れたるとき、休むに用ゆ。これは靜に仰向になり、身体を眞直に伸ばし、首も腰も曲げずに、頭の後部も水中に入れ、顏と胸と兩足の指とを水面に出し、掌を仰向けて斜めに下方を衝き、而して水を壓すなり。斯くすれば浮在るものなり。これは長時間に亘るは惡しゝ。何となれば眼が他に及ばず、他の物の衝突を恐るればなり。

（足泳）　身体を立てゝ足にて泳ぐ故に立泳とも云ふ。これは深く熟練したる者ならざれば泳ぐことを得ず。大に物理に依る泳ぎ方にて、泳ぎ得る理は、兩手を又ゝ、身体を收束して全体の重點を一處に集め、平均を取り、泳ぎ行くには、手を少しも動かさずして、足のみにて泳ぐなり。往き始めは、体を稍前方に傾け、足にて水を蹴るなり。斯くして歩行するが如くする故に、歩泳とも云ふなり。

（潜泳）　これを俗に水入と云ふ。此の始めは、川上より川下に向ひ、手を前へ出して水を切りつゝ往き、足にて少しく水を突き、首を下方に斜めに向けて沈むなり。されど最も深き水中へ沈むは、首をば足より下にし、體を斜めにして沈むべきなり。

圍　碁

圍碁は今より殆んど四千年前ならんか、支那の堯帝の代に、其の子丹朱に王道の征討法を知らしめんとて創造せしを、其の後勝敗を爭ふ奕具に變用せしと云ふ。論語に孔子の「博奕と曰ふもの有らずや。之れを爲すは猶ほ止むに勝れり」と曰はれ！註に、棋戯なりとあり。然るに泰漢以後道士など好んで用い、仙器とまで曰ふに至れり。それを唐代に、吉備眞備留學生にて入唐し、歸朝の際に齎し歸り、汎く傳はりしとか。此の戯を爲すを打つと言ふ。打つ方法は、先づ兩人相對して碁盤に向ひ、技の劣れる者は黑石を取り、優れる者は白石を取る同等の者ならば、一握の碁石を掴み、相手に對して丁か半かと問ひ、當てたる者黑を取る。而して黑の方先づ石を置くなり。さて又技の劣れる者は、其の程度に依りて若干目を置く。（石一個を一目と云ふ）或は二目置くも三目置くもあるなり。或は聖目（井目とも書く）を置く者あり。是れ一定に九目置くなり。最も初心の者は、四隅の星の後方に、風鈴とて尚ほ一目づゝ置くもあり。相鬪ふに、目的地とするは碁盤面にて、成べく多くの目を占有するにありて、占有の多少は即ち勝敗の分るゝ所なり。占有の意義は、相手の石の周圍を隙間なく圍みて之れを屠り、又他の空地を相手より早く占領し、相手をして之を侵すこと能はざしめ、斯くて進行するに隨ひ、黑白の碁石入亂れて、石々複雜なる衝突を生ず。此の場合の處分法は劫（こう）・せき、などの名稱あり、最後に至れば、相手の占有せし目の中に、己れの取りたる碁石を入れて塞ぎ、殘れる目の多少を比較して勝敗を決するなり。

（碁に用ゐる言）用言は即ち左の如し。

幹（わりたす）　立（たつ）　提（とる）　約（おさゆる）　斷（たちきる）
沖（わりこむ）　割（つきあくる）　撲（うちこむ）　盤（わたる）
打（きる）　出（でる）　覗（のぞく）　赴（おす）　勒（めをかく）
門（あしく）　劫（がふ）　夾（はさむ）　點（なかて）　征（しちやう）
逼（せめる）　飛（とぶ）　尖（こすむ）　綽（はねかける）　持（せき）
行（のびる）　斜走（けいま）　三花聚（はなさんもく）　四花聚（はなしもく）
五花聚（はなごもく）　六花聚（はなろくもく）　角曲四（こうづくし）
帯（ぢご）　うってがへ。　竹節、　一間飛、　斜走に大小あり。
（隅の定石）これは碁盤の隅に打つ定まりの石なり。

(石立) 碁を打つ石の立て方なり。

(碁の手相) 手相とは碁を打ち合ふことなり。其の内に名人の手相、名人上手の間の手相、又、上手の手相と云ふことあり。夫より下は、いくつの手直りと云ふ。碁打の位には九段あり。名人と云ふは位九段なり。名人上手の間の手合と云ふは位八段なり。上手と云ふは七段なり。以下の手直りは何段と言はずして、いくつの手直りと言ふなり。然るに初段二段など言ふは、語言ひ易き故なりとぞ。

(碁盤の目數) 碁盤面の罫引は、畫數十九行十九列ありて、三百六十一畫あり、石は其の十字を成したる交叉点に置く。石の總數は夫れに稱ひ、双方各自持つ所の白又黑は、其の半數に稱へり。石を盛るゝ蓋付の器を碁笥と云ふ。三百六十一畫は、一ヶ年の日數に凡そ象どり、白は陽、黑は陰に象り、四隅は四季、井目の九点、星を記したるは天の井星に象ると曰へり。

(碁盤の脚) 碁盤の脚の梔子形なるは、傍らより助言すべからず、口無しとの意を諷せしものと云ふ。

(碁盤裏の缺陷) 缺陷處を存するは、助言者あらば將に處し、盤を飜して其の斬首を戴する爲なりと云ふ恐ろしき意なり。

將　棊

將棊も支那に起りて我が邦に傳はれり。彼の後周の武帝の作りしものと云ふ。これは圍碁と同じく、二人對して將棊盤に向ひ、互ひに相手の駒を屠りて勝敗を決するなり。駒には歩、(歩兵の略名) 香車(きようしや) 角行(かく) 飛車(ひしや) 金將(きん) 銀將(ぎん) 桂馬(けいま)あり。各價値と行路を異にし、王將、玉將、金將の他は、敵の陣地へ入りたらば、成ると云ひて價値を變ず。又、隨つて行路も異になる。例へば歩兵にても金將に成れば、更に金將の價値を保ちて、金將の行路を行くを得るなり。さて何駒にても、成りたれば裏を飜して表と爲すなり。王將は自他に各一枚づゝありて、他の職士的の駒も、一定の員數等しく双方各自に有す。結局の目的は、敵の王將を擒にするに在り。

(双方の持駒) 一方には王將、他の一方には玉將と刻せし王字に一点を加へたる玉字の方を

（駒の並べ方）

即ち下の如し

香車		歩兵	歩兵					香車
			飛車	角行	桂馬	銀將	金將	歩兵
桂馬	銀將	金將	王將	金將	銀將	桂馬	香車	
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	

用ゆ。但し優れる方は王將を用ひ、劣れる方は玉將を用ゐるなり。其の他は双方同一にて飛車各一枚、角行各一枚、金將各二枚、銀將各二枚、桂馬各二枚、香車各二枚歩兵各九枚されば双方にて四十枚にて、各自二十枚づゝ用ゐるなり。

（駒の行路）盤面の畫數は八十一あり。九行九列の區劃なればなり。而して王より以下駒の行路は左の如し。

王又玉將は、前後、左右、右斜、左斜、何れも一畫づゝ進退するを得るなり。

金將は、前後、左右、右斜、左斜に進むのみを得。斜に退くを得ざるなり。

銀將は、前進、左右斜の進退何れも一畫づゝ徙ることを得るなり。

桂馬は、前後何れも一畫を間き、三畫目の左右何れの畫へも進むことを得。

香車は、前に遮る駒無くば思ふまゝ適宜に進み得るなり。されど、退くことを得ざるなり。故に槍の異名あり。

飛車は、遮る駒無くば、前後、左右、縦横に、適宜に幾畫にても進退横行するを得るなり。されど、斜行することを得ず。

角行は、進る駒無くば、右斜、左斜、斜行に幾畫にても進退するを得。但し、前後、左右に行くを得ざるなり。

歩兵は、只一畫づゝ前進するを得るなり。

（成駒及び駒の成りたる符號）　自己の使駒にて、王、玉將、金將を除くの外、敵の三畫内へ進入すれば、駒の裏面を表へ返し、成駒と爲るを得るなり。而して成駒符號は左の如し。

飛車の成駒は龍、　角行の成駒は馬、　銀將の成駒は金、

桂馬の成駒は圭、　香車の成駒は杏、　歩兵の成駒はと、

（成駒各自の行路）　此の行路は變じて左の如し。

飛車は、固有の行路を持續し、其の上に一畫斜行進退するを兼ぬ。

銀將は、金將の行路に變ず。

桂馬、香車、歩兵は何れも固有の行路を行くを得ず。更に金將の行路を行くを得。

（駒組大法）　此の法は左の如し。

一　王は早く片付け固むるを專一とす。

一　王は角筋を用捨すべし。

一　王の脇は金銀離るべからず。

一　金銀は歩の頭に止るを見合すべし。金は進むこと早く退くこと遲し。

一　桂は猥りに飛ぶことを見合すべし。遲きときは勝。少し早きときは損となる。

一　香は一ト通りの駒なりと雖も、端の仕掛肝要なり。

一　るは手前にて遣ひ、敵地にて遣ふことよし。

一　端の歩は安りに突くべからず。手後れになること多し。

一　歩二ツより大切にすべし。

一　飛と角との捨場大事なり。

一　駒離れぬ樣に上るべし。

一　敵の歩切れを勘考すること專一なり。

一　手前に歩打つこと大事なり。

一　同手は三度迄を限りとす。

但し、三度に及ぶときには、仕掛の方より換ゆるべし、之れを千日手といふ。

一　相手の持駒を何々と聞ふこと、しば〳〵すべし。

一　駒を駢ぶるとき、貴人の方へ王を駢ぶると心得べし。故に駒には王將と玉將とを設けあるなり。

一　持駒は直ぐに當る樣、又は含みありて打つべし。手なしとて猥りに打つは宜しからず。

一　進んで其駒にて前を圍ひ、前を圍みては仕掛くること、駒組の大意上手の態なり。

一　總じて五筋目、或は端に手あること多し。

一　總じて勝つことを專らとすべからず。手前を全く守り、敗ざることを肝要とすべし然るときは自ら勝に向ふべし。

一　駒組の定法は、双方宜き手を撰んでのことなり。敵定法を離れ仕掛くることありとも驚くべからず。必ず末に差閊あるなり。

（駒落）　同一の技倆あれば、タイヤとて對等にて指すなれど、技力走へば、優れる者は駒數を減じて指し命ふなり。是れを駒落と云ふ。駒落には六枚落、四枚落、二枚落、手合飛、香落、飛落、角行落、左香落、平手四間、平手相掛等あり。

六枚落は金銀四なり。四枚落は兩桂なり。

（詰手）　王將を詰めるとき、詰手の指し方種々幾樣も有るものなり。

劍　舞

劍舞は正氣を發達するに資するものにて、正義雄壯なる詩歌を吟誦し、其の吟聲に合せて劍を揮び舞ふなり。これ武士道發揮世人鼓吹の益あるものと謂ふ可し。さて此の技の起原の歴史上に見ねたるものは漢史にて、彼の鴻門の會に、楚の項羽の臣范增が、人をして劍舞に托りて沛公劉邦を殺さんとせしを見る。我邦にては士大夫中に古く行はれたるならんが、大に行はれしは安政の頃にて、當時江戸の舊幕大學たる昌平校の書生等が醉興に乘じ、帶劍時代にてもありたる故に、詩を吟じてそれに合せ、佩ぶる所の刀劍を拔きて舞ひたり。これが流行の始めになり、吟ずる詩は多くは賴山陽の一作なる兵兒謠、天草洋の詩、不識菴斫機山所

謂る鞭聲肅々の詩等、勇壯慷慨的を用ゐたり。

（吟詩劍舞何れも正義の精神を以てすべき事）今や詩を吟ずるに、艶なる法を設け、舞ふに俳優の所爲す所を加ふるが如きは藝人の所爲なり。吟詩劍舞は拙なりとも、精神旺盛に滿ちたるを此の本意とす。

（吟詩劍舞の定義）劍舞を演ずる定義は、詩歌を吟詠する者は專ら吟詠し、舞ふ者は專ら舞ふなり。さて吟詠する者も舞ふ者も、第一詩歌の意義を識り、殊に作者の述懷の如きは、其の詩歌を作りし時、如何なる境遇に在りて、如何なる心持なりしや否やと、其の心中を我れに體し、作者が國を憂ひて慷慨せしを能く察し、思ひ遣り、自ら其の人の當時を思ひ入るなり。斯くせざれば、何ほど巧みに舞ふとても、決して眞況に迫らぶ。例へば辭世の詩歌の如きは、今將に死せんとする心持あるべく、是れにも亦自ら屠腹せし者あり、或は病死せし者あり、或は刑死せし者あり、各其の意思を異にす。是れ皆それ〳〵心すべきなり。舞ふには刀禮を知らざるべからず。刀禮とは刀劍の取扱方作法にて、腰間より脱するものならば、其の脱し方、置き方、置くべき位置等なり。又拔きて翳し、斫入り斫込み、進退周旋することは擊劍の法に據らざるべからず。全体劍舞は、擊劍を主とし總て武技を心得居る者の餘興なればなり。藝人共の戯れとは大に異なり。斫るには大上段、上段、中段、青眼、八相、下段等の手を用ひ、人馬を薙拂ふ況にて八相を用いるが如し。

（舞場へ出づる心得）先づ袴を裾短に穿き、刀を腰に佩び、吟詠する者も袴を穿き、何れも扇子、手拭、懐紙等を携へて共に出で、吟詠する者は演舞に障らざる片隅に坐を占め、舞ふ者は中央の後邊に坐し、舞者は吟詠に應じて舞ふなり。

（詩の吟じ法）これは種々あれども、多くは左の吟じ方を用ゆ。

鞭聲肅々、　夜渡河曉見、　千兵大牙擁、　遺恨十年、　磨一劍流星、　光底逸長蛇。

右の如く四字、五字、五字。又、四字、五字、五字と切りて吟ずるなり。故に之れを四五五の吟じ法と謂ふ。之れを心得ざる者は、七言の詩は七字づゝ四切に吟ずるならむ、それは通常正しき吟じ方なれども、劍舞に限りては、此の吟じ方は、能く舞ふに合ふなりとす。

（吟詩の聲の抑揚）さて又發聲の抑揚、即ち上げ下げ方は、

鞭聲と地聲にし、聲イーの後のイーを中カン音にし、肅々を下カンにして肅々ウーの、ウ

ーを搖り、夜は中カン、河ヲー大カン、渡るは地音にて、後のウーを搖り、曉に見るは地音、千兵のは中カン、大牙をは大カン、擁するをは地音、遺恨は中カン、十年は大カン、一劍をは中カンにて、後を搖り下げ、磨くは地音にて後を搖り下げ、光底は中カンにて後を上げ長蛇をは大カンにて後を搖り下げ、逸すは中カンにて後を平らにして吟じ了るなり

（舞ひ方）これも同じく鞭聲肅々にて一例を擧ぐべし。

「鞭」にて直立し、体は右向にて面は正面に向き、右の手には扇子を竪に持ち、左の手は刀を抱へて手綱を持つ樣にし。「聲」にて左の足を出し、扇子を鞭に搆へ、それを右後ろへ退き、但し肱の前を半圓形に引くなり。「曉」にて右の足を横に踏み出し、「々」にて左の足を直に踏み出し、「夜」にて下より匕ふが如くに天を指ざし、同時に左の指拇を鍔の上より掛け、少し柄上りに持ち、「河」にて扇子を下ろして地を指ざし、左の方なる柄の上へ持ち來り、右の足を後ろへ退き、扇子を同方向に斜めに密と引き、「曉に」にて右の足を左の足の在る所へ寄せ、扇子を持ちたるまゝ右の手にて袴を持ち張り、左の手は鍔元を持ちて柄上りに矯め、「見る」にて扇子を取直し、頭の上へ上げて延び上り、前方を眺め「千兵の」にて扇子を下ろすと同時に勢ひよく前方を指ざし「大牙を」にて右の足を踏み出し、左向になり扇子をポンと下打に擴げ、右の足を右斜に退き、右の手を伸べて擴げ、扇子を平らに内へ匕ひ抱へ持ち、「擁するを」にて、扇子を閉むると同時に左の足の踵の所へ折込みて坐し、扇子を右の乳の處へ搆へ、左の手を上にし右の手を下にして扇子を持ち、左の足を力を入れて踏み出し、「遺恨十年」にて、右の手にて我が胸を打き、扇子の先にて左の掌を指ざし十年をば屈指して數ふる況を爲し、「一劍」にて扇子を後ろへ投捨て、左の手を刀の鯉口へ掛け、右の手を柄へ掛け、右の足を出して刀を前へ拔き、「磨く」にて右の手と右の足とを退き、腹を張りて刀を研ぐ況を爲す。但し研ぎ方は右の方へ引上げ、又突出し、一、二と以上二回磨ぐ況を爲すなり。それより「流星」にて、刀を右の方へ引き上げ、又左へ引き上げ、左の手にて刀の背を押して矯め「光底」にて刀の柄頭を右の股に附け、左の手を徐ろに「長蛇」をにて刀を振かぶり、斫込み、「逸す」にて刀の柄頭を右の股に附け、左の手を徐ろに頭上に上げ、遠景を望む況を爲して舞了るなり。

（多く劍舞に用いる詩）用ふるものは凡そ左の種々なり。

九月十日。(菅公)中秋十三夜　(土杉謙信)　富士山(石川丈山)　芳野懷古　(藤井竹外)
題不識菴撃機山之圖　(頼山陽)　泊天草洋　(同上)　題兒島高德題詩櫻樹圖　(齋藤監物)
懷古　(李太白)　江南春　(杜牧之)　詠日本刀　(大鳥圭介)　失題　(橋本左内)
絶命詞　(森行宗)　劍舞謠　(安積武貞)　述懷　(武藤道之輔)　前兵兒謠　(頼山陽)
偶惑　(西郷隆盛)　偶成　(大橋訥菴)　失題(無名氏)　壯士別　(西郷隆盛)
戊辰作　(小松帶刀)　辭世　(河野顯三)　健兒詩　(石川文莊)　逸題(川邊元吉)
出郷作　(江藤新平)　辭世　(西郷隆盛)　無題　(吉村寅太郎)　題各舍壁　(雲井龍雄)
失題、一名幾月　(逸名)　戊辰從軍　(板垣退介)　失題(江藤新平)　失題(久坂迪武)
題陸戰大捷圖　(藤谷紫瀾)　偶成　(大久保利通)　失題　(三島中洲)　出都作　(頼三樹)
贈吉田松蔭　(橋本左内)　辭世　(大橋訥菴)　漫成　(柳原前光)　棄兒行　(雲井龍雄)
先は以上なり。和歌に合せて舞ふもあり。これは多く扇舞とて、扇子を持ちて舞ふ。

淨瑠璃

淨瑠璃は、人の事跡に節を付けて語るものゝ稱なり。而して之れを三絃に合はすなり。京阪にては義太夫節のみを淨瑠璃と言傳へ來りたれど、是れ淨瑠璃の一部にて、義太夫節の淨瑠璃と言はざるべからず。此の他の淨瑠璃は、今の東京たる地の、江戸なりし頃に作り始めたるものにて、清元、常盤津、富本、一中などの諸節起れり。此の他に新内、源氏節、浮れ節(浪花節)など、等しく人の事跡に節を付けて語り、三絃に合するもの故、淨瑠璃に屬す。諸淨瑠璃の起因たる淨瑠璃文は、其の昔し、源義經に侍したる淨瑠璃姫なる者の事跡を、近古に至りて織田信長の侍女小野の阿通(つう)なる者十二段に作りしに起りしとか。而して今の諸淨瑠璃文中、最も古きは、義太夫節の淨瑠璃にて、德川幕府時代に、近松門左衛門作り始めたるを、攝津の天王寺村の農人竹木義太夫なる人語り出し、三絃に合せたりと言ふ。而して後、操(ちゃつ)り人形を使ひて、事跡の身振りを爲させ、語るに合せて動かし、始めて大阪道頓堀なる竹田劇場にて興行せしより、斯道大に行はれしなり。關東の種々の淨瑠璃は何れも其の後に起りたり。

(義太夫淨瑠璃の事跡種類)　これは淨瑠璃本とて、書籍と爲れり、稽古本は五行に爲したる

を以て、五行本とも言ひたり。種類は凡そ左の如し。

菅原傳授手習鑑。　壇浦兜軍記。　朝顔日記。　鎌倉三代記。　羅伽千代萩。　國性爺。
繪本太功記。　本朝廿四孝。　一ノ谷嫩軍記。　奥州安達原。　新版歌祭文。　碁太平記白石噺。
花曇佐倉曙。　艶容女舞衣。　蝶花形名歌島臺。　明烏雪曙。　假名手本忠臣藏。　傾城阿波鳴門。
加賀見山舊錦繪。　御所櫻堀川夜討。　道中膝栗毛。　三十三間堂棟由來。　近頃河原達引。
傾城戀飛脚。　義經腰越狀。　伊賀越道中双六。　玉藻前旭袂。　妹脊山婦女庭訓。
義經千本櫻。　關取千兩幟。　箱根靈驗躄仇討。　阿漕浦鈴鹿合戰。　時雨炬燵。　平假名盛衰記。
忠臣二度目清書。　神靈矢口渡。　近江源氏先陣館。　關取二代鑑。　攝津合邦辻。
祇園祭禮信仰記。　日吉丸稚櫻。　桂川連理柵。　八陣守護城。　深摸樣妹脊門松。
戀女房染分手綱。　播州皿屋敷。　金比羅利生記。　花上野櫻石碑。　彦山權現誓助刀。
岸姫松。等なり。

（さわり）　淨瑠璃を語るには、語り始めを枕と云ひ、詞あり、さわり有り。さわりは聲を街ふ所にて、最も賞美するなり。節には、ギン、ブンヤなど種々あり。左に最も多く賞美するさわり文句二三を揭ぐべし。

○二十四孝十種香之段

モウシ勝頼樣、親と親との許嫁、ありし樣子を聞よりも、嫁入する日を待兼し、お前の姿を繪に畫し、見れば見る程美しい、コンナ殿御と臥添の、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂しみは、繪像の傍で十種香の、煙も香華となつたるか、回向しやうとて御姿を繪には畫しはせぬものを、魂返す反魂香、名畫の力もあるなれば、可愛とたつた一言の、お聲が聞きたい〳〵と、繪像の傍に身を打臥し、流涕焦れ見へ給ふ。

○菅原寺子屋之段

御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子となり、賽の河原で砂手本、いろは書子は敢なくも、散ぬる命是非もなや明日の夜誰か添乳せん、らむうゐめ見親心、劍と死出のやまげこね、あさき夢見し心地して、跡は門火にわひもせず、京は故郷と立別、鳥邊野さして連歸る。

○三勝半七酒屋之段

今頃は半七さん、何處に何してござらうやら、今更かへらぬ事ながら、妾と言ふ者おいな

らば、勇御さんもおつうに免じ、子までなしたる三勝どの、疾より呼入さしやんしたら、半七さんの身持も直り、御勘當もあるまいもの、思へば〳〵此園が、去年の秋の煩ひに、寧死んで了ふたら、斯した難義はあるまいもの、お氣に入ぬと知りながら、未練な妾が輪廻ゆゑ、添臥は叶はずとも、お傍に居たいと辛抱して、是までいたのがお身の仇、今の思に較ぶれば、一年前に此園が、死ぬる心が附かなんだ、堪へてたべ半七さん、わしや此樣に思ふて居ると、恨みつらみは露ほども、夫を思ふ眞實心、猶いや增る憂忠ひ。

（清元淨るりの種類）多く賞するものは、凡そ左の如し。

喜撰。　梅の春。　老松。　落人。　北州。　小紫權八。　吉原雀。　雨乞小町。

高尾懺悔。　高尾。　夕立。　玉屋。　三社祭。　都鳥等なり。

（常磐津淨るりの種類）多く賞するは凡そ左の如し。

小鍛冶。　七草。　將門。　角兵衛。　宗清。　五人囃。　うつぼ。　おつま。

三社祭。　おその六三。　梅川忠兵衛。　關の扉。　乘合船。

（清元、常磐津の淨るり文句）人の最も多く語るは、清元にては梅の春。常磐津にては將門なり。これを一淨るりづゝ左に掲ぐべし。

○梅の春（清元）

春景色浮いて鷗の一イ二フ三イ四ウ、いつか吾妻へつくばねの、波の面此の面の都鳥、いざこと問はん惠方さへ、萬づ吉原さんや堀寶船こぐはつがいに、好い初夢をこつぶとん、辨天さんと添ひぶしの、花の錦の裝り夜具、はたち斗りも積み重さね、蓬萊山と覗ふなる、富士を春中にやかための、しほじり長く居すわれば、ほんに田舍もましばたく、はしば今戸の朝煙り、つゝく竈の賑ふて、千秋樂には民を撫で、万歳樂には命ちを延ぶ、しゆびの松が枝竹ちようの、わたしもる身も時を得て、目出度く此に隅田川、つきせぬ流れ清元の榮へ壽ぶく梅が風幾代の春や香ふらん。〳〵。

○將門（常磐津）

嵯峨や御室の花ざかり、浮は氣な蝶も色かせぐ、廓の者に伴られて、外めづらしき嵐山、それ覺えてか君さまの、袴も春の朧染、朧氣ならぬ殿ぶりを、見そめて初めて恥かしの、森の下露、思ひは胸に、光國さんと言ふことは、其のをり知つて明暮に、女の念が今日の

今、屆いて嬉し此仰せ、疑ひ晴らして下さんせ、やいの〳〵と取すがり赧らむ顔に袖屏風。

（新内）　これも源氏節と共に、東淨るりと云ふ故、淨るりの文句一例を示さむ。

○明烏夢の泡雪

浦里跡を打眺め、涙に暮て居たりしが、ヱ、お情あるお詞なれど、コレ計りは何も忘られぬ、お赦しなされて下さんせ、未だ此上に何の樣な、悲しい苦しい責苦でも、妾や厭やせぬ何なつても、思ひ切れぬ、いつそ添れぬ物ならば、一緒に死たい時次郎さん、殺して下さんせ、死たいわいのふ、昨日の花は今日の夢、今は我身につまされて、義理と云ふ字は是非もなや、勤する身のまゝならぬ、別れとならば今更に、去しとむなき離れぎわ、エ、此苦しみに引代て、アノ二階の三味線は、何時ぞや主の流連に、寢衣の儘に引寄せて、互に語る樂しみも、今宵は引變へ今頃は、何處に何してゐさすんすやら、迚も添れぬ二人が身の上、ハアッ味氣なき浮世ぢやナア、好た男にや妾や命でも、何の惜かろ露の身の、消ば怨もなきものを、コレ綠り惡い女郎に使はれて、思はぬ苦しみ堪忍しや、今宵に限り此

雪は何の報いぞ寒からう、可愛やのう。イエ〳〵わたしや寒うはなけれども、時次郎さんは彼の樣に、若い衆に毆かれさんしたが、おまへは悔しうムんせう。妾しや悲しってならぬわいのう。よう言ふて給つた。そなたまでが其の儀に、主を思ふてたもるもの、妾しが心を推量しや。何の因果で此樣に、いとしいものか、さりとては。

（源氏節）　一に歌祭文とも云ふ。淨るり文字の一例を擧ぐべし。

○佐倉宗五郎子別れの段

お金は始終泣入れど、聲は立じと喰へたる、手拭取て涙を拂ひ、夫は御身の男達、女の云ふ事聞き入るゝ、氣性ならねど親となり、子と生るゝ其中に、夫婦は二世の緣と聞くものを、此世からして生別れ、生木を割るゝ我思ひ、跡で御身は繩付の、科人よとて曳出され死刑の罪に沈むのを、見ながら存命へ居らりよか、身を切る及ばぬ堪へても、羈絆を切るゝ及には無量の悲みあるものを、慈悲と情の去狀とて、貰ふ心は更々ない、領主の苛政や、池浦に憎まるゝ爲め、此地に居られねば、夫婦諸共子供を連れ、此家を立退き影かくし、長らへ居るなら何の樣な、山の中でも厭ひはせぬ、左する心もムんせぬか、又も泣入る妻

の顔、宗吾も今は胸も裂け、不便と思ふ彌増る、涙の雫を袖にて隠し、夫は和女が云ふまでも無く、顔を隠すは易けれども、此百三十六ヶ村の者にまで、佐倉宗吾は強い者、民の爲には柱と頼む人と、敬れしは何の爲の、箇様の時の爲で有ろふぞや、其敬ふ人々を捨て身を隠すなどした時は、人ではないと後指をさゝれ、夫に引更へ此人々に代り、直訴をしたる其時は、死しての後もいさぎよく、例にも虎は死んで皮を殘すとやら、人は死んで名を殘すが、何よりの名譽、諄言云はずに去狀取れ、其上四人の子供をば、何分養育頼むぞや。

琵琶

琵琶は支那より傳來したるものにて、國史に據るに、仁明天皇の承和五年、從五位上掃部頭藤原朝臣貞敏入唐して琵琶の妙典を傳へ、譜數十卷と紫檀紫藤の琵琶各一面を得、歸朝して朝廷に奉れり。是れより後本朝に行はれ、蟬丸、博雅の三位等堪能と聞ゆ、其の後平家琵琶なるもの出づ、即ち平家物語を歌ひて彈きしなり。今行はるゝ所の薩摩琵琶は、此の變種にして、筑前琵琶は薩摩琵琶より出でたる一派なり。歌に於ては異ならざれども、彈調に剛柔の別あり。薩摩琵琶は男子に用ゐられ、筑前琵琶は多くは女子に用ゐらる。剛柔其の好みに任ずること素より然かあるべし。薩摩琵琶の起りしは、鎌倉時代前にあるが如し。島津氏の祖忠久、琵琶法師を使ひて武功を奏せしめしこと古書に見ゆ。舊薩藩士の文弱に流るゝ風無かりしは、琵琶曲興りて力ありしなり。

琵琶の四絃は、春夏秋冬の四季に象り、撥の廣かりたるは風に配し、音律の妙なるは四時の順行して亂れざるに比すとぞ。

（彈調）彈調には、地音、大カン、中カン、謠ひ切り、（單に切とも云ふ）吟がわり、崩れ、等あり。

音律は高雅優麗にして悲壯凛烈なれば、其の餘韻を以てだも克く鬼物をして泣かしむ。

（歌章）歌は原と、今を距ること三百餘年の前、天正年中に於て、島津家中興の祖たる貴久の生父、相摸入道日新公を稱せし人、當時士風の萎靡して振はざるを嘆じ、之れが振興の策を講じ、自ら歌曲を製し、琵琶に奏和せしめ、修文講武の傍ら、士をして謳ひ且つ彈せ

じめしに因す。故に多く忠孝義貞の事跡を基とし、聽者をして感奮措かざらしむ。歌に古歌あり新歌あり。何れも端歌と段物とあり。短き端歌を高尚中の高尚とす。左は古歌各一を掲げて一端を示す。

古歌の部

○春日野（はうた）

春日野に、下萌ゑ出る若草の、歳の戸明けて秋津國、霞み渡れる片岡に、月は殘りて雉子啼く、明けの友づる君が代を、壽き祝ふ初聲に、南山の、榮ゑ久しく松竹の、落葉かき取る諸人の、遊ぶ小川の菊の露、流れも匂ふ五百とせの、よはひを國にゆづる葉の、朝日かゞやく富士の峰、是を蓬萊山とは謠ひけり。七寶の峰は、影を湖水に浸し、樹々の梢もあら磯の、月海上に浮びては、兎も走る波の上、綠樹蔭沈んでは、魚木に登る風情かな、五風十雨の御代の春、四海も靡く時津風、君が治むる御代なれば、幾萬代までと、祈らぬものこそなかりけれ。

○小敦盛（段もの）

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、生者必滅の理を顯す、驕る者の久しからず、貴き人も、遂に亡ぶる習ひなり。されば此度、源氏平家の戰ひに、平家方の一族、母衣大將の御内に、物の哀れを留めしは、無官の大夫敦盛にて、諸事の哀れを留めたり敦盛其日の扮裝は、いつに勝れて花やかに、先づ肌よりは、梅の匂ひの肌寄せに、唐くれなゐを召されたり。練絹に色々の糸を以て、秋の野の草づくし、縫出したる薄紅梅の直垂に、弓手のてつかい、兩面の胴當に、萌黄おどしの鎧きて、鍬形打つたる兜の緒を締め、鎌倉作りの太刀佩かせ、二十四さしたる染羽の征矢を負ひ、塗籐藤の弓を持ち、連錢足毛なる駒に梨地の蒔繪したる、白覆輪の鞍を置かせ、御身輕げに召されしは、さも勇ましく見ゑにける。御一門とおなじく、主上の御供めされ、濱に下らせ給ひしが、敦盛御運の末の悲しさは御父經盛卿より讓り給ひし、さいだと稱へる、かん竹の用笛を、内裏に遺れ給ひしが、若君樣の悲しさは、捨ても御出あるならば、かほどの事はあるまじに、敦盛此笛を遺れおく事、は平家末代の恥辱と思し召し、取りに歸らせ給ひしが、かやうに時刻を移す。その暇に

御一門の、御坐船も兵船も、遙の沖に押出す。痛はしの御事やな敦盛は、せん方無くも磯屋の方を心かけ、駒に任せて落ちさせ給ふ。心の中こそ哀れなり。是は扨置き爰に又、武藏の國の住人、篠黨の旗がしら、熊谷の次郎直實は、此度一の谷の合戰に、先陣を承はれば、末ださまでの功名も極めず、無念至極は無かりけり。哀れ此處に勇士の通れがな、よき敵もあらば押並び、引組んで功名せばやと思ふ折節、敦盛を目にかけ、駒引寄せ打乘りて、濱邊をさして急ぎ行く。直實やかて、大音を揚げて名乘る樣、それに落させ給ふは、平家方にてもよき御大將と見奉る。斯く申すそれがしは、武藏の國の住人、篠黨の旗がしら、熊谷の次郎直實と申す者なり。源氏方にても、隱れなきよき敵にて候、きたなくも敵に後ろを見せ給ふやな、いざ引返して御勝負候へ、見參せんと、扇を揚げて招かるゝ。痛はしや敦盛は、熊谷とは聞ながら、落つる味方の兵船を心かけ、駒を早めて急がるゝ。さる程に、敦盛遙の沖を御覽ずるに、御坐船間近く寄せければ、斜ならずよろこび、腰より日の丸の扇を出だし、沖なる船を招かせ給へば。船中の人々其うちに、門脇殿は御覽じて、伊賀の平内左衛門基國を召され、いかに基國あれを見よ。母衣掛武者の船を招くは、左馬頭行盛か、又は無官の大夫敦盛か、いづれか見よとの御掟なり。悪七兵衛景清承り、某見定め申さんと、白柄の薙刀おつ取り杖につき、舷につと立あがり、兜を傾け磯邊の方を、つくゝと打守り、嗚呼痛はしの御事や、何とて御坐船に、召後れさせ給ふやな、參議經盛卿の御子、無官の大夫敦盛卿にて渡らせ給ふ。御馬の毛色鎧の袖印に至る迄、違ふ所はましまさぬ、嗚呼痛はしやと申上ぐれば、門脇殿聞し召し、敦盛ならば此船を、早く磯邊に寄せよとの御掟なり、水手梶取り畏まり、遽に櫓楫を取直し、船を磯邊に寄せんとすれど、此中より吹續きたる、此風の烈しきに、名殘の浪は今日も立ち、風に競ひて浪は香車の如くなり。白浪世界をあばき、眞砂を天に揚げければ、宛ら雪の山の如くなり。小船ならば自から、弓手妻手にも押廻さるゝものなるに、殊に勝れし大船に、しかも大勢は召されたり。次第〳〵に出れども、逆まく浪にせかれつゝ、磯邊に寄るべき樣は更に無し。敦盛は此有樣を見て、最早叶ふまじと駒を泳がせ、船に乘らんと思召し、駒の手綱を搔操て、海中へサッと駈入り、浮きつ沈みつ、一町ばかりは出たりしが、駒逸物とは申せども、逆巻く浪にせかれつゝ、泳ぎかねてゞ見ゐにける。直實此由見るよりも、大音あげて呼はるやう、いかに平家方の御大將。御坐船遙に程を隔てた

り、しかも浪風烈しきに、よもや逃れさせ給ふまじ。いざ引返して御勝負候へ。返し給はぬものならば、某長指を射て參らせんと、弓に矢を打つがひ、そゞろに引いてかゝりける。敵盛は駒の手綱を引とゞめ、此處を逃れんとせしに、斯く運の窮まる上は、儻も直實がさび矢に射とめられなば、平家末代の恥辱と思召し、いざ此處にて勝負を決せんと、合圖を爲して駒の手綱を引返し、海中よりザッと駈上り、染羽の鏑矢打つがひ、斯さぞ詠じ給ひける。

梓弓矢を差しわけて引くときは返す心を知るかその君

と遊ばし給へば、熊谷も心ある弓取なれば、ハッと心に徹へ、双の鎧を蹴ばらつゝ、頓て返歌に、

いたつきのはやはづれんと思ひしに矢といふ聲にたちぞ止まる

と、返歌を爲して、心靜に待ちにけり。

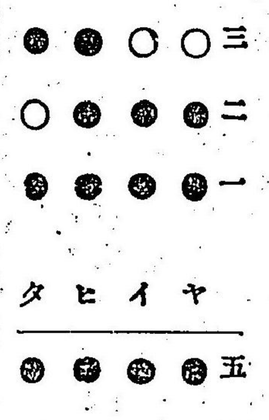
尺八

尺八は我が邦固有の樂品なり。これを吹くには十二の律呂に叶へる孔の開閉を知らざるべからず。笛の音孔は五個あつて、其内、左に五と記せしは裏孔なり。

（十二律譜）十二律の譜音に充てたるは左の如し。

フ。ホ。ウ。エ。ヤ。イ。ヒ。タ。ラ。ル。レ。ロ。

圖にて示せば左の如し。



（音孔の開閉）十二の音、何れにでも連續するときは左の如くするなり。

フ音は二孔。　ホ音は二孔。　ウ音は四孔。　エ音も四孔。
ヤ音は五孔。　イ音は二孔。　ヒ音は三孔。　タ音も三孔。
ラ音も三孔。　ル音は二孔。　レ音も二孔。　ロ音は一孔。

（尺八笛の持ち樣及び吹き樣）　これは上部を左の手にて持ち、拇指にて裏孔を抑さへ、食指にて上孔を抑さへ、無名指にて下孔を抑さへ、兩手の中指と右手の拇指とにて支へ持ち、少しも動かさずに、下唇の端を歌口の内部に當て、姿勢を正しくし、下腹部より呼吸し、管尻は六十度角度に前へ出し、呼吸は輕く吹き込むなり。

（尺八を吹くに發音等の心得）　即ち左の如し。

一　高音は、呼吸を強めて吹く。　二　低音は、呼吸を弱めて吹く。

三　高音に吹くにも、口を締めて吹く事あり。　四　低音も口を締めて吹く事あり。

五　ムツクリと繰りて搖る事あり。　六　音を刻むことあり。

七　短音を再び吹く事あり。之れを當りと云ふ。　八　一拍を休ずる事あり。

九　連續することあり。　十　拍子の二分一音を早く吹くことあり。

十一　一拍子音を引いて吹くことあり。　十二　一句の切にて呼吸する事あり。

篠　笛

篠笛は横笛より出でたるものにて、神樂には必ず用ゆ。此の笛は一、二、三、三半、四、四半、五、五半、六、七、八、九の十二本あり。即ち十二律具はりたるものにて、一より四半まで　六律の音を具へ、五より九まで六呂の音を備へ、誠に正しきものなり。されば此の十二本の笛を適用すれば、何にても吹奏するを得ざること無し。

（小孔の通名）　篠笛には小孔七つあり。これは指にて抑へ、又、開くる爲めの孔なり。吹く孔は別に大孔にて一つあり。これを歌口と云ふ。さて吹くとき、右の端にある孔を一と云ひ、其の左を二、次を三、四、五、六、七と呼ぶ。之れは一般の通名なり。

（音の事）　音には、筒音と、挫ぎ音とあり。又、敲く音もあり。筒音は、笛の筒より出づる笛音を云ひ、挫ぎ音は、笛の吹き終りに、左右の指にて小孔を抑へ、挫ぐ如くに、ヒ・ヒー、ヒと發す音なり。敲く音は、ヒー、ヒ……と聞ゆる音なり。

（天地人の姿勢）　笛を吹くときの姿勢は、頭を正直にし、右の肱を上げ、左の肱は少し下げ笛を平らにして高低なく一文字に持ち、頭を天とし、左の肱を地とし、右の肱を人とするなり。

（十二本一組の理由）　篠笛は一通りにて無く、斯く一より始めて十二本あるは何故ぞと云ふに、一より二、三と漸々低音より高音に上ることにて、恰もハモニカの孔の低音より高音に上るが如し。これは天性聲音高さ人、低き人、中位の人、それ〳〵、我が聲音の度に合ふ笛を用ゐるやうにしたるものなり。此の内、一と二とは最低音故、あまり用ゐず。多く三より九までを用ゆ。

（笛の長さと番號との事）　笛は一號が最も長くして、漸々二三と上り行くほど短くなり、九號は最も短し。十二本なれども、前に言ひし如く、間に半の物三本ある故に九號止まりとなるなり。番號は笛の歌口の詰まりの外に、燒印にて示しあり。

月琴

月琴は、明清樂器中の一樂器なり。これと明笛、胡琴と三樂器を用ゐ、詩歌に合奏するなり。月琴は圓き桐製の胴故に滿月形と視て月琴と名づく。絃は二絃づゝ上下に架く。太き絃より發する音は低音にて、細絃より發する音は高音なり。而して發音するには鼈甲製の義甲を用いて彈ず。

（月琴の韻譜）　低音の韻譜は左の如し。

上　尺　工　六　五　合　凡　乙　四

高音の韻譜は左の如し。

仕　伬　仜　伏　伍　倫　低　仫　伽

（彈奏法）　これは正坐して月琴を輕く膝に上せ、左の手にて棹を握り、右の手に義甲を持ち蛇皮を張りたる胴頭より垂れて彈くなり。而して徽柱と徽柱との間の音所を、指の腹にて輕音重音の適度に抑ゆるなり。此の抑へ方の巧拙に依りて、發音に好否を生ずれば抑へ加減に習ふべきことなりとぞ。又、胴面の甲即ち仕、伬の如き篇附の韻譜を彈くとき食指胴かざれば中指又は無名指を隨意に用ゐるも可なりと云ふ。

（雅曲の歌）　明清樂の雅曲の歌の名は左の如きものなり。

韻頭、　算命曲、　九連環、　抹梨花、　剪々花、　四季、　紗窓、
哈々調、　月花集、　久聞調、　賣脚魚、　鳳陽調、　魚心調、　平和調、

漫波流水、三凡調、金線花、將軍令、等。

されど今は、唱歌、軍歌、俗曲にて合せて彈くこと行はる。

（曲譜音の發音）此の一例として、算命曲の發音を、左に記すべし。

上一尺工六一工一、　工一六工上尺一工尺一、　尺六工工上尺工尺、　（四仕伏仕四合一四合一）此の括弧の内又一回返すなり。

（算命曲の歌）此の文句は左の如し。これを一例として掲ぐ。

祖在房中。　繡吓繡花鞋吓忽听門外算命先生

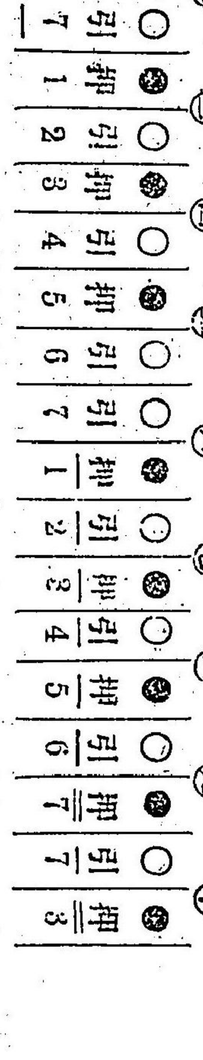
（吓了一聲。）又

風琴

風琴には二種あり。單に風琴と云ふは學校に備へある風琴のことにて、今一種手に持ち奏するものを手風琴と云ふ。樂譜は別に手風琴との異り無し。手風琴は樂器簡易にて、汎く多く用い行はるゝを以て、聊かそれを示すべし。風琴の起りは尤も西洋にて、手風琴は獨逸國人の發明せしものなり。携帶に便なる故に大に行はる。又、練習も容易なり。

（手風琴）此の樂器は、十二の異音を有し、低音次中音備はり、ストップの設け有りて、音の調和を自由ならしめ、面白き樂器なり。而して價も高からず。

（音譜）此の器を取扱ひて奏曲するには、先づ音譜を知らざるべからず。音譜なるものは、其の曲の音の強弱・高低・調子の緩急等を精密に示したるものなり。就ては風琴の鍵盤・鍵の番號の數字も知らざるべからず。されば先づ次に記す樂器面の説明を合点すべし。



右に圖示せしは、一より十までの鍵を押し、鞴を引伸ばし押縮めて發する二十異音の階名にて、○は鞴を引伸ばし、●は押縮むることを示せしなり。

○第四圖　風琴

（音符）これは音の長短緩急を示す符なり。これは、全音符、半音符、四分音符、八分音符十二分音符、三十二音符等を以て區別す。

一　全音符とは、時計の振子の四振の間、一イ二ウ三イ四オと數へ唱ふる間なり。されば半音符を二個合したる長さ緩さなりと知るべし。

二　半音符は、全音符の二分の一にて、四分音符の二倍なり。

三　四分音符は、全音符の四分の一、半音符の二分の一にて、八分音符の二倍なり。

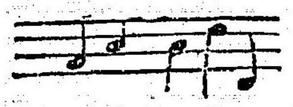
四　八分音符は、全音符の八分の一にて、十六分音符の二倍なり。

五　十六分音符は、全音符の十六分の一にて、三十二音符の二倍なり。

六　三十二音符は、全音符の三十二分の一にて、十六音符の二分の一なり。

音符には、有聲音符と無聲音符とあり。其の有聲音符は數字にて示し、無聲音符は○にて記し、休止することを示す。此の休止符の長短緩急なる、全音、半音、四分音等も、有聲音符に同じ。

（音譜の心得）西洋傳來の音譜は、横に四線を引きたる上圖の如きものにて、多くは數字譜



を用ゆ。

これは、

○五
●五　○三
○三

4/4

又

四　四
五●五
2/4

の如し。譜の始めなる左端縦線外に4/4と記しあるは四拍子（又四舉動にて）、2/4二拍子、3/4は三拍子なり。

拍子）拍子の意義は左の如し。

一　四拍子は、一イ、二ウ、三イ、四オと數へ唱ふるだけの間、連奏するなり。

二　三拍子は、四拍子の四分の三間、連奏するなり。

三　二拍子は、四拍子の二分の一間、連奏するなり。

（附加音符）樂譜中の數字の右傍に●点あるは、左なる數字音符の一分一符號の價値を有するなり。之れを附加音符とす。

（單縦線）樂譜の一拍子の一區毎を限る細線なり。これは音符を線間に配置して割合を示す

（複縦線）　これは樂曲の終止を示すなり。形ちは▌なり。一に終曲線とも云ふ。

（返復記號線）　これは▌•線にて始め、其の反形なる•▌線にて終る。▌•• ••▌此の左右二線の間の樂譜を繰返して奏することを示すなり。

（返始記號）　此の記號は、𝄋なり。これは返復記號を越へて、復び繰返すことを示す。

（終止記號）　の此の記號は、（•なり。これは奏曲を繰返して、譜の中途にて終るを示す。

（連合符）　此の記號は、（なり。これを弧線と云ふ。音符幾つにても。要する丈けを繋ぐなり。要は、同音符或は異りたる音符を一拍子に、一音に奏するを示すなり。

（半高音の符號）　これは數字の左に※を附するなり。さすれば半音だけ高くなるなり。

（樂譜）　一例として、唱歌の君が代譜を左に示す。

四五五五	四五三一	五六七一	六七五五	四五五五	四五三一	七六七一	
いさぎよき	なりてー	こけのー	せーすー	ゃーーーて	ちよに	ゃちよに	いしのー

四五五五	四五三一	五六七一	六七五五	五五四三一			
いさぎよき	なりてー	こけのー	せーすー	ゃーーーて			

右の一は壹に非ず。一音符分引つぱるなり。又數字の下に一線あるは、二分一時間に急速に奏するなり。されば若し、下に二線あらば四分一時にて、尙ほ早く短くなるなり。

喜劇

喜劇とは俗に俄と云ふ滑稽好笑を主とせる一種の遊伎にして、酒席又は祭日等に行ふ。京阪地方にては俄と云ひ、東京にては茶番と云ふ。大阪俄は年を逐ふて發達し、今や全く一の技藝となれり。元來俄は滑稽を主とすれども、文學上にいふ處の眞の滑稽にはあらで、單純なる好笑を目的とし、當込、落等も極めて不自然にして眞の妙味を欠くも、古人の作には間々見るべきものあり。芝居と同じく時代、世話に分れ、院本即ち淨瑠璃より來るものを時代、時事和當込みたる際物を世話と呼べり。筋の多くは卑近なる下等社會の狀態を寫し、借金取